

# TOKYO FILMeX 2024

11.23 Sat - 12.1 Sun 第25回東京フィルメックス  
会場 丸の内TOEI・ヒューマントラストシネマ有楽町

主催: 特定非営利活動法人東京フィルメックス / 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(映画祭支援事業)、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーフカウンスル東京【芸術文化魅力創出助成】  
特別協賛: シネマイニエティール / 協賛: デジタメ、シマフィルム、コネクション、KODAK / 協力: アネ・アランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope

提携企画: Talents Tokyo 2024

主催: 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーフカウンスル東京、タレントトーキー実行委員会 / 提携: ベルリナーレ・タレント(ベルリン国際映画祭) / 協力: ゲーティンスタイトリート





Want the film look?

**SHOOT  
FILM.**

[kodak.com/go/motion](https://kodak.com/go/motion)

INTERNATIONAL FILM FESTIVAL

T O K Y O

FILMeX

第25回東京フィルメックス

2024 11/23(sat)–12/1(sun) (全9日間)

for the bright future of cinema

公式カタログ TOKYO FILMeX 2024 OFFICIAL CATALOG

## 開催概要 SUMMARY

**名称** 第25回 東京フィルメックス / TOKYO FILMeX 2024  
**期間** 2024年11月23日(土)～12月1日(日)  
**会場** 丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町  
**主催** 特定非営利活動法人東京フィルメックス  
**共催** 朝日新聞社  
**助成** 文化庁文化芸術振興費補助金(映画祭支援事業)、  
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】  
在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ

**特別協賛** シネマイニユテイル

**協賛** デジタメ、シマフィルム、コネクション、KODAK

**協力** アテネ・フランセ文化センター、東映、東京テアトル、東京学生映画祭、Festival Scope

(提携企画 Talents Tokyo 2024)

**主催** 東京都、公益財団法人東京歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレント・トーキョー実行委員会

**提携** ベルリナーレ・タレント(ベルリン国際映画祭)

**協力** ゲーテ・インスティトゥート

**上映プログラム** 東京フィルメックス・コンペティション …… 10作品  
特別招待作品 …… 11作品  
メイド・イン・ジャパン …… 4作品  
プレイベント:今だけ、スクリーンで!東京フィルメックス25年の軌跡 …… 6作品

### 【関連企画】

- ①『Some Strings』特別上映会
  - ②現代ドイツ映画作家シリーズ(特別編)ペーター・シャモニ 日本未公開作上映
  - ③アモス・ギタイ監督「家」三部作一挙上映 …… 5作品
- 全36作品

**Title:** TOKYO FILMeX 2024 (25th Edition)

**Dates:** November.23 (Sat.)-December.1 (Sun.),2024

**Venues:** Marunouchi TOEI, Human Trust Cinema Yurakucho, (Talents Tokyo 2024) Yurakucho Asahi Hall

**Presented by:** TOKYO FILMeX Organizing Committee (Non-profit Organization)

**Co-presented by:** The Asahi Shimbun Company

**Supported by:** Agency for Cultural Affairs, Government of Japan, Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture  
Ambassade de France au Japon / L'Institut français du Japon

**Special Supporter:** Cinema Inutile

**Sponsors:** digitame, SHIMA FILMS, Connections, KODAK

**With the cooperation of:** Athénée Français Cultural Center, TOEI, Tokyo Theatre, Tokyo Student Film Festival, Festival Scope

**"Talents Tokyo 2024" co-organizer:** Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), and Talents Tokyo Organizing Committee

**"Talents Tokyo 2024" in Cooperation with** Berlinale Talents

**"Talents Tokyo 2024" in Collaboration with** GOETHE-INSTITUT Tokyo

**Programs 2024**

**TOKYO FILMeX Competition:** 10 films

**Special Screenings:** 11 films

**Made in Japan:** 4 films

**Pre-Event: A Cinematic Journey on the Silver Screen:**

**25 years of TOKYO FILMeX:** 6 films

**Side Events:** 5 films

**Total Number of films:** 36 films

03	サポーターズ・クラブのご案内 TOKYO FILMeX Supporters Club Membership	33	プレイベント
04	第25回東京フィルメックス コンペティション審査員紹介 Members of the Jury, TOKYO FILMeX 2024 Competition	35	第25回東京フィルメックス関連企画
05	第25回東京フィルメックス コンペティション TOKYO FILMeX 2024 Competition	36	Talents Tokyo 2024
16	第25回東京フィルメックス 特別招待作品 Special Screenings	37	協力者一覧 Acknowledgements
28	第25回東京フィルメックス メイド・イン・ジャパン TOKYO FILMeX 2024 Made in Japan		

## 主催者からのメッセージ

第25回東京フィルメックスで上映する作品の監督はじめ作品関係者に御礼申し上げます。  
そして、開催に尽力して下さった、ご協賛企業・助成団体の皆様、ご協力頂きました企業・団体の皆様、  
そしてサポーター会員の皆様にも深く感謝申し上げます。

映画作家を支える映画祭のプラットフォームを堅持するために、  
今後とも皆様の変わらぬご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

## *A Message From the Organizers*

We'd first like to thank the directors and those involved with the films that will be screened  
at TOKYO FILMeX 2024.

We'd also like to thank our co-presenter, supporters, sponsors, cooperating organizations,  
and supporting members.

We kindly ask for the honour of your continued level of support  
moving forward so that we may uphold the film festival platform which sustains the filmmakers.

# 第25回東京フィルメックスをご支援いただいた方々

TOKYO FILMeX 2024 Supporters Club Members & Donors

東京フィルメックスの趣旨に賛同し、活動を支援頂きました第25回東京フィルメックスサポーター会員、ご支援者の皆様に御礼申し上げます。

MIZUNO MIKI	杉原賢彦	坂本明	阿部雅昭	陳俊亦	久米良和
タカハシマサトモ	王心怡	葛野章	市山久美子	宮善善文	石川健
つむじ風 (操行ゼロ)	李笑竹	渡邊久三恵	小野道子	森田聖美	相馬敬徳
眠眠スネーク	西田康祐	水口勝秀	久保幸子	小林美恵子	櫻井秀則
野中由紀子	景山咲子	瀧澤美和	松浦秀明	反町和宏	諏訪智岳
北真理子	渡辺健太郎	大間達夫	熊谷睦子	樽井智	芳賀裕子
高野裕之	南泉雅昭	飯田昌宏	反町弘子	渡邊瑞帆	
森田裕介	金谷重朗	松崎理	石木秀明	柳浦俊	
高橋博美	福嶋真砂代	福田美知子	村越加代子	本多梢	
加藤初代	胃甲貴子	清水志乃	橋口和也	小林藍	
大塚香織	加藤圭子	市山和男	佐々田悠斗	井ノ上靖	
佐藤京子	太田朗子	山本京子	風呂本諒亮	長崎徳恭	
濱崎真由子	福島聖高	高野英子	西池陽一	山口和広	

※※順不同。  
上記の他、98名の会員の皆様からご支援を頂きました。  
(10月20日現在)

## 特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会 ミッション・ステートメント (令和6年11月現在)

### 存在意義 (役割)

映画の限りない創造性と未来の可能性を追求し、人間性や社会性を深く表現する映画文化は私たちの暮らしに潤いをもたらすという理念のもと、その意義を多くの人々と分かち合い、平和で心豊かな生活の実現に資するために存在します。

そのために、当会は映画という芸術を通じて国際文化交流・人材育成を目指し、国際映画祭「東京フィルメックス」をはじめ、映画の上映や関係する人材の教育等を通じて、以下の役割を果たします。

- 国際映画祭の真価を追求し、東京と世界から必要とされる機能を担います
- 東京という都市の魅力をより活かすイベントを展開します
- アジアを中心に世界で起こりつつある映画表現の新しい動きを幅広く紹介します
- 内外の映画人や観客が集う場として、様々な交流や人々の参画を生む触媒となります
- 創造性溢れる作家を育てます
- 種々の地域独自の文化を尊重し、また国際的な観点を導入し、広い視野を提示します
- 優れた創作である映画を通じて、見るものの価値観を醸成させる場を目指します
- NPOの特徴を生かし独立的な立場で、既存体制を補完する形で映画文化に貢献します
- 地域の映像文化の振興に資する映画祭を実施・支援します
- 文化としての映画を、より多くの人々にひらくよう務めます

### 目指す方向性 (特徴・ビジョン)

東京フィルメックスは、以下の3つのコンセプトを実現する映画祭を目指します。

これら役割を果たすため、当会は国際交流、および社会と映画文化をつなぐスペシャリスト集団を目指し、担い手として紹介する企画に責任を持ち、運営に際し法令を遵守し、公正であるよう務めます。

### 「未来・創造」

「映画の未来」に向かってチャレンジする作家、作品を支援します。表現の可能性に挑む、刺激的で創造性に富んだ新鮮な作品を紹介します。

### 「運動・発信」

新旧様々な日本映画を広く海外に紹介し、東京に世界の映画の今を提示する。双方向で新しい映画の流れを提案します。海外の関係機関、国際映画祭等と世界的なネットワークを築き、国際的に意義深い企画を実施します。

### 「教育・交流」

お客様と作り手、作り手同士の交流を推進し、出会いの場を演出します。豊かな心の醸成を目指し、未来の映画ファンの育成を推進し、ボランティアなど学習の機会も提供します。

## 第26回 東京フィルメックス サポーターズ・クラブ会員募集のご案内

オンライン決済でのサポーター入会も受付中!

あなたのご支援が映画作家を育てます。国際映画祭にご参加ください。●年会費10,000円

※第26回の募集締切は2025年10月末日です。

### ★会員の皆様には

- メールマガジンを不定期でお届けします。
- その他、会員限定のイベントやプレゼントなども企画中です。
- なお、2025年10月末日までにご入会いただいた方には、
- 東京フィルメックスのチケット先行発売などを予定しています。
- 東京フィルメックス公式カタログにお名前を掲載いたします。(ご希望の方のみ)

クレジット決済によるオンライン入会も可能です。公式サイト内「支援する」から「サポーターとなって支援する」へお進み下さい。

お問い合わせ先 映画祭公式サイト: filmex.jp E-mail: npo@filmex.jp TEL: 03-6258-0333

## 第26回東京フィルメックス開催! 会期: 2025年11月22日(土)～11月30日(日) (予定)

プログラム詳細は10月上旬頃に公式サイトにて発表予定。 TOKYO FILMeX 2025 Dates: Nov.22 - Nov.30, 2025

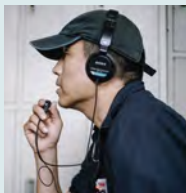
### ご支援 (寄付) のお願い

映画祭等の事業の実施や団体の運営などのNPO活動に対して、皆様のご支援をお願いしております。当会では、年間あたり3,000円以上の寄付者100人以上を獲得を目指しています。当会のミッションに共感していただいた皆様のご支援をお願い申し上げます。サポーターの方によるご寄付のお申し出も承ります。皆様からのご支援は、映画祭開催のための費用として活用させていただきます。ご寄付は1口3,000円からお受けしており、何口でもお受けいたします。公式サイト内「支援する」→「寄付をして支援する」からクレジットカードで寄付が出来ます。

# 第25回東京フィルメックス・コンペティション審査員紹介

## TOKYO FILMeX 2024 Competition Jury

### The Jury Members



**ロウ・イェ** LOU Ye  
中国 / 映画監督 China / Film Director

1965年、上海生まれ。上海大学美術学院にてアニメーションを学び、その後北京電影学院にて映画制作を学ぶ。94年、初の長編劇映画「デッド・エンド / 最後の恋人」を監督するも、中国国内では2年間の上映禁止となる。2作目「ふたりの人魚」(00)はロッテルダム映画祭タイガー・アワード、また第1回東京フィルメックスで最優秀作品賞を受賞したが、同じく中国では上映禁止となる。現代中国映画における古典とみなされる同作は、2021年に自身の監修の元でオリジナルの16mm A-Bネガより4K復元された。

続く「パープル・バタフライ」(03)、「天安門、恋人たち」(06)、「スプリング・フィーバー」(09)は全てカンヌ映画祭コンペティションに出品。パリを舞台にした「パリ、ただよう花」(11)はヴェネチア映画祭にて上映された。「二重生活」(12)は再びカンヌ映画祭のある視点部門に出品。「ブラインド・マッサージ」(14)はベルリン映画祭コンペティション部門で上映され銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞。「シャドウプレイ」(18)は台北台湾金马獎で、「サタデー・フィクション」(19)はヴェネチア映画祭にて上映された。

Lou Ye was born in Shanghai in 1965. He studied animation at the Shanghai School of Fine Arts and then filmmaking at the Beijing Film Academy. His debut film, "Weekend Lover" (1994), was banned for two years in China. He attracted international acclaim with his second feature "Suzhou River" (2000), which won the Tiger Award at the International Film Festival Rotterdam. It too was banned in China. The film, now considered a classic of modern Chinese cinema, was restored in 4K in 2021, under the supervision of Lou Ye himself, working from the original 16mm A-B negative. His next three films: "Purple Butterfly" (2003), "Summer Palace" (2006), and "Spring Fever" (2009) were all selected in Competition at Cannes. His Paris-set film "Love and Bruises" (2011) premiered at the Venice International Film Festival. Ye returned to Cannes with "Mystery" (2012), which was selected for Un Certain Regard. "Blind Massage" (2014) premiered in Competition in Berlin and won the Silver Bear for Outstanding Artistic Contribution. "The Shadow Play" (2018) premiered at the Taipei Golden Horse Film Festival. "Saturday Fiction" (2019) was selected in Competition at Venice.



**カトリーヌ・デュサール** Catherine DUSSART  
フランス / 映画プロデューサー France / Film Producer

経営学を学んだのち、広報担当者としてキャリアをスタートさせるも、すぐにプロデューサーに転身。短編映画のプロデュースを経て、テレビと劇場の両方で長編映画やドキュメンタリーの制作に進んだ。1992年にLes Productions Dussartを、1994年にCDPを設立し、これまでに15カ国以上で100本以上の映画を制作している。近年の作品には2024年のカンヌ映画祭カンヌ・プレミア部門で上映されたりティ・パン監督「ボル・ポトとの会合」、ベルリン映画祭コンペティション部門で上映されたミン・バハドゥル・ブハム監督「Shambhala」があり、いずれもアカデミー賞への公式エントリー作である。その他のプロデュース作品にはアモス・ギタイ監督の「Shikun」(24)、「ハイファの夜」(20)、「エルサレムの路面電車」(18)やリティ・パン監督の「すべては大丈夫」(22)、「照射されたものたち」(20)、「名前のない墓」(18)、「エグジール」(16)、「フランスは我等が故国」(15)、「消えた画 クメール・ルージュの真実」(13)、アディティヤ・ヴィクラム・セングプタ監督の「Once Upon a Time in Calcutta」(21)、「Jonaki」(18)、ピッポ・デルボノ監督の「Vangelo」(16)、「Evangile」(16)などがある。

After she graduated from a school of management, Catherine Dussart began her career as a press officer but soon turned into a Producer. She started producing short films and naturally graduated to feature films & documentary productions both for television and cinema. She established Les Productions Dussart in 1992 and CDP in 1994. Since she has produced almost 100 films in more than 15 countries. Her last productions include "Meeting with Pol Pot" by Rithy Panh Cannes Premières 2024, "Shambala" by Min Bahadur Bham Berlinale Competition 2024, both of them are the official entries of their countries to the Academy awards, "Shikun" by Amos Gitai Berlinale 2024. "Everything Will Be OK" by Rithy Panh (Silver Bear Berlinale 2022), "Once Upon a Time in Calcutta" by Aditya Vikram Sengupta (Venice Orizzonti 2021), "Laila in Haifa" by Amos Gitai (Official Competition Venice 2020), "Irradiated" by Rithy Panh (Best Documentary Berlinale 2020), "Graves without a name" by Rithy Panh (Venice, Telluride, Toronto 2018), "A Tramway in Jerusalem" by Amos Gitai (Venice 2018), "Jonaki" by Aditya Vikram Sengupta (Rotterdam 2018) "Vangelo" by Pippo Delbono (Venice 2016). "The Missing Picture" by Rithy Panh which received Un Certain Regard Award at the Cannes in 2013 and was later nominated for the Oscars in the Best Foreign Film category; other credits include "In this land lay graves of mine" by Lebanese director Reine Mitri (DIFF Dubai); "9 doigts" by F. J. Ossang, (Best director award at Locarno 2017); "France is our Mother Country" by Rithy Panh (Fipa 2015); "The Fourth Direction" by Indian director Gurvinder Singh (Official Selection, Un Certain Regard, Cannes 2015), "The Black Hen" by Nepalese director Min Bahadur Bham (Nepal) (Critics Prize, Venice 2015); "Exil" by Rithy Panh (Official Selection, Cannes 2016); "Evangile" by Pippo Delbono (Official Selection, Venice 2016). "Somewhere in Between" by Yesim Ustaoglu Venice 2013.



**ラ・フランシス・ホイ** La Frances HUI  
アメリカ / キュレーター USA / Curator

ニューヨーク近代美術館(MoMA)で映画キュレーターとして活動。これまでにイ・チャンドン、アンドレイ・ズヴィアギンツェフ、フェデリコ・フェリーニ、内田吐夢、ツイ・ミンリャン、ジョニー・トー、ペドロ・アルモドバルといった監督の特集を企画・共催。また、イラン、インド、フィリピン、ラテンアメリカの映画の調査にも参加。2016年にNew Directors/New Filmsの選考委員会に参加し、2020年からは同フェスティバルの共同代表を務めている。サンダンス映画祭、釜山映画祭、FIRST映画祭、ウディネ極東映画祭、香港映画祭の審査員も務めた。

La Frances Hui is Curator of Film at The Museum of Modern Art (MoMA) in New York. She has organized and co-organized retrospectives of film directors including Lee Chang-dong, Andrey Zvyagintsev, Federico Fellini, Tomu Uchida, Tsai Ming-Liang, Johnnie To, Pedro Almodóvar, as well as surveys of Iranian, Indian, Philippine, and Latin American cinemas. She joined the selection committee of New Directors/New Films in 2016 and has led the festival as its co-chair since 2020. Hui has served on award juries for Sundance Film Festival, Busan International Film Festival, FIRST International Film Festival, Udine Far East Film Festival, and Hong Kong International Film Festival.

## 第25回東京フィルメックス・コンペティション

# TOKYO FILMeX 2024 Competition

会場：丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町

Venue: Marunouchi TOEI, HUMAN TRUST CINEMA Yurakucho

世界的に大きな注目を集めるアジアからは、才能ある新鋭たちが次々と登場しています。そんなアジアの新進作家が2023年から2024年にかけて監督した作品の中から、10作品を上映します。また3名からなる国際審査員が、最優秀作品賞と審査員特別賞を選び、11/30(土)に行われる授賞式で発表します。

This year's TOKYO FILMeX Competition will present 10 new films by the best emerging filmmakers in Asia. A Jury consisting of three international film professionals will judge the films in this program, and the following prizes will be announced at the award ceremony on the evening of November 30th.

### 最優秀作品賞

副賞として賞金70万円が監督に授与されます。

**Grand Prize:** The winning film's director will receive 700,000 yen.

### 審査員特別賞

副賞として賞金30万円が監督に授与されます。

**Special Jury Prize:** The winning film's director will receive 300,000 yen.

### 観客賞

11月29日までに上映される全作品が対象になります。

この賞は監督に授与されます。

**Audience Award:** Please take part in voting for the TOKYO FILMeX Audience Award.

This award will be given to the director of the film with the highest score.

### 学生審査員賞

東京学生映画祭主催の「学生審査員賞」は3人の学生審査員がコンペティション部門の作品を対象に審査し、11月30日(土)の授賞式で最優秀作品を発表します。学生審査員の選任から、賞の運営までを東京学生映画祭の手で行います。東京学生映画祭<<http://tougakusai.jp>>

#### 学生審査員

川島佑喜 / 武蔵野美術大学

監督作：「I AM NOT INVISIBLE」(第35回東京学生映画祭実写短編部門グランプリ、PFFアワード2024グランプリ、あいち国際女性映画祭2024ドキュメンタリー部門観客賞)

眞島淳之介 / 東京造形大学

監督作：「翔のいた夏」(第35回東京学生映画祭実写部門審査員賞)

火宮遼哉 / 明治学院大学 東京学生映画祭企画委員

**Student Jury:** Three student jurors will evaluate the 8 films in competition, and the "Student Jury Prize" winning film will be announced at the award ceremony on Sunday, November 30. The selection of the student jurors and the administration of the prize will be undertaken by the Tokyo Student Film Festival.

**Student Jury:** KAWASHIMA Yuki (Musashino Art University), MASHIMA Junnosuke (Tokyo Zokei University), HINOMIYA Ryoya (Meiji Gakuin University)

#### P06 ● 四月／デア・クルムベガスヴィリ

April France, Italy, Georgia / Director: Dea KULUMBEGASHVILI

#### P07 ● ハッピー・ホリデー／スキャンダル・コプティ

Happy Holidays Palestine, Germany, France, Italy, Qatar / Director: Scandar COPTI

#### P08 ● サントーシュ／サンディヤ・スリ

Santosh India, UK, Germany, France / Director: Sandhya SURI

#### P09 ● 女の子は女の子／シュチ・タラティ

Girls will be Girls India, France, USA, Norway / Director: Shuchi TALATI

#### P10 ● ベトとナム／チューン・ミン・クイ

Viet and Nam Vietnam, Philippines, Singapore, France, Netherlands, Italy, Germany, USA / Director: TRUONG Minh Quy

#### P11 ● 黙視録／ヨー・シュウホア

Stranger Eyes Singapore, Taiwan, France, USA / Director: YEO Siew Hua

#### P12 ● 白衣蒼狗／チャン・ウェイリヤン／共同監督 イン・ヨウチャオ

MONGREL Taiwan, Singapore, France / Director: CHIANG Wei Liang Co-Director: YIN You Qiao

#### P13 ● 空室の女／チウ・ヤン

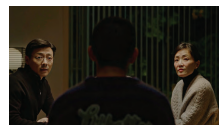
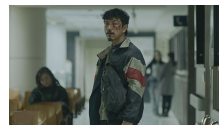
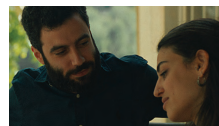
Some Rain Must Fall China, USA, France, Singapore / Director: QIU Yang

#### P14 ● 家族の略歴／リン・ジェンジエ

Brief History of a Family China, France, Denmark, Qatar / Director: LIN Jianjie

#### P15 ● ソクチョの冬／コウヤ・カムラ

Winter in Sokcho France, Korea / Director: Koya KAMURA







## ハッピー・ホリデーズ

Happy Holidays

Palestine, Germany, France, Italy, Qatar / 2024 / 123 min



## 作品解説

イスラエルのハイファに住む、あるパレスチナ家族の物語。作品は4つの章に分かれており、それぞれの章が家族内の別の人物を中心に展開し、それぞれが相互に絡み合う構成になっている。国家や社会や文化がどのように強制的な支配を及ぼし、その圧力がどのように個人の人生を変え、破壊するののかについての一連のヴァリエーションにもなっており、一つの家族(あるいは大家族)の置かれている状況や人間関係の考察を通じて、イスラエルにおけるパレスチナ人とイスラエル人の分断状況や、軍国主義、あるいは女性に対する家父長主義的な制約といった民族や国家やジェンダーをめぐる深い文化的・政治的背景が露わにされていく。2009年にイスラエル人監督ヤロン・シャニとの共同監督作品「Ajami」でカンヌ映画祭のカメラドールのスペシャル・メンションを獲得したパレスチナ人監督スカンダル・コプティの2作目の長編作品(単独監督作としては1作目)。本作はヴェネチア映画祭オリゾンティ部門で上映され、同部門で最優秀脚本賞を受賞した。



監督

スカンダル・コプティ

Scandar COPTI

パレスチナのヤファ出身の映画監督・ビジュアルアーティスト。素人俳優を起用した映画制作で知られ、その手法や技術をニューヨーク大学アブダビ校をはじめ、世界中で教えている。作品は自身の経験や、より広範な社会的・政治的背景を題材にしており、イスラエルにおけるパレスチナ人少数派の状況を独自の視点で描き出している。長編デビュー作「Ajami」は、ヤロン・シャニとの共同監督作で、カンヌ映画祭でカメラドール特別表彰を受賞し、第82回アカデミー賞では外国語映画賞にノミネートされた。また、サザerland・トロフィーの受賞者でもある。

## メッセージ

この作品は、私が10代の頃に耳にした会話から着想を得ました。親戚の女性が息子に「女性に指図されるな」と言ったことが、家父長制の価値観がどれほど根深いかを示していました。大学時代には、イスラエル社会でも同様のパターンが見られ、物語や儀式が家父長制や軍事化を支えていることに気づきました。私は、これらの価値観を持つ人々が「悪い」のではなく、社会規則や人間関係によって形作られた腐敗したシステムに囚われていると理解しました。「ハッピー・ホリデーズ」では、このシステムがいかんにかして人々の価値観を形作るかを探求しています。映画は4つの章で構成され、ラミ、ハンナ、ミリ、フィフィというキャラクターそれぞれに焦点を当てています。観客は各キャラクターの限られた視点を通して物語を体験し、同じ現実を異なる見方で捉えることで対立が生じることを示しています。最終的に、すべてのキャラクターが政治的、社会的な力によって操られていることが明らかになります。複数の視点を提示することで、私は不完全な個人に対する共感を引き起こし、不正なシステムがどのように人々の行動を形作っているかを描いています。

監督 ●スカンダル・コプティ 脚本 ●スカンダル・コプティ 制作会社 ●フレスコ・フィルムズ、レッド・バルーン・フィルム、テサリット・プロダクションズ、イントラムービーズ 共同プロデューサー&パートナー ●トニー・コプティ、シリエス・コプティ、ドロテ・ベインマイヤー、ジャン・ブレア、マルコ・ヴァレリオ・フスコ、ミカエラ・フスコ  
出演 ●マナル・シャハブ、ワファア・アウン、メイラヴ・メモレスキ、トゥーフ・ダニール  
Director ●Scandar Copti Screenwriter ●Scandar Copti Production Company ●Fresco Films, Red Balloon Film, Tessalit Productions, Intramovies Co-Producers & Partners ●Tony Copti, Jiries Copti, Dorothe Beineimer, Jean Brehat, Marco Valerio Fusco, Micaela Fusco  
Cast ●Manar Shehab, Wafaa Aoun, Meirav Memoresky, Toufic Danial

## Notes

The story of a Palestinian family living in Haifa, Israel. The film is divided into four chapters, separate but intertwined, that each focus on a different member of the family. At the same time they form a set of variations that take as their theme how state, society and culture impose their control and how that pressure changes and destroys people's lives on a personal level. Honing in on the conditions and human relationships of a single family, from the core unit and extending out the deeper cultural political background of ethnicity, nation and gender is revealed to us, encompassing not only the divisions between Palestinians and Israelis in Israel, but also military nationalism and limits placed on women by the patriarchy. The second feature film (first as sole director) by Palestinian director Scandar Copti, who won the Camera d'Or Special Mention at the Cannes Film Festival in 2009 for his film "Ajami," co-directed with Israeli director Yaron Shani. "Happy Holidays" was screened in the Orizzonti section of the Venice Film Festival, where it won the award for Best Original Screenplay.

## Director's Biography

Scandar Copti is a Palestinian filmmaker and visual artist from Yafa. Renowned for his unique approach to working with non-actors, he teaches this technique at NYU Abu Dhabi and internationally. His work draws on personal experiences and broader societal and political narratives, offering a nuanced perspective on the Palestinian minority in Israel. Copti's debut feature film, «Ajami,» co-directed with Yaron Shani, received the Camera d'Or Special Mention at the Cannes Film Festival and was nominated for Best Foreign Language Film at the 82nd Academy Awards. He is also the recipient of the Sutherland Trophy.

## Director's Statement

Happy Holidays was inspired by a conversation I overheard as a teenager, where a female relative told her son, "Don't let a woman tell you what to do," revealing how deeply rooted patriarchal values are. In university, I saw similar patterns in Israeli society, where narratives supported patriarchy and militarization.

I realized these people weren't "bad" but trapped in a corrupt system shaped by social norms and interactions. In Happy Holidays, I explore how this system shapes values, leading people to justify actions within it.

The film is structured into four chapters, each focused on a character—Rami, Hanan, Miri, and Fifi. The audience sees the world through their limited perspectives, revealing how conflict arises from opposing views of the same reality.

Ultimately, the characters are shown as pawns of political and social forces. By presenting multiple viewpoints, I evoke empathy for flawed individuals shaped by unjust systems.

## サントーシュ

Santosh

India, UK, Germany, France / 2024 / 127 min



## 作品解説

サントーシュが警察官として働き始めたのは、殉職した警察官の未亡人が職を継承できるという政府の制度のためだった。慣れない仕事に順応していく中で、彼女はすぐに、昔ながらの警察のやり方を体験し、そこに否応なく参加することになる。性差別、汚職、権力闘争、そしてカースト制度や宗教による社会の分断。レイプされ、殺害され、地元の井戸に捨てられた、いわゆる「不可触民」である少女の死の捜査を、ベテランでカリスマ性のある女性警察官、シャルマ警部の指揮の下で担当することになったサントーシュは、彼女を刺激的な指導者であり、フェミニスト的な連帯の拠り所と見なすようになるが……。映画はあくまでもサントーシュ個人の視点を保ちつつ、彼女が何を受け入れ、内面化し、実践できるか、という感情の旅を描いていく。その過程で社会の腐敗を構造的で世代的なものとして描き出し、その複雑なニュアンスを見事な忍耐と厳格さで探求している。カンヌ映画祭のある視点部門で上映。第97回アカデミー賞国際長編映画賞部門のイギリス代表作品に選出されている。



監督

サンディヤ・スリ

Sandhya SURI

ロンドンを拠点に活動するイギリス系インド人の監督・脚本家。2024年のカンヌ映画祭ある視点部門にて劇映画としての長編第一作となる『サントーシュ』が上映され、高く評価された。同作はサンダンス・インスティテュート・スクリーンライターズとディレクターズ・ラボの両方に選出され、BBC Films, BFI, Arteの出資により完成。

初の短編劇映画『THE FIELD』はトロント映画祭の最優秀国際短編映画賞を2018年に受賞し、2019年にBAFTA 最優秀短編映画賞にノミネートされた。長編ドキュメンタリー作品『I FOR INDIA』はサンダンス映画祭の国際コンペティションで上映され、その後も20以上の国際映画祭で上映、いくつかの賞を受賞し、イギリスとアメリカで劇場公開を果たす。また、スクリーンインターナショナル誌のStar of Tomorrow 2023にも選出された。

## Notes

When Santosh's husband is killed in the line of duty, a government policy for widows allows her to assume his job as police officer. As she adjusts to the unfamiliar role, she soon finds herself immersed in and compelled to navigate the outdated practices of policing, which are sexist, corrupt, and rife with both power struggles and the social divisions of caste and religion. Under the direction of an experienced and charismatic female police officer, Inspector Sharma, Santosh is tasked with investigating the death of a young "untouchable" girl who was raped, murdered and dumped in a local well. At first she sees her superior as an inspiring mentor and a source of feminist solidarity, but the reality turns out to be different. Told steadfastly from Santosh's perspective, the film depicts her emotional journey in learning what she comes to accept, what she internalizes, and what changes she is able to enact. There within we witness structural and generational corruption, explored with meticulous attention to detail and remarkable rigor. Screened in the Un Certain Regard section of the Cannes Film Festival and selected as the UK entry for the Best International Feature Film category at the 97th Academy Awards.

## Director's Biography

Sandhya Suri is a British-Indian writer-director based in London. Her debut feature, "Santosh" premiered at Cannes in Un Certain Regard to critical acclaim in May this year. The film, which was selected for both the Sundance Screenwriters and Directors Labs, was financed by BBC Films, BFI and Arte. Sandhya's first fiction short, "The Field", won Best International Short Film at TIFF in 2018, and was BAFTA-nominated for Best Short Film in 2019. Her feature documentary "I For India" premiered in the World Competition section of the Sundance Film Festival, screened at over 20 international festivals and garnered several awards before being released theatrically to critical acclaim in the UK and the US. Sandhya was selected as a *Screen International's* Star of Tomorrow 2023.

脚本・監督 ● サンディヤ・スリ プロデューサー ● マイク・グッドリッジ、ジェームズ・パウシャー、バルタザール・ド・ガネイ、アラン・マカレックス 共同プロデューサー ● キャロル・スコッタ、エリオット・カヤット、ゲアハルト・マイクセナー、ローマン・ポール エグゼクティブプロデューサー ● アマ・アンパドゥ、エヴァ・イエーツ、ディアミッド・スクリムショー、エグゼクティブプロデューサー、ルチア・ハスラウアー、マルティン・ゲアハルト 提供 ● BFI (英国映画協会) および BBC フィルム 協力 ● MK2 フィルムズ、オート・エ・クール・ディストリビューション、ア・グッド・カオス・プロダクション  
出演 ● シャハナ・ゴスワミ、スニーダ・ラジワール  
Written and Directed by ● Sandhya Suri Produced by ● Mike Goodridge, James Bowsher, Balthazar De Ganay, Alan McAleer Co-Produced by ● Carole Scotta, Elliott Khayat, Gerhard Meixner, Roman Paul Executive Producers ● Ama Ampadu, Eva Yates, Diarmid Scrimshaw Executive Producers ● Lucia Haslauer, Martin Gerhard Presented by ● BFI and BBC FILM  
In Association with ● MK2 FILMS and HAUT ET COURT DISTRIBUTION, A GOOD CHAOS Production  
Cast ● Shahana Goswami, Sunita Rajwar

## 女の子は女の子

## Girls Will Be Girls

India, France, USA, Norway / 2024 / 118min



## 作品解説

模範的な生徒である16歳のミラは、ヒマラヤにあるエリート寄宿学校において、学校全体の行動と学習の基準を設定する責任者である監督生に女子生徒として初めて就任する。野心的で潔癖な性格にも関わらず、彼女は新入生のスリに対して初恋の痛みを覚え、最初の欲望に早々に屈してしまう。彼女の初恋と性欲に対する探求は、しかしながら、母親の介入によって思わぬ方向へと向かう。母親とスリの奇妙な親密さはミラの嫉妬と不安を引き起こし、母と娘の間にぎこちなく、重い溝を作っていく……。映画はインド社会の伝統的な価値観、とりわけ家父長制の陰が彼女たちの人生にいかにもまだ影響しているかを検証しつつ、母と娘の間の絶え間ない駆け引きや緊張関係を迫っていく。美化や中傷をすることなく、親密さ、自己承認、裏切りや許しのほんの僅かや瞬間をカメラは捉えている。サンダンス映画祭のワールド・シネマ・ドラマティック部門にて初上映され、主演のプリーティ・パニグラヒの演技に対して特別審査員賞が授与され、同時に観客賞も受賞した。



## 監督

シュチ・タラティ  
Shuchi TALATI

インド出身の映画監督であり、ジェンダーやセクシュアリティなど南アジアのアイデンティティの支配に挑戦する物語を制作している。

初長編映画である「女の子は女の子」は Aide Aux Cinemas du Monde と Sørfond Grant、ベルリン映画祭 Co-Production マーケットの ArtekINO と VFF タレントアワードを受賞し、Gotham Week、ベルリン映画祭 Script Station と Cine Qua Non の脚本ラボにも選出され、

2024年のサンダンス映画祭コンペティション部門で上映された。

短編作品「A Period Piece」は SXSW に出品され、別の短編作品「[Mae and Ash]」は Vimeo スタッフピクになるまでに多くの賞を受賞している。

## メッセージ

「女の子は女の子」は、私が通っていたような表向きには少女たちの「貞操」を守るために少女たちが監視されている保守的な学校が舞台です。男子のセクシュアリティの表現は許され、時には女子に対して攻撃的であり、私たちは従順で自分の体を感じるように指導されています。

それでも、周囲には社会的および道徳的な規範を押し、回避した強くてユーモラスな少女や女性たちがいました。「女の子は女の子」では、私の人生には存在していたに決まっていたスクリーンでは見かけることのなかった、そんな逆境に挑む女性たちについて書きたかったのです。そして、インドの女性たちが手にする物語の幅を広げたいと考えています。

インド（や西洋）の映画では、女性たちの身体は頻りに消されています。胸やお尻は過度に性的に描かれるのに、マスターベーション、生理、女性器などは、嫌悪感や恥をもって扱われます。この例は、少女たちが自分のセクシュアリティ、アイデンティティ、そして声に対して恐れを抱かされる世界で、存在しないかのように扱われることの一環にすぎません。しかし、ミラ（16歳）と母親のアニラ（38歳）は分泌物と欲望を持つ生身の存在です。ミラは、ボディケアを磨りながらマスターベーションをし、鏡の前で鏡を覗き、そして、初めてのセックスの計画をたてます。アニラは母性本能、無性愛が押し付けられる母親役を拒否します。彼女は、娘の若さとボーイフレンドに嫉妬し、自らの欲望を熱心に追求します。彼女は、娘の若さとボーイフレンドに嫉妬し、自らの欲望を熱心に追求します。母と娘は共に率直で逆境に挑むキャラクターであり、必ずしも勝者ではないにせよ、屈せずに立ち向かいます。

この映画は1990年代後半が舞台で、インド経済が西洋の輸出品に開放された時期です。これは、豊かした「西洋性」と真実な「インド性」の間で激しい文化戦争を引き起こしました。女性の身体は戦場となり、ミニスカートを履いた女性もしくは性的に自主性を持つ女性は汚穢のシンボルとなりました。残念なことには現在でも世界の多くの地域で恐ろしいほど共鳴しています。この映画は1990年代のインドに根差し、性別役割、セクシュアリティと抑圧的な家父長制を鋭く観察してはいますが、私は壮大な主張や社会問題のお説教をその気はありません。私にとって重要なのは、ミラとアニラがインド人女性としてのアイデンティティによって定義されず、彼女たちが自分のコミュニティの代弁者になる必要がないことなのです。彼女たちに人間としての幅広い感情を持たせたいと思っています。愛し、失望や嫉妬、悲しみを体験し、彼女たちの特有で唯一無二の存在だけを表現させたいのです。文化全体を代表させる必要はありません。しかし、彼女たちの物語が普遍的なものになる理由であり、それは主に支配的なキャラクターと特権とで与えられる寛容です。

監督●シュチ・タラティ 脚本●シュチ・タラティ プロデューサー●リチャ・チャダ、クレア・シャウーニ、シュチ・タラティ 撮影監督●ジー・ベン 編集●アムリタ・デヴィッド キャスティングディレクター●ディリッパ・ジャンカル アートディレクター●アヴィヤク・カプール 衣装デザイン●シャヒド・アミール サウンド●コリン・ファール・プシ、キャロル・ヴェルナー、ローラ・アルト 音楽●ピエール・オーパーカンプ、スネハ・カーンワルカル 製作●Cies Pushing Buttons Studio, Dolce Vita Films, Crawling Angels Films, Cinema Inutile, Blink Digital, Arte Cofinova, Hummelfilm

ワールドセールス●Luxbox

出演●プリーティ・パニグラヒ - ミラ、カニ・クフルティ - アニラ、ケジャヴ・ビノイ・キロン - シ

Director●Shuchi Talati Producers●Shuchi Talati Richa Chadha, Claire Chagnasse, Shuchi Talati DOP●Jih-E Peng Editor●Amrita David Casting Director●Dilip Shankar Art

Director●Avyakta Kapur Costume Design●Shaahid Amir Sound●Colin Favre-Bulle, Carole Verner, Laure Art Original Music●Pierre Oberkamp, Sneha Khanwalkar Production●Cies

Pushing Buttons Studio, Dolce Vita Films, Crawling Angels Films, Cinema Inutile, Blink Digital, Arte Cofinova, Hummelfilm Cast●Preeti Panigrahi, Kani Kusruti, Kesav Binoy Kiran World Sales●

Luxbox

## Notes

Mira, a 16-year-old model student at an elite boarding school in the Himalayas, becomes the first female student to be appointed as the school supervisor to set the standard of behaviors and learnings throughout the school. Despite her ambitious and fastidious nature, she feels the ache of first love when she meets Sri, and prematurely gives in to her desires. Her exploration of first love and sexual desires, however, takes an unexpected turn when her mother intervenes. Mira feels jealousy and insecurity from her mother and Sri's strange intimacy, creating an awkward heavy rift between them... The film examines how traditional values in an Indian society, particularly the shades of patriarchy, affect women's lives to this day, while drawing close attention to the escalating tension of the mother and daughter's mind game. Without glorification or critique, the camera captures fleeting moments of intimacy, self approval, betrayal and forgiveness. The film premiered at Sundance Film Festival's World Cinema Dramatic program, winning the Special Jury Prize for Preeti Panigrahi's performance, along with the Audience Award.

## Director's Biography

Shuchi Talati is a filmmaker from India whose work challenges dominant narratives around gender, sexuality, and South Asian identity. Her feature film, "Girls Will Be Girls", will premiere in competition at the Sundance Film Festival. "Girls Will Be Girls" has been a recipient of Aide Aux Cinemas du Monde and Sørfond grants, and the ArtekINO and VFF Talent Award at the Berlinale Co-Production Market. It has also been selected for Gotham Week, Berlinale Script Station and Cine Qua Non Script Lab.

Her short film, "A Period Piece", about an afternoon of period sex, was selected for SXSW. Another short film, "Mae and Ash" won numerous awards before becoming a Vimeo Staff Pick.

Shuchi is an alum of Berlinale Talents and her work has also been recognized by the New York State Council for the Arts and Région Île-de-France.

She is a graduate of the American Film Institute. She lives in New York City and is a member of the Brooklyn Filmmakers Collective, the Bitchtra Collective and the Freelance Solidarity Project.

## Director's Statement

Girls Will Be Girls is set in a conservative boarding school, much like the school I attended, where girls are policed, ostensibly to protect their "virtue." Male sexuality is allowed to express itself, sometimes in aggression towards girls; while we're instructed to be submissive and ashamed of our bodies.

Despite this, I saw fierce, funny girls and women all around who subverted and circumvented the social and moral codes. In Girls Will Be Girls, I wanted to write about these subversive women who populated my life but never my screens and to expand the narratives that are available to Indian women.

Films from India (and the west) often erase real female bodies. Breasts and butts are hypersexualized, but masturbation, menstruation, vaginas, etc. are treated with revulsion or embarrassment. This erasure is a part of the way girls are trained to be invisible in a world that's afraid of their sexuality, identity and voice. But Mira (aged 16) and her mother Anila (aged 38) are embodied beings with secretions and desires. Mira examines her vagina in a mirror, masturbates by rubbing up against a teddy bear, and plans her first time having sex. Anila shuns the self-sacrificing, asexual roles mothers are relegated to. She envies her daughter's youth and boyfriend and pursues her desires with fervor. Both mother and daughter are outspoken, subversive characters who emerge defiant, if not necessarily triumphant.

The film is set in the late 1990s, when the Indian economy was opened up to western exports. This sparked fierce culture wars between debauched "westernness" and virtuous "Indianness." Women's bodies became battlegrounds in the war and women in miniskirts or with sexual agency became symbols of corruption. Unfortunately, this is still scarily resonant in many parts of the world today.

Though the film is rooted in the 1990s in India and is a close observation of gender roles, sexuality and oppressive patriarchy, I'm not interested in a grand thesis statement or preaching about social issues.

It's very important to me that Mira and Anila are not defined by their identities as Indian women and that they don't have to become stand-ins for their community. I want to allow them their full range of humanity: to be in love, experience disillusionment, envy and grief, and to represent only their peculiar and singular selves, not their full cultures. Because this is how their stories will also be universal - a luxury mostly reserved for characters from dominant cultures.

# ベトとナム

## Viet and Nam

Vietnam, Philippines, Singapore, France, Netherlands, Italy, Germany, USA / 2024 / 129min



### 作品解説

ベトとナムは20代の炭鉱労働者の青年。彼らは粉塵まみれの画一的な職業生活を送りながら、地下何百メートルの暗闇の中で密かな愛を育んでいる。彼らは共に戦争で父を亡くしており、ナムと彼の母は父のベトコン時代の古い同志バと共に、まだ半分埋まった兵器が点在する森に覆われた中央高原へ父の遺骨を探す旅に出る。ベトは彼らに同行しつつ、ベトナムから密航し国外へ脱出することを計画しているナムの身を案じている……。20年に及ぶ戦争による深い傷がまだ色濃く残る2001年のベトナムを舞台に、恋人同士である二人の炭鉱労働者の姿を通して、戦後のベトナムにおいて、若くしてクィアであること、そして更にはベトナムという国そのものが抱える困難と苦悩を描く。催眠術のように優しく官能的に撮影された美しい作品でありつつも、その表層の下に眠る深く暗い影の部分を炙り出そうとする象徴性に満ちた作品。長編2作目「樹上の家」(19)で注目を集めた新鋭チューン・ミン・クイの3作目の長編である本作は、カンヌ映画祭のある視点部門で初上映された。



監督

チューン・ミン・クイ  
TRUONG Minh Quy

ベトナムの中部高原の小さな町、パンメトート出身。あちこちに住みながら活動し、故郷の風景や子供の頃の記憶、ベトナムの歴史的な文脈を引き出しながら、記憶と現在の瞬間の中で、ドキュメンタリーとフィクション、個人的と非個人的な中間的な物語や映像を制作している。映画作品においては、現実的な即興と抽象的な概念やイメージを組み合わせた実験を行ってきた。2012年に釜山映画祭アジア・フィルム・アカデミーに、2016年にベルリン映画祭ペリナーレ・タレントに参加。これまでの作品はロカルノ、ニューヨーク、クレルモン・フェラン、オーパーハウゼン、ロッテルダム、釜山といった映画祭やLes Rencontres Internationales Paris&Berlinの展示にも出品されている。長編第2作目「樹上の家」は第72回ロカルノ映画祭に出品され、Mubiに「映画祭でプレミアされた優れた3本の映画」と評される。同作は第57回ニューヨーク映画祭、ウィーン映画祭、ナント三大陸映画祭、ロッテルダム映画祭、CPH:DOX、ヨーテボリ映画祭などに出品。2021年、フランス語短編作品「Les Attendants」がベルリン映画祭短編コンペティション部門に出品。2024年、カンヌ映画祭ある視点部門にて長編第3作となる「ベトとナム」が上映された。

### Notes

Two miners in their twenties, Viet and Nam. Their work lives are dusty and uniform, although hundreds of meters below in the dark they nurture a secret love. Their fathers both lost to war, Nam sets out with his mother and Ba, an old Viet Cong buddy of his father's, to seek out his father's remains in the forest of the Central Highlands, scattered with half-buried weapons. Viet goes with them, partly out of apprehension over Nam's plan to stow away and sneak out of the country. Set in Vietnam in 2001, when the deep scars of the twenty years of war were still raw, the film portrays through the story of two miners in love the struggles and anguish of being young and queer in postwar Vietnam, as well as the challenges faced by the country itself. An exquisite film, filmed with an entrancing, subtle, and evocative quality, it is also rich in symbolism that aims to reveal the profound, hidden depths that lie beneath the surface. This is the second feature film by Truong Minh Quy, who garnered acclaim for his debut film, "Treehouse" (2019). This film premiered in the Un Certain Regard section at the Cannes Film Festival.

### Director's Biography

Truong Minh Quy was born in Buon Ma Thuot, a small city in the Central Highlands of Vietnam. Quy lives and works, here and there, in the vibrancy of memories and present moments, his narratives and images, lying between documentary and fiction, personal and impersonal, draw on the landscape of his homeland, childhood memories, and the historical context of Vietnam. In his films, he has experimented with combining abstract concepts-images with realistic improvisations during shooting. He is the alumnus of 2012 Asian Film Academy (Busan International Film Festival) and 2016 Berlinale Talents (Berlin International Film Festival). His films have been selected for international film festivals and exhibitions such as Locarno, New York, Clermont-Ferrand, Oberhausen, Rotterdam, Busan, Les Rencontres Internationales Paris / Berlin. His second feature film, The Tree House, premiered in 72nd Locarno Film Festival (Filmmakers of The Present Competition), where it was called as "Three of the festival's best premieres" by Mubi. The film continued to screen in 57th New York Film Festival (Projection), Viennale, Festival Des 3 Continents (Competition), Rotterdam International Film Festival (Bright Future Main Program), CPH:DOX (Artist & Auteur), Göteborg International Film Festival, and others. In 2021, his French language film Les Attendants, competed for the Berlinale Golden Bear shorts. In 2024, Quy premiered his third feature film, Viet and Nam, at the Festival de Cannes in Un Certain Regard.

監督・脚本 ● チューン・ミン・クイ プロデューサー ● ビアンカ・バルブエナ、ブラッドリー・リウ (Epicmedia Productions, Inc. - フィリピン) 共同プロデューサー ● ライ・ウェイジェ (E&W Films, シンガポール)、マリー・デュバス (Deuxième Ligne Films, フランス)、ローナ・テ・ジョスト・ド・ヴィエス (An Original Picture, Netherlands)、ヨースト・デ・フリース (An Original Picture, オランダ)、ステファノ・チンチオーニ (Volos Films Italia, イタリア)、クリスチャン・ジルカ (Scarlet Visions, ドイツ)、グレン・ティース・ファン・チャン (Lagi Limited, ベトナム) エグゼクティブプロデューサー ● アレックス・C・ロウ (Cinema Inutile, イタリア)、グレン・ゴイー (Tiger Tiger Pictures)、チ・ク・チャン (Purple Tree Pictures)、チ・ク・チャン、アンソニー・デ・グスマン アソシエイトプロデューサー ● エリザベス・ウィジャヤ、マリア・グエン、ロイ・ティエ 撮影監督 ● ソンドアン プロダクションデザイン ● チュン・ダオ・フン、チュン・ダオ・フン 編集 ● フェリックス・レム サウンドデザイン & ミックス ● グインセント・グワラ 国際セールス ● ビラミッド・インターナショナル 出演 ● フラム・ティン・ハイ、バオ・ズイ・バオ・ディン、グエン・ティエ・ガー、ルー・ウイェット・トゥン Directed and Written by ● Truong Minh Quy Produced by ● Bianca Balbuena & Bradley Liu (Epicmedia Productions, Inc. - Philippines) Co-Produced by ● Lai Weijie (E&W Films, Singapore), Marie Dubas (Deuxième Ligne Films, France), Loma Tee & Joost de Vries (An Original Picture, Netherlands), Stefano Centini (Volos Films Italia, Italy), Christian Jilka (Scarlet Visions, Germany), Nguyen Thi Xuan Trang (Lagi Limited, Vietnam) Executive Produced by ● Alex C. Lo (Cinema Inutile, USA), Glen Goi (Tiger Tiger Pictures), Teh Su Ching (Purple Tree Pictures), Chi K Tran, Anthony de Guzman Associate Producers ● Elizabeth Wijaya, Mai Nguyen, Loy Te Cinematographer ● Son Doan Production Designer ● Truong Trung Dao Editor ● Felix Rehm Sound Design and Mix by ● Vincent Villa Cast ● Pham Thanh Hai, Dao Duy Bao Dinh, Nguyen Thi Nga, Le Viet Tung International Sales ● PYRAMIDE INTERNATIONAL

## 黙視録

## Stranger Eyes (黙視録)

Singapore, Taiwan, France, USA / 2024 / 126 min



## 作品解説

家族でのピクニックのビデオ映像をじっくりと見ている若い父親。すぐに彼の幼い娘が行方不明になってしまうということが分かる。このビデオは、若い両親が持っている娘の最新の映像のようだ。程なくして、行方不明の娘の映像が入ったDVDが家族の玄関先に届き始める。誰かがこの家族を長い間監視しており、おそらく娘を取り戻す鍵を握っていることが明らかになる……。ヨー・シウホアの『幻土』に続く新作長編『黙視録』は、こうして犯罪スリラーとして幕を開ける。シンガポール警察が所有する膨大な数のCCTV映像が駆使され、比較的あつげなく事件は解決するのだが、すでにその頃にはこの作品はスリラーの枠組みをあっさりと超え、現代の孤立と監視文化についての、巧妙で、陰鬱で、瞑想的で、最終的には不可解さを含んだより多層的な物語へと変質を遂げている。大量監視の時代に見る、見られるということはどうということなのか。私たちの身近にあるこの大きな問いを考察することで、この作品は人間の孤独や脆さを見つめている。ヴェネチア映画祭コンペティション部門で上映。



## 監督

## ヨー・シウホア

YEO Siew Hua

2018年の監督作『幻土』は第71回ロカルノ映画祭で最高賞である金豹賞を受賞し、第92回アカデミー賞にシンガポール代表としてエントリーされ、第56回金马獎で最優秀脚本賞を受賞した。

また、長編ドキュメンタリーシリーズ『THE OBS: A SINGAPORE STORY』のヘッドライターとして参加。ニー・アン・ポリテックで映画について学び、シンガポール国立大学で哲学を学んだ。

## メッセージ

公園である男を見かけた。別に目立ってはいなかったシニアの方が、私は何故か彼を眺めながら勝手に物語を作り始めた。そして私ははっと気づいた。彼のために作ったつもりは物語は実は私の願望に過ぎず、私は密かに自分を彼に投影して言っていたのだ。だが次の瞬間我に振り返り改めて周囲を見回すと、私は監視カメラの目線に囲まれていた。私も最初からずっと誰かに見られていたのだ。誰かに見られていることは、もはや世の常なのである。

コロナ禍以来、「監視」について議論すれば必ず持ち出されるテーマはいつの間にか「自由」からひっそりと「社会的責任」云々が変わっていた。画面に表示される単なる画像として存在するというのは、一体どういことだろう。他人を「見る」とときに、私たちはパターンやレトリックを見出し、彼らをそれぞれ主体性、過去や物語を持つ真の人として見られているのだろうか？時々、私は自分が冷たい機械に監視されるより、人間に監視される方に懐かしさを感じてしまっているのではないかと疑うこともある。

およそシンガポールのような小さな島国に「グリッド外」という場所は存在せず、誰もが常に「見ている」し「見られている」のである。高密度な人口と遍在する監視が、我々を他人の生活の自覚無き目撃者役に作り上げてしまっていて、この目撃者という役目からさらにこの国の諸々の風土を誰も予測せぬ形形成しているであろう。とりわけ、こうした「相互に見る見られる」の関係が我々の行動や自己認識にどう影響しているのかは興味深い。見てしまった以上、見ていないことにはもはやできないのだ。

今の時代は、新しい視覚消費手段によって人々の繋がりが無限に広がる一方で、同時に孤立感を感じさせる時代とも言える。「黙視録」は、このような時代における種々の疑問及び「見る」と「見られる」の関係についての一試論である。自発的なSNS投稿を通じて自己の存在を確認し、社会全体の安心安全のために監視を規範的なものとして受け入れる中で、我々の「常に見られている」という意識が、レンズの端に向こう側「私たちのアイデンティティ」を形作っている。結局、「見る」という行為は決して受動的ではなく、人間に反省を促し、変化をもたらす力を持つ過程でもあり、本来穏やかなアイデンティティを崩壊に導く可能性を秘めている危険な模倣ゲームとも言える。

脚本・監督 ● ヨー・シウホア プロデューサー ● フラン・ボルジア、ステファノ・チェンティニ、ジャン・ローラン・スイニディス、アレックス・シー・ロ エグゼクティブプロデューサー ● フラン・ボルジア  
共同プロデューサー ● ダン・コー、ジェローム・ヌネス 共同エグゼクティブプロデューサー ● グレン・ゴエ、ダン・ビー・ティアム アソシエイトプロデューサー ● ニコラ・プリゴール、デニス・ヴァ  
アスリン ラインプロデューサー ● タン・アイ・レン、チック・メイビス・ファン 撮影監督 ● 浦田秀穂 プロダクションデザイナー ● ジェームズ・ペイジ 衣装デザイナー ● メレディス・リー 編集 ● ジャン・  
クリストフ・ブーゼ 音響監督 ● トゥ・デュエー、トゥ・ツーカーン 音楽作曲 ● トーマス・フォグ  
出演 ● ウェン・ホー、リー・カンジョン、アニッカ・パンナ、ヴェラ・チェン、テオ・ゼン、ビート、クセニア・タン、マリアン・ユウ、アーニー・チョウ

Written and Directed by ● Yeo Siew Hua Produced by ● Fran Borgia, Stefano Centini, Jean-Laurent Csinidis, Alex C. Lo Executive Producer ● Fran Borgia Co-Producers ● Dan Koh, Jerome  
Nunes Co-Executive Producers ● Glen Goi, Tan Bee Thiam Associate Producers ● Nicolas Brigaud-Robert, Denis Vaslin Line Producers ● Tan Ai Leng, Chik Mavis Kuang  
Director of Photography ● Hideho Urata Production Designer ● James Page Costumer Designer ● Meredith Lee Editor ● Jean-Christophe Bouzy Supervising Sound Editors ● Tu Du-Chih,  
Tu Tse-Kang Music Composer ● Thomas Foguenn Cast ● Wu Chien-Ho, Lee Kang-Sheng, Anicca Panna, Vera Chen, Pete TeoEO, Xenia TanAN, Maryanne Ng-Yew, Anya Chow

## Notes

A young father entranced by video of a family picnic. We realize that his little daughter has gone missing, and this is the latest footage her young parents have of her. Before long, DVDs of their daughter start showing up on their doorstep. They discover someone has been surveilling them from long before—could this person be the key to getting back their daughter? Yeo Siew Hua's follow-up to "A Land Imagined" starts out as a crime thriller, but the case is solved relatively quickly with the Singapore Police Force's vast store of CCTV footage. By that point the film has transformed beyond a mere thriller into a subtle, dark, meditative and ultimately baffling story of multiple layers, about contemporary isolation and surveillance culture. What is the significance of observing and being observed in the age of mass surveillance? This film explores human loneliness and vulnerability through the examination of this great and pressing question. Screened in competition at the Venice Film Festival.

## Director's Biography

Yeo Siew Hua's "A Land Imagined" (2017) won the Golden Leopard at the 71st Locarno Film Festival and was Singapore's entry to the 92nd Academy Awards. The film also won him Best Original Screenplay at the 56th Golden Horse Film Awards in Taipei. He is also the head writer for the series and the feature documentary, "The Obs: A Singapore Story" (2014). Yeo studied film at Ngee Ann Polytechnic and graduated in Philosophy from the National University of Singapore.

## Director's Statement

Once I saw a man in a park. He was a little older, not particularly striking. As I was staring at him, I started giving him a narrative. Later, I realized I was projecting my own aspirations onto the older man. I even thought that perhaps that man is me. I must have taken pleasure that I could do all this secretly. Then, I noticed the surveillance cameras all around me. I was being watched all this time. Someone is always watching.

Since the pandemic, the discourse of surveillance has quietly shifted from that of freedoms to social responsibilities. What does it mean to exist as merely an image to be perceived? Do we actually see someone, not as a pattern or type, but as a human with agency, histories, and fantasies? I sometimes wonder if I am not a little nostalgic of human surveillance rather than by a machine...

For a small island-state like Singapore, there is no outside the grid. The act of watching and being watched becomes a part of daily ritual. With its high population density and ubiquitous surveillance, the modern cityscape makes us unsuspecting witnesses to the lives of others — surely this has inadvertent consequences of its own. More curiously, how does the perception of others reflect our own actions and how we see ourselves? After all, what is seen cannot be unseen. Stranger Eyes is a contemplation of these questions and of the relations between seeing and being seen, at a time when our sense of connectedness through new channels of visual consumption feels limitless yet alienated. The knowledge that we are being constantly watched — voluntarily in affirming our existence on social media and involuntarily as an ethical admission for the safety of ourselves and others — continues to shape our identity, through the scrutiny of a glass darkly. After all, the act of seeing is ultimately not a passive one but a reflexive and transformative process; a dangerous game of imitation that could lead to the collapse of stable identities.

## 白衣蒼狗

Mongrel (白衣蒼狗)

Taiwan, Singapore, France / 2024 / 128 min



## 作品解説

タイからの不法移民の青年オームは台湾の山岳地帯の田舎町で老人や障害者たちの介護の仕事をしている。東南アジア各地からの不法移民たちを闇で働かせているボスの下、移民労働者たちの仲介役でもある彼は、ボスと移民たちとの間で板挟みになることも多い。そしてある日、彼が介護をしている老女から、重度の障害を持つ彼女の息子について、ある相談を持ち掛けられる……。現代の奴隷制度ともいえる環境の中で暮らす移民労働者たちの絶望的に悲惨な状況や、彼らの直接のボスよりもさらに上の階層の闇社会の権力によって構築された搾取のシステムの在り方が、説明を極力排した緻密な筆致で描かれていく。フレーム内外で見事に制御された絵画的な構図や、長い沈黙を恐れない編集のリズムの調整も秀逸で、長編監督1作目にして見事な完成度に達している。ホウ・シャオシェンとリャオ・チンソン(ホウ作品の長年の編集者)が製作者として参加。カンヌ映画祭の監督週間初上映され、初長編作品を対象としたカマラドールのスペシャル・メンションを授与された。



監督

チャン・ウェイリヤン  
CHIANG Wei Liang

共同監督

イン・ヨウチャオ  
YIN You Qiao

シンガポール出身。南洋理工大学でコミュニケーション学の学士号を取得し、国立台北芸術大学で映画演出の修士号を取得。過去10年間、台湾を拠点に活動し、現代アジアにおける東南アジア人の移民やディアスポラに焦点を当てた作品を制作している。

短編監督作品『Anchorage Prohibited』で、第66回ベルリン映画祭でアウディ短編映画賞を受賞。

短編作品『Nyi Ma Lay』や、第76回ヴェネチア映画祭に出品されたVR短編映画『Only The Mountain Remains』は、移民の困難な生活をテーマにしており、これまでの批判的な視点を引き継いでいる。

また、タレント・トーキョー、ロカルノ映画祭フィルムメイカース・アカデミー、FIDキャンパス、そしてゴールデン・ホース・フィルム・アカデミーの修了生であり、台湾の名匠であるホウ・シャオシェン監督の指導も受けている。『白衣蒼狗』は初長編監督作品である。

## メッセージ

『白衣蒼狗』のような物語は、世界のどこでも起こり得るものです。この10年間、私は主に無許可の移民労働者が直面する不安定で見えにくい生活に焦点を当てて作品を制作してきました。

『白衣蒼狗』はフィクションではありませんが、台湾において私自身が経験した出来事や、東南アジアコミュニティで出会った数多くの人々の物語に基づいています。この作品には、私にとって非常に個人的な2つのテーマが込められています。それは、終末期ケアがケア提供者に与える身体的および精神的な負担、そしてそのケア提供者が移民である場合、その負担がさらに増すということです。

医療へのアクセスが限られた農村地域では、違法なケア提供者が最後の頼みの綱となります。彼らの多くはタイ、インドネシア、ベトナム、フィリピンから来ており、医療の専門家ではなく、日常生活の支援や患者の基本的な身体的ニーズを管理する役割を担っています。これらの移民ケア提供者は、多くの場合、雇い主である家族以上に患者に近い存在となることがありますが、それでもなお家庭内では「異邦人」として扱われます。

## Notes

Oom is a young illegal immigrant from Thailand and works as a carer for the elderly and people with disabilities in a rural mountain village in Taiwan. Working for his boss who unlawfully employs illegal immigrants from various Southeast Asian countries, Oom is often caught between the boss and immigrants as the middleman. One day, an elderly woman at the care home asks for his advice about her son with a heavy disability... The film excludes as much explanation as possible, using careful brushstrokes to delicately illustrate the hopelessly miserable conditions of the migrant workers living in arguably a modern-day slavery, and the nature of the exploitation system constructed by underworld powers in a hierarchy even higher than their immediate bosses. The masterfully controlled pictorial compositions inside and outside the frame, and the rhythmic coordination of the editing without fearing long silences are excellent. The film has reached an impressive degree of perfection for a first feature film. Hou Hsiao-Hsien and Liao Ching-sung (longtime editor of Hou's films) joined the project as Executive Producers. The film premiered at the Cannes Film Festival Directors' Fortnight and won a Special Mention of Caméra d'Or for debut feature film.

## Director's Biography

Born in Singapore, Chiang Wei Liang graduated from the Nanyang Technological University with a degree in communication studies and completed his MFA (Film Directing) at the Taipei National University of Arts. Based in Taiwan for the past decade, his work focuses on migration and diaspora of Southeast Asians in modern Asia. His film, "Anchorage Prohibited" received the Audi Short Film Award at the 66th Berlinale. Recent short film, "Nyi Ma Lay" or the VR short film "Only The Mountain Remains" - in competition at the 76th Venice Film Festival - continues this commentary on the difficult lives of migrants. Chiang is an alumnus of the Locarno Filmmakers Academy, Talents Tokyo, FID Campus and the Golden Horse Film Academy, mentored by esteemed Taiwanese auteur Hou Hsiao-Hsien. "Mongrel" is his first feature film.

## Director's Statement

A story like "Mongrel" can happen anywhere in the world. Over the past decade, my work has focused on the precarious, invisible lives of undocumented migrant workers.

Although "Mongrel" is a work of fiction, it is drawn from my own experiences and the stories of countless others I have met from the Southeast Asian community here in Taiwan. It brings together two things that are very personal to me: the physical and emotional toll that palliative care extracts from the caregiver, and how much more so when the caregiver in question is an immigrant.

For rural communities with limited access to healthcare, illegal caregivers are the last resort. Mostly coming from Thailand, Indonesia, Vietnam, and the Philippines, these men and women are not trained medical professionals—they provide help with daily tasks and manage the basic physical needs of their patients. In many ways, these migrant caregivers can become closer to the patient than the family members who hire them, yet are foreigners in the domestic space.

脚本 ● チャン・ウェイリヤン 監督 ● チャン・ウェイリヤン、イン・ヨウチャオ 撮影監督 ● マイケル・キャブロン プロダクションデザイナー ● イエ・ツウェイ 編集 ● ドゥニア・シヨフ カラーリスト ● ヨブ・ムーア サウンドデザイナー ● R.T.カオ、リム・ティン・リ MPSE エグゼクティブプロデューサー ● ホウ・シャオシェン、リャオ・チンソン、ジェニファー・ジャオ プロデューサー ● ライ・ウェイジェ、リン・チェン、チュウ・ユンティン 共同プロデューサー ● マリー・デュバス、エリザベス・ウィジャヤ 出演 ● フンロップ・ルンカムジャッド、ルー・イーテン、ホン・ユーホン、クオ・シュウエイ、アチャラ・スンワン  
Written by ● Chiang Wei Liang Directed by ● Chiang Wei Liang, Yin You Qiao Director of Photographer ● Michael Capron Production Designer ● Ye Tzu-Wei Editor ● Dounia Sichov Colorist ● Yov Moor Sound Designers ● R.T. Kao, Lim Ting Li Mpsse Executive Producers ● Hou Hsiao-Hsien, Liao Ching-Sung, Jennifer Jao Producers ● Lai Weijie, Lynn Chen, Chu Yun-Ting Co-Producers ● Marie Dubas, Elizabeth Wijaya Cast ● Wanlop Rungkumjad, Lu Yi-Ching, Hong Yu-Hong, Kuo Shu-Wei, Atchara Sunwan

## 空室の女

## Some Rain Must Fall(空房間裡的女人)

China, USA, France, Singapore / 2024 / 98 min



## 作品解説

40代の主婦、ツイイは人生の目的を失い、大きな精神的崩壊の瀬戸際にいる。映画の冒頭で、彼女は不運な形で年配の女性に怪我を負わせてしまい、入院したその女性の家族から賠償を求められる。この出来事を導入として、私たちは彼女の置かれている状況を目にしていく。夫とは離婚手続き中で、反抗期の娘との間にも深い溝がある。同居中の義母はどうやら認知症を患っており、疎遠になって久しい実父は死期が近いようだ。彼女は、自分の上にのしかかる重荷や憂鬱から逃れようともがいている。この作品は、こうしたツイイの「中年の危機」的状況、ひいては中国の中流階級家庭の機能不全を、4:3の息苦しいフレーミングと撮影監督のコンスタンツェ・シュミットによる美しく憂鬱なイメージによって極めて効果的に語る。映画初出演だという主演のユー・アイアルの抑えた演技も素晴らしい。カンヌ映画祭の短編部門でパルムドールを受賞した「A Gentle Night」(17)等、一連の短編作品で高い評価を得てきた新鋭チウ・ヤンの長編デビュー作。ベルリン映画祭エンカウンターズ部門で初上映された。



監督

チウ・ヤン

QIU Yang

中国常州市で生まれ育ち、オーストラリアのビクトリア芸術大学にて映画演出を学ぶ。短編監督作「She Runs」は第58回カンヌ映画祭批評家週間にて最優秀短編作品賞を受賞。また、短編作「A Gentle Night」は第70回カンヌ映画祭で上映され、最優秀短編作品賞を受賞。

長編デビュー作である「空室の女」はベルリン映画祭エンカウンターズ部門にて上映された。

## Notes

40-year-old housewife Cai lost her aim of life and stands on the edge of a mental breakdown. In the beginning of the film, she inadvertently injures an elderly woman and is asked for compensation by the woman's family after she is hospitalized. From this event we start to see her circumstances - Cai is in the middle of divorcing her husband, and has a deep rift with her rebellious daughter. Her mother-in-law who cohabits with her, seems to suffer from dementia and her long estranged father is on his deathbed. She is floundering from the weight of the burden and depression. The film effectively tells Cai's midlife crisis situation and the dysfunction of a middle class Chinese family in a suffocating 4:3 framing and beautifully melancholy imagery by cinematographer Constanze Schmitt. The star Yu Aier's performance in her debut film is also fantastic. Winner of the Cannes Film Festival Short film programme Palme d'Or, Qiu Yang's debut feature follows critical acclaim on a series of short films, including "A Gentle Night" (2017), which won the Palme d'Or for Best Short Film at the Cannes Film Festival. The film premiered at the Berlin International Film Festival Encounters section.

## Director's Biography

Qiu Yang was born and raised in Changzhou, China. He studied film directing at the Victorian College of the Arts in Australia. His latest short film "She Runs" won the Leitz Cine Discovery Prize for best short film at the 58th Cannes Critics' Week. "A Gentle Night" was awarded the Short Film Palme d'Or at the 70th Cannes film Festival. His first feature film, "Some Rain Must Fall", will premiere at Berlin in Encounters.

脚本・監督 ●チウ・ヤン 撮影監督 ●コンスタンツェ・シュミット 編集 ●カルロ・フランシスコ・マナタッド、ジュリアン・ラシュレー プロダクションデザイナー ●シャン・インハオ 衣装デザイナー ●チャン・ヤディ  
音楽作曲 ●ライアン・サマーヴィル サウンドデザイナー ●メイ・ジュ、ロマン・オザンス、エマニュエル・クロゼ キャスティング ●カン・カン プロデューサー ●ジェレミー・チュア、マイク・グッドリッジ、アレックス・C・ロ、メリッサ・マランバウム、リン・ファン、ダーシー・シー・ワン 共同プロデューサー ●ドゥオ・リン、シェン・シリヤン、フランク・サン、シャン・インハオ、ローレン・ユエ・パン、ソル・イェ、ワン・ヤン  
グゼクティブプロデューサー ●アレックス・C・ロ、ヤン・シャオドン、ホアン・ユエ、スター・リー、レイチェル・ソン、クアイ・ハオジャン、シャン・イーガン、イン・ヤン セールスエージェント ●Goodfellas  
出演 ●ユー・アイアル、ディ・シーケ、ウェイ・イーボ、シュー・ティエンイ、グー・ティンシウ、チン・ダン、シュ・ユン、ツァオ・ユーチアン  
Written and Directed by ●Qiu Yang Director of Photography ●Constanze Schmitt Editor ●Carlo Francisco Manatad, Julien Lacheray Production Designer ●Shan Yinghao Costume Designer ●Zhang Yadi Music composer ●Ryan Somerville Sound Designers ●Mei Zhu, Romain Ozanne, Emmanuel Croset Casting ●Kang Kang Producers ●Jeremy Chua, Mike Goodridge, Alex C. Lo, Mélissa Malinbaum, Lin Fan, Darcy Xi Wang Co-Producers ●Duo Lin, Shen Siliang, Frank Sun, Shan Yinghao, Lauren Yue Pan, Sol Ye, Wang Yang Executive Producers ●Alex C. Lo, Yang Xiaodong, Huang Yue, Star Li, Rachel Song, Kuai Haoxiang, Shan Yigang, Ying Yan Cast ●Yu Aier, Di Shike, Wei Yibo, Xu Tianyi, Gu Tingxiu, Qin Dan, Xu Yun, Cao Yuqiang Sales Agent ●Goodfellas

## 家族の略歴

## Brief History of a Family (家庭簡史)

China, France, Denmark, Qatar / 2024 / 99min



## 作品解説

高校の校庭での懸垂中に、内向的なシュオは、同級生のウェイが投げたバスケットボールが当たって落下し、足を負傷する。罪悪感を感じたウェイはシュオに、自宅でテレビゲームをしようと誘う。ウェイの両親と夕食を共にする中、シュオは母親が亡くなったことを明かし、アルコール中毒の父親から受けた虐待をほのめかす。しかしこれはウェイの両親の共感を得るための、シュオにとって最初の巧妙なステップだった。徐々にシュオはウェイの裕福なアパートで過ごす時間を増やし、確実に彼の両親の信頼を勝ち取っていく……。本作が長編デビュー作となるリン・ジェンジェ監督は、見事な語り口の正確さで、目立たない侵入者が潜り込んだ中流階級家庭内における、変化する力学を分析している。完璧な彫刻作品のように、フレーム内のあらゆる要素を徹底的なコントロール下に置きつつ、巧妙で不可解な曖昧さを保ち、スリラー作品のような緊張感を持続させる手腕は見事としか言いようがない。サンダンス映画祭で初上映され、その後ベルリン映画祭でも上映された。



## 監督

## リン・ジェンジェ

LIN Jianjie

バイオインフォマティクスで修士号を取得後、人間の存在について解読したいという情熱から映画制作の道を進み始める。ニューヨーク大学ティッシュ芸術学校にて映画制作の修士号を取得。腐敗と虚栄を風刺した短編監督作[A Visit] (15)、法廷での家族の最後の再会を描いた[Guj] (17)は多くの国際映画祭で上映された。長編監督作の前に撮影され、少女の目を通じて人生の厳しさと可笑しさを描いた短編[Hippopotami]は現在ポストプロダクション中である。「家族の略歴」が長編映画デビュー作品である。

## メッセージ

大学時代に生物学を専攻していた私は、ミクロな世界はマクロな世界を映し出す鏡であるという考えに常に惹かれていました。本作「家族の略歴」では、一つの家庭を生きた細胞に喩え、それ自身が異なるスケールで経験する変化を考察すると同時に、その家庭自体をマクロな社会の中の一つの細胞として描いてみました。そして一つ一つの家庭からなるマクロな社会は、また必然的に返って個々の家庭やその中の人々の心のあり方を形作っているのです。高校生のウェイの家族は一見よくある和気あいあいな中流階級家庭ですが、謎めいた同級生のシュオの出現によってその存在すら揺らぎました。この危機から彼らは新たな「ホメオスタシス」を築く機会を見出しましたが、その再構築の過程で彼らの関係性の中に潜んでいた知られざる一面が浮かび上がり、私的な欲求と共通の需要が衝突し、身体的な境界と内心的なその両方が段々と曖昧になりました。ジャンル映画を作るつもりではなかったのですが、ジャンルのなものがごく自然に私の執筆や撮影に取り入れられました。ただ、そのジャンルのな存在は作品を丸ごと飲み込んだのではなく、登場人物の心や彼らの曖昧な関係性の中に入り込み、神秘的で魅惑的な口調で観客に見えざるものを見、聞こえざるものを聞くように囁いているのです。

## Notes

While doing pullups on the high school field, Shuo gets hit by a basketball thrown by his schoolmate Wei, slips off the bar, and injures his foot. Feeling guilty, Wei invites Shuo to his house to play video games. During dinner with Wei's parents, Shuo reveals that he lost his mother and hints at the abuse he suffered from his alcoholic father. This was Shuo's first clever step to gain their sympathy. Gradually, Shuo spends more time at Wei's luxurious apartment, steadily winning the parents' trust... With his masterful narrative precision, Lin Jianjie examines the shifting dynamics within a middle-class family infiltrated by a discreet intruder. Like a perfect piece of sculpture, every element of each frame is kept under tight control, while maintaining a clever and puzzling ambiguity, and his ability to sustain the tension of a thriller is nothing short of masterful. The film premiered at the Sundance Film Festival and was subsequently screened at the Berlin International Film Festival.

## Director's Biography

After obtaining a bachelor's degree in bioinformatics, Lin Jianjie's passion for deciphering human existence led him to filmmaking. He received his MFA degree in filmmaking from New York University's Tisch School of the Arts. His short films, "A Visit" (2015), a satire about corruption and vanity, and "Gu" (2017), about a family's last reunion at court, were screened at many international film festivals. "Hippopotami", his latest short, which he shot before the feature, is in post-production. It looks at the harshness and absurdity of life through the eyes of a little girl. "Brief History of a Family" is his feature film debut.

## Director's Statement

Having majored in biology as an undergraduate, I've always been fascinated by the idea that the micro world often holds a mirror to the macro world. In this film, I examine a family both as a living cell going through changes on multiple levels, and as a cell of our evolving society, which inevitably shapes the psyche and sentiments of its people.

When Wei's family's seemingly harmonious middle-class existence is disrupted by Wei's mysterious friend Shuo, they see a chance to establish new homeostasis. While doing so, the undercurrent of their relationship surfaces; collective and individual needs clash; the boundaries of physical space and emotions are blurred.

Even though I did not set out to make a genre film, genre found its way into my writing and filming — not as boxes to put the film in, but as a way to delve into the characters' minds and their ambiguous relationships; to create a mysteriously seductive tone, and to invite the audience to look beyond what they see, listen beyond what they hear.

脚本・監督 ● リン・ジェンジェ プロデューサー ● ロウ・イン、ジェン・ユエ、ワン・イーウェン 共同プロデューサー ● ジョウ・ピン、リッケ・タンボ・アンダーセン 撮影監督 ● チャン・ジアオ  
プロダクションデザイナー ● シュー・ヤオ 編集 ● ペア・K・キアケギー 作曲 ● トク・フロルソン・オーディン サウンドデザイン ● マルゴ・テストマル(ジャック・ペダーセンと共に) リレコーディングミキサー ●  
アニメーター ● ウィンツェリン プロダクションサウンドミキサー ● リ・ラン カラーリスト ● エドアルド・レベッキ 製作 ● ファースト・ライト・フィルムズ 共同製作 ● フィルム・デュ・ミリュウ、タンボ・フィルム  
出演 ● スー・フェン、グオ・クイー、スン・シールン、リン・ムーラン  
Writer & Director ● Lin Jianjie Producers ● Lou Ying, Zheng Yue, Wang Yiwen Co-producers ● Zhou Ping, Rikke Tambo Anderson Director of Photography ● Zhang Jiahao Production  
Designer ● Xu Yao Editor ● Per K. Kirkegaard Composer ● Toke Brorson Odin Sound Design ● Margot Testemale with Jacques Pedersen Re-recording Mixer ● Fanny Weinzapfen Production  
Sound Mixer ● Li Ran Colorist ● Edoardo Rebecchi Production ● First Light Films Co-production ● Films du Milieu, Tambo Film  
Cast ● Zu Feng, Guo Keyu, Sun Xilun, Lin Muran



## ソクチョの冬

## Winter in Sokcho (Hiver à Sokcho)

France, Korea / 2024 / 104min



## 作品解説

ソクチョは韓国北東部の海辺の町、ソクチョにある小さなホテルで働いている。ソウルから数か月前に故郷に戻った彼女は、ソウルでモデルになりたと思っているボーイフレンドのジュノと半同棲中。しかし、彼女の慎重に構築された日常は、ロシュディ・ゼムが演じる、ある程度名の知れたフランス人アーティスト、ヤン・ケランドの到着によって乱されてしまう。生前にフランス人の父親に捨てられた経験を持つソウは、ケランドと出会い、長い間彼女の中に埋もれていた感情と疑問を再び芽生えさせる……。エリザ・スア・デュサパンによる同名小説の映画化作品である本作は、若い女性のアイデンティティの探求と愛の過程を繊細かつ親密に捉えた作品。冬のソクチョというロケーションの持つ魅力に加え、アリエス・バトロンによる抽象的なアニメーション・シークエンスの導入も大きな効果をあげている。日系フランス人監督、コウヤ・カムラの初長編作品で、トロント映画祭のプラットフォーム部門での初上映後、サン・セバスチャン映画祭の新人監督部門でも上映された。



## 監督

## コウヤ・カムラ

Koya KAMURA

パリで生まれ育ったフランス・日本人監督。パリ第7大学で映画を学んだ後、東京の慶應義塾大学に進学。2007年にフランスのVIACOMグループ(MTV、GameOne)でキャリアをスタートし、その後、2008年にウォルト・ディズニー社にクリエイティブプロデューサー兼ディレクターとして入社。

劇映画としてのデビュー作は福島県の立ち入り禁止区域を舞台にした2019年の短編映画「Homesick」で、主要な国際映画祭で高い評価と賞を受賞し、2021年のセザール賞にも選出された。

2023年にロシュディ・ゼムとベラ・キムをキャストし、初長編監督作となる『ソクチョの冬』を監督し韓国で撮影した。現在は福島を舞台にしたダークなフィルム・ワールドである、長編第2作『Evaporated』を企画開発中。

## メッセージ

私は多文化な背景があります。母がフランス人で、父は日本人です。厳格な規則に思い、時には難儀され、この「独自性」を軸に人を通じて自分のアイデンティティを築き上げてきました。フランスで完全にフランス人になったことはなく、日本では決して日本人ではありませんでした——どちらの国でも受け入れられたという思いから、長い歳、社会で自分の居場所を探し続けてきました。

『ソクチョの冬』は、多文化背景とアイデンティティの探求をテーマにしており、主人公ソウを通じてアイデンティティの複雑さを鋭く、そして非常に繊細に描いているフランス系韓国の作家エリザ・スア・デュサパンの小説から着想を得ています。人のアイデンティティとは何によって本当に定義されるのでしょうか？ 母が言語学と文化的な背景によるものか？ 周囲で母親に育てられたソウにとって、フランス人の父親は謎であり、彼女が自分自身をどう認識するかに大きな影響を与えるはずなのにです。彼女がどう感じるのか？ 理解しようとする意欲があり、しかし彼女の身体的および精神的な健康にも影響を及ぼします。彼女のルーツを半分にすること、この失われた基盤は、アイデンティティの構築におけるその背景の重要性の疑問を引き起こします。アイデンティティの探求を通して、身体的特徴も重要な役割を果たすのでしょうか？ ソウは、自分の大きくて明るい色の目や背の高い体躯といった身体的特徴を気にしてはいるので、韓国に根強く存在する歪んだ愛の基盤に合わせる社会的プレッシャーに苦しんでいるに違いありません。韓国社会の複雑な現象である美容整形のテーマに繋がっています。

このプレッシャーは彼女の身体との関係に影響を与え、摂食障害を引き起こし、厳格な期待がある社会で自分自身を受け入れることの複雑さを強調しています。手術に頼ることを除いて、食習慣は自身の身体に対する、幻想的で実際には危険な「コントロール」を行使する唯一の方法なのです。

私たちのアイデンティティは、周囲の人々の視覚によって形成されるのでしょうか？ ソウは、母親、彼女のジュノ、そして彼女の父親のような存在になるケランドの期待の間で揺れ動く。最終的には自分自身のアイデンティティの疑問を引き起こします。彼女の母親は、保護的ですが過去について話さず、家系の歴史を共有することはありません。ジュノが社会的な規範や美的プレッシャーを反映する一方、ケランドは、アーティストとしての視点や社会での自身の見解を通じて、ソウに新しいくも不安を感じさせる自己愛を与えます。

『ソクチョの冬』は、自己のアイデンティティの普遍的な問いを視覚的に探求する作品です。料理は、ソウの母から受け継いだ芸術であり、ソウにとっては自己表現と安心の手段となり、彼女の文化的ルーツを象徴しています。ソウと彼女の登場人物とのやり取りから、彼女の内面的な葛藤と混合したルーツを受け入れるための過程が明らかになります。これらの内面的な葛藤は、アニメーションのシーンで強調され、観客にソウの感情を視覚的に伝えます。『ソクチョの冬』は、似たような混合したルーツを持つ人々だけでなく、何が自分を定義するのかを考えるすべての人々にも共通するでしょう。私はソウの疑念、希望、発見を撮影する中でアイデンティティ探求の美しさと複雑さを捉えたいと願い、同時に小説の精神に敬意を表したいと思っています。

監督 ● コウヤ・カムラ 脚本 ● コウヤ・カムラ & ステファニー・ルー・ウォン 撮影監督 ● エロディ・タタネ ファーストアシスタントディレクター ● ジャハビネ・ゼンタル & ウサン・キム プロダクションデザイン ● ケ・ヘイン 編集 ● アントワネット・ラドリル アニメーション アグニエス・パトロン 作曲 ● デリア・フェリス・マリセザ サウンドデザイン ● デリア・フェリス・マリセザ、クレモンス・ルイユ、キョウ・ムア、ウジ・ジョン 共同制作会社 ● キーンストーン・フィルムズ、BNPパブリシティグループ、プロデューサー ● ヴァルリス・ブーレル、グレア アソシエイトプロデューサー ● ナム・ユンソク プロダクションマネージャー ● ローラ・レストラド、ワンジ・ジョン 共同出資 ● CNC、REGION GRAND EST, EUROMETROPOLE DE STRASBOURG、REGION SUD, KOFIC, FONDATION GAN POUR LE CINEMA、CINCAP 7、COFIMAGE 34、PALATINE ETIOLE 21、DIAPHANA、BE FOR FILMS、PLAYTIME フランス配給 ● DIAPHANA 国際セールス ● BE FOR FILMS

出演 ● ベラ・キム、ロシュディ・ゼム、ミヒョン・バク、テホ・ユ、ドク・ユン、キョンソク・チョン  
 Director ● Koya Kamura Screenplay ● Koya Kamura & Stéphane Ly-Cuong Cinematography ● Elodie Tahtane 1st Assistant Director ● Jawahine Zentar & Woosang Kim Production Design ● Hyein Ki Editing ● Antoine Flandre Animation ● Agnès Patron Composer ● Delphine Maisseuena Sound Design ● Didier Falk, Clémence Louesdon, Kinane Moualla Production Company ● OFFSHORE Co-production ● Companies KEYS ONE FILMS, BNP PARIBAS PICTURES Producer ● Fabrice Prêel-Clôché Associate Producer ● Yoon-Seok Nam Production Manager ● Laura Lesirade, Eunjae Jung Co-financed by ● CNC、REGION GRAND EST, EUROMETROPOLE DE STRASBOURG、REGION SUD, KOFIC, FONDATION GAN POUR LE CINEMA、CINCAP 7, COFIMAGE 34, PALATINE ETIOLE 21, DIAPHANA, BE FOR FILMS, PLAYTIME  
 Cast ● Bella Kim, Roschdy Zem, Mi-Hyeon Park, Tae-Ho Ryu, Doyu Gong, Kyung-Soon Jung French Distributor ● DIAPHANA International Sales ● BE FOR FILMS

## Notes

Soo-Ha works at a small guesthouse in a seaside town of Sokcho, the northeastern part of South Korea. She returned to her hometown a few months ago from Seoul while intermittently cohabiting with her boyfriend Jun-Oh, who wants to become a model in Seoul. But her carefully constructed routine is disrupted by the arrival of Yan Kerrand, a semi-famous French artist, played by Roschdy Zem. Having been abandoned by her French father before his death, Soo-Ha's encounter with Kerrand reawakens her emotions and questions that have long been kept a lid on. Adapting a novel with the same title by Elisa Shua Dusapin, this film gives a sensitive and intimate look at a young woman's search for and acceptance of her identity. The abstract animation sequence by Agnès Patron effectively enhances the charm of Sokcho's winter location. The first feature-length film by Japanese-French director Koya Kamura premiered at the Toronto International Film Festival Platform program, followed by a screening at the San Sebastián International Film Festival New Directors program.

## Director's Biography

Koya Kamura is a French-Japanese director born and raised in Paris. Graduated from Film University at Paris VII before studying at Keio University in Tokyo, he began his career in France at VIACOM group (MTV, GameOne) in 2007 and later joined the Walt Disney Company in 2008 as a Creative Producer and Director.

Koya Kamura's fictional directorial debut came with his short film "Homesick" in 2019, set in the Fukushima No-go-zone, which garnered acclaim and awards at major international film festivals, including a selection for the French Academy Awards (César) in 2021. In 2023, Koya directed his first feature film, "Winter in Sokcho" starring French-A-list actor Roschdy Zem and Bella Kim, filmed in Korea. Koya Kamura is currently in development on his second feature film, "Evaporated" a dark film noir set in Fukushima.

## Director's Statement

I come from a multicultural background. My mother is French and my father Japanese.

Often proud, at times ridiculed, I built my identity over the course of my life around this "originality." Never completely French in France, certainly not Japanese in Japan, I searched a very long time for my place in society as I felt the need to be accepted in both countries.

Winter in Sokcho explores multicultural backgrounds and the quest for identity, drawing its inspiration from the French-Korean author Elisa Shua Dusapin's book, which incisively and with great sensitivity tackles the complexity of one's identity through its leading character Soo-Ha.

How is a person's identity truly defined? Is it through the language we speak or our cultural heritage? For Soo-Ha, raised in Korea by her mother, her French father remains a mystery, a haunting absence that influences how she perceives herself. A void that she will try to fill as best she can, often to the detriment of her physical and mental well-being.

This mysterious foundation to half of her origins raises questions about the importance of heritage in the construction of one's identity. Is it physical appearance, which also plays a crucial role in the search for one's identity? Soo-Ha, self-conscious about her distinctive physical features like her big light-colored eyes or her tall frame must suffer the social pressure of conforming to tainted beauty standards that are very much present in South Korea. I broach the theme of cosmetic surgery, a veritable phenomenon in South Korean society. This pressure impacts her relationship to her body resulting in eating disorders, underlining the complexity of being able to accept oneself in a society with rigid expectations. Without turning to surgery, our eating habits become our only way of exerting an illusory, indeed dangerous "control" over our bodies.

Is our identity shaped by how our entourage sees us? Soo-Ha navigates between the expectations of her mother, her boyfriend Jun-Oh, and Kerrand, an older man who becomes a father figure to her and ends up triggering questions about her own identity. Her mother, protective but silent about the past, refuses to share her family history. As for Jun-Oh, he reflects the social norms and aesthetic pressure, while Kerrand, through his gaze as an artist and someone with his own perspective on society, offers Soo-Ha a new but disquieting perspective of herself.

"Winter in Sokcho" is a visual and intimate exploration of these universal questions about one's identity. Cooking, an art handed down by her mother, becomes for Soo-Ha a means of expression and comfort, symbolizing her cultural roots. The interactions Soo-Ha has with the other characters reveal her inner struggles and her journey towards accepting her mixed origins. These inner battles are highlighted through animated sequences, giving the audience a vision of Soo-Ha's emotional state.

"Winter in Sokcho" will resonate not only with those who share a similar experience of mixed origins, but more widely with everyone who wonders about what defines them. In filming Soo-Ha's doubts, hopes and discoveries, I wish to capture the beauty and complexity of one's search for identity, all the while paying homage to the spirit of the novel.

## 第25回東京フィルメックス・特別招待作品

# TOKYO FILMeX 2024 Special Screenings

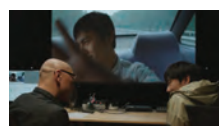
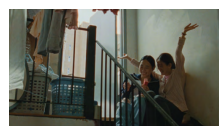
会場：丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町

Venue: Marunouchi TOEI, HUMAN TRUST CINEMA Yurakucho

今年も映画の最先端を切り拓いてゆく、著名監督たちのとびきりの新作をご紹介します。  
いずれも強烈な作家性が発揮された、これらのバラエティ豊かな作品からは、映画の多彩さがうかがえるでしょう。

This year, we once again bring you a selection of extraordinary new works from spirited filmmakers on the cutting edge of cinema.

These abundantly diverse films, each exhibiting powerful originality, epitomize the eclectic nature of film.



P17 ● 新世紀ロマンティクス／ジャ・ジャンクー  
Caught by the Tides China / Director: JIA Zhang-Ke

P18 ● スュチョン／ホン・サンス  
By the Stream South Korea / Director: HONG Sangsoo

P19 ● ブルー・サン・パレス／コンスタンス・ツァン  
Blue Sun Palace USA / Director: Constance TSANG

P20 ● 愛の名の下に／エリザベス・ロー  
Mistress Dispeller China, USA / Director: Elizabeth LO

P21 ● ポル・ポトとの会合／リティ・パン  
Meeting with Pol Pot France, Cambodia, Taiwan, Qatar, Turkey / Director: Rithy PANH

P22 ● 無所住／ツァイ・ミンリャン  
ABIDING NOWHERE Taiwan, USA / Director: TSAI Ming-Liang

P23 ● 何処／ツァイ・ミンリャン  
Where Taiwan / Director: TSAI Ming-Liang

P24 ● 未完成の映画／ロウ・イエ  
An Unfinished Film Singapore, Germany / Director: LOU Ye

P25 ● スポ／アストリッド・ロンデロ&フェルナンダ・バラデス  
Sujo Mexico, USA, France / Director: Astrid RONDERO & Fernanda VALADEZ

P26 ● 地獄に落ちた者たち／ロベルト・ミネルヴィーニ  
The Damned Italy, Belgium, USA, Canada / Director: Roberto MINERVINI

P27 ● ザ・ゲスイドゥズ／宇賀那健一  
The GESUIDOUZ Japan / Director: UGANA Kenichi

# 新世紀ロマンティクス

Caught by the Tides (風流一代)

China / 2024 / 111min / 配給：ビターズ・エンド



© 2024 X Stream Pictures

## 作品解説

ジャ・ジャンクー監督の長年のミューズであるチャオ・タオ演じる一人の女性の人生の約20年間を、彼女の元を去った一人の男性との関係を軸に描いた作品。物語は2001年に始まり、最初は5年後、次には16年後に時代が移行し、2022年を舞台とする第3章までを通して、主人公女性の感傷的な苦難と、時の経過と共に彼女の自立が深まっていく姿が捉えられている。冒頭の場面は2001年頃に撮影され、映画の終盤に主人公たちが再び大同市に戻る頃には、この古い炭鉱都市が未来への可能性に開かれた完全に別の世界になっているのが印象的だ。最初の2章は過去に様々なフォーマットで撮影された未使用の映像素材が多くの場面で使われており、サウンド版サイレント映画の形式が部分的に援用され、ポップ、ディスコ、伝統音楽等のサウンドトラックに支えられた流動的な編集がなされている。そうしたユニークなハイブリッド映像/音響が各時代の集積的記憶のようなものを喚起させていく様は実に感動的だ。カンヌ映画祭のコンペティション部門でワールドプレミア上映された。



## 監督

### ジャ・ジャンクー

JIA Zhang-ke

1970年生まれ、中国山西省・汾陽(フエンヤン)出身。93年に北京電影学院文学系(文学部)に入学。初長編作『一瞬の夢』が98年ベルリン国際映画祭フォーラム部門でワールドプレミア上映され、ヴォルフガング・シュタウテ賞(最優秀新人監督賞)を受賞したほか、釜山国際映画祭、バンクーバー国際映画祭、ナント三大陸映画祭でグランプリを獲得、国際的に大きな注目を集めた。06年、三峡ダム建設により水没する古都・奉節(フオンジェ)を舞台にした『長江哀歌』がヴェネチア国際映画祭金獅子賞(グランプリ)を受賞。

## メッセージ

2001年以来、私は大同をたびたび訪れ、その時々に使っていたカメラで大同を撮影してきました。大同は炭鉱の街として有名でしたが、私が足を運び始めた頃には炭鉱は枯渇し、炭価も下がり始めていました。しかし、中国経済は急速に開放され、新しい活力がいたるところで見られました。私は歌う群衆をカメラで捉えました。ダンサーたちと一緒に飛び回り、若者たちを彼らのお気に入りの場所まで追いかけてました。手にしたカメラは、未知の喜びで溢れかえっていました。その後、20年間、私は何度も同じ人々を追いかけてました。長江の三峡や南端の珠海、中国の東北部や南西部まで。彼らが年を重ねるにつれて、私が携えるカメラも、シンプルなものからAlexa、そしてVRへと進化していきました。編集室で、私はよく、この長年によって撮影してきた映像を見返しました。記録された時間が過ぎかかっていくのを感じながら、映像が遠ざかっていく。過去の楽しい時間は、まるで夢のようでした。これまでずっと、私はこの映像の根底にある相互のつながりを探してきました。撮影を始めてから20年という時間の中で、ストーリーがひとつになっていくのを見つけたのは、2022年のコロナによるロックダウンの時でした。私が衝撃を受けたのは、この映像には、直線的で因果関係のあるパターンがないことでした。その代わりに、そこには、もっと複雑な関係があり、量子物理学のようなものではなく、人生の方向性は、特定するのが難しい変動要因に影響され、最終的に決定されているのです。私は中国語タイトルを選ぶ際に、映画に登場する世代に名前をつけました。『風流一代』の文字通りの意味は「漂流世代」ですが、「風流」という言葉には強くロマンチックな意味合いがあります。カメラは、私たちが忘れてしまったと思っていたものを捉え、それが今の私たちを作り上げているものです。

出演 ● チャオ・タオ、リー・チュウピン、パン・ジアンリン、ラン・チョウ、チョウ・ヨウ、レン・クー、マオ・タオ 配給 ● ビターズ・エンド  
Cast ● Zhao Tao, Li Zhubin, Pan Jianlin, Lan Zhou, Zhou You, Ren Ke, Mao Tao Distribution in Japan ● Bitters End

## Notes

Starring Jia Zhang-Ke's longtime muse Tao Zhao, the film depicts two decades of a woman's life centered on her relationship with a man who left her. Beginning in 2001, the story captures the sentimental tribulations of the woman and her growing independence as time passes - shifting between periods from 5 years, then 16 years, until chapter 3 set in 2022. The opening scene was shot around 2001, and by the time the protagonists return to Datong city at the end of the film, this old mining town has become a completely different world, open to the possibilities of the future. The first two chapters of the film utilized unused footage shot in various formats from the past, partially referencing the sound-era silent film format, and the fluid editing style is supported by soundtracks of pop, disco, and traditional music. This unique hybrid moving image and sound astonishingly brings back collective memories from each era. The film world premiered in the Competition program at the Cannes Film Festival.

## Director's Biography

Jia Zhang-Ke was born in Fenyang, Shanxi, in 1970 and graduated from Beijing Film Academy. His debut feature "Xiao Wu" won prizes in Berlin, Vancouver and elsewhere. Since then, his films have routinely premiered at major European festivals. "Still Life" won the Golden Lion in Venice in 2006, "A Touch Of Sin" won the Best Screenplay prize at Cannes in 2013 and "Mountains May Depart" and "Ash Is Purest White" were in competition in Cannes 2015 and 2018. Several of his films have blurred the lines between fiction and documentary.

## Director's Statement

I'd been traveling to Datong often since 2001, and filming the city with whatever camera I was using at the time. Datong was renowned as a coal-mining city, but by the time I began spending time there the mines were becoming exhausted, and coal-prices were dropping. But China's economy was rapidly opening up, and a new vitality was on display everywhere I looked. I captured singing crowds with my camera. I swirled with the dancers. I followed the young people to all their favorite places. The camera in my hand overflowed with unknown pleasures. Over the following twenty years I've followed some of those same people now and again, tracking them to the Three Gorges on the Yangtze River, to Zhuhai in the far south, to China's north-east and south-west. As they have grown older, the cameras I've carried have also evolved: from simple DV to Alexa and to VR. In my editing room I've often looked back at the footage I've shot over the years.

The images grow distant as I can feel the times they record slipping away. Good times in the past become almost dream-like. All this time, I've looked for the underlying interconnections in this footage. It was only in 2022, during the Covid lockdowns, that I found the stories coming together within the frame of the two decades since I started filming it. It struck me that the footage had no linear, cause-and-effect pattern. Instead, there was a more complex relationship, not unlike something from quantum physics, in which the direction of life is influenced and ultimately determined by variable factors that are hard to pinpoint.

I gave the generation shown in the film a name when I chose the Chinese title: the literal meaning of Feng Liu Yi Dai might be "A Drifting Generation", but the term Fengliu (literally, "Wind and Waves") has a strong romantic connotation. The camera has captured things we thought we'd forgotten, but they are the things which made us what we are today.

## スユチョン

By the Stream

South Korea / 2024 / 111min



© 2024 Jeonwonsa Film Co. All Rights Reserved.

## 作品解説

ソウルの女子美術大学を舞台にしたこの映画は、もうそれほど若くはない大学講師のジョンイムが、かつてはその分野で有名だった叔父のチュ・シオンに大学の演劇祭で学部の学生たちの寸劇を演出させようと大学に招へいするところから始まる。演劇祭の準備が始まり、その過程でシオンはジョンイムの上司で彼の大ファンである女性教授チョンと親しくなっていく……。本作は「A Traveler's Needs (英題)」に続く今年2作目のホン・サンス監督作品。登場人物たちが食事をし、酒を酌み交わす場面で重要なことが示唆されることが多いホン作品だが、この作品もその例に漏れず、川沿いにある鰻料理店で多くの進展や転回が起こる(また、川沿いの店ではないが、演劇祭の打ち上げの席で学生たちが独白する場面は不意に訪れる感動的なシーンだ)。ジョンイムは織機で繊細なパターンの織物を作る新進の芸術家であり、そのことがこの作品の主題の一つである演劇の考察と共に、作品にもう一つのレイヤーを与えている。ロカルノ映画祭のコンペティション部門で上映され、主演のキム・ミニが最優秀演技賞を受賞した。



## 監督

## ホン・サンス

HONG Sangsoo

1960年、ソウル生まれ。韓国中央大学で映画制作を学んだのち、カルフォルニア芸術大学、シカゴ芸術大学で美術学士号、美術修士号を取得。その後フランスに渡り、シネマテーク・フランセーズなどに通い詰めた。韓国に戻り、96年に「豚が井戸に落ちた日」で監督デビュー。パンクバー映画祭、ロッテルダム映画祭などで受賞を果たす。2004年

の「女は男の未来だ」がカンヌ映画祭のコンペティション部門に初選出。「アバンチュールはパリで」(08)から「ヘウォンの恋愛日記」(13)までは7作連続で世界三大映画祭(カンヌ、ヴェネチア、ベルリン)に出品されるという快挙を成し遂げた。

## メッセージ

さまざまなことについて多くの話がされる中、ジョンイムは小川のそばに座り、その流れのパターンをスケッチし、捉えようとしています。

## Notes

Set in a women's art college in Seoul, this film begins with Jeonim, a university instructor who isn't so young anymore, inviting her once-famous actor-director uncle, Chu Sion, to direct a student skit for the university's theater festival. As preparations for the festival begin, Sion grows close to a female professor, Jeong, who is his biggest fan and also Jeonim's superior. This is Hong Sangsoo's second film this year, following "A Traveler's Needs." It follows his style of significant themes being suggested during scenes of drinking and eating, with much of the plot and pivotal moments occurring at a riverside eel restaurant. While not set at the restaurant, a scene of the students delivering monologues at the festival's wrap-up party also unfolds in a surprisingly poignant fashion. Jeonim is portrayed as an emerging artist creating delicate woven patterns on a loom, adding another layer to the film's central theme of theater. The film was screened in competition at the Locarno Film Festival, where lead actress Kim Minhee won the Best Acting Award.

## Director's Biography

Born in 1960 in Seoul. After studying film at Chungang University, he acquired his fine arts bachelor's and master's degrees at California College of Arts, and the School of the Art Institute of Chicago. Then he traveled to France where he frequented the Cinematheque Francaise. Returning to South Korea, he made his directorial debut in 1996 with "The Day a Pig Fell Into the Well" which won awards at the Vancouver and Rotterdam international film festivals. 2004's "Woman is the Future of Man" was his first to be selected for the Cannes Film Festival's Competition Section.

Thereafter he achieved a remarkable accomplishment by having 7 consecutive films, from "Night and Day" (2008) to "Nobody's Daughter Haewon" (2013), screened at the three major international film festivals: Cannes, Venice, and Berlin.

## Director's Statement

Much is being said about many different things, while Jeonim sits by a stream and tries to sketch and grasp the patterns of that stream.

脚本・監督・製作 ●ホン・サンス プロダクション・マネージャー ●キム・ミニ プロダクション・アシスタント ●キム・ヘジョン

サウンドレコーディスト ●ソ・ジファン 撮影・編集・作曲 ●ホン・サンス ワールドセールス ●FINECUT

出演 ●キム・ミニ、クワン・ヘヒョ、チョ・ユンヒ、ハ・ソングク、カン・ソイ、パク・ハンビツナラ、オ・ユンス、パク・ミン、イ・ギョングミン、ハン・ヌリ、キム・ソンジン

Written, Directed and Produced by ●Hong Sangsoo Production Manager ●Kim Minhee Production Assistant ●Kim Hyejeong Sound Recorder ●Seo Jihoon Photographed, Edited,

Composed by ●Hong Sangsoo Production Company ●JEONWONSA Film Co. Production

Cast ●Kim Minhee, Kwon Haehyo, Cho Yunhee, Ha Seongguk, Kang Soyi, Park Hanbitnara, O Yoonsoo, Park Miso, Lee Kyoungmin, Han Nuri, Kim Sunjin

World Sales ●FINECUT

## ブルー・サン・パレス

Blue Sun Palace (藍色太陽宮)

USA / 2024 / 116min



## 作品解説

ニューヨークのクイーンズの中国式マッサージ店に住み込みで働くエイミーとディディ。彼女たちはディディの幼い娘が叔母と暮らしているボルチモアで一緒にレストランを開くことを夢見ながら、強固な姉妹関係を築いている。一方、ディディは建設作業員として働きながら台湾の家族に送金している中年男性のチュンと付き合い始めており、彼と一緒に暮らすことも望むようになる。しかし、予期せぬ暴力行為が旧正月に彼らの生活に侵入すると、彼らの夢は脆くも崩れ去り、痛ましくないが残される……。本作が初長編監督作となるコンスタンス・ツァン監督は、撮影監督ノーム・リーの力を借りて、この長引く悲しみをざらついた質感と陰鬱な映像で美しく表現する。沈黙が何よりも雄弁に物語を語り、移民であることの孤独、そしてかつて故郷と呼んでいた場所から遠く離れた時に家族やコミュニティのような存在がどれだけの意味を持つかを静かに訴えかけている。カンヌ映画祭の批評家週間上で上映され、フレンチ・タッチ賞を受賞した。



## 監督

## コンスタンス・ツァン

Constance TSANG

ニューヨークを拠点に活動する中華系アメリカ人の脚本家、監督、教育者である。彼女は最近、コロンビア大学で脚本・監督のMFAを取得し、ロバート・ゴア・リフカインド・ランチ基金を受賞した。彼女の短編映画「BEAU」は、修士論文のショーケースで業界パネルから選ばれ、全米監督協会の第26回学生映画賞(東海岸アジア系アメリカ人カテゴリー)で審査員賞を受賞した。「BEAU」は、メトログラフ、パームスプリングス短編映画祭、アウトフェスト、ブルックリン映画祭、ロサンゼルス・アジア太平洋映画祭、メルボルン・クィア映画祭などで上映され、現在はVimeoのStaff Picksで視聴可能。彼女の前作「CARNIVORE」は、2018年のAT&T Hello Labプロジェクトに選ばれた。この映画はDirect TVで初公開された後、Alterに買収された。彼女の作品は、スターライト・スターズ・コレクティブやトライベッカ映画祭から支援を受けており、「ブルー・サン・パレス」が彼女の初の長編映画となる。

## メッセージ

「ブルー・サン・パレス」のルーツは、私が16歳の時に父を失ったことに遡ります。この映画の舞台でもあるフラッシングで私たちは暮らしていましたが、父が亡くなった後、母と私は引越しました。当時、私は悲しみをどう処理すればいいかわからず、私たちが家去ったのと同じように、その悲しみも置き去りにしました。

映画を書き始めたとき、私は過去と、かつてのコミュニティと再びつながりたいと思っていました。しかし、気が付かなかったのは、この物語が父との再会の手段であったということです。私は、大切な人を失った後に私たちが下す決断について考え始めました。特に、私たちが関わる人間関係や、必ずしも自分にとって正しい相手ではないと分かっているにもかかわらず、慰めを求める相手についてです。この映画を書き終えた頃、私は長年のパートナーと離婚することになりました。

私の現実を感情的に反映した映画を書く過程は、私の記憶と願望を融合させました。悲しみが大きなテーマですが、家、安らぎ、愛も重要な要素です。今、「ブルー・サン・パレス」を観ると、それが私にとって何を意味するのか分かるようになりました——それは、子供時代の亡霊たちへの手紙であり、アメリカに一つの夢を持って来て別の夢に落ち着いた両親への手紙であり、今や理解できる父への手紙であり、そして人生における喪失を再定義しようとしている私自身への手紙なのです。

脚本・監督 ●コンスタンス・ツァン プロデューサー ●サリー・スジン・オー、エリ・ラスキン、トニー・ヤン 撮影監督 ●ノーム・リー C.S.C. プロダクションデザイナー ●エイバリン・ウー・ホアン  
 編集 ●ケイトリン・カー 音楽 ●サミ・ジャロ 衣装デザイナー ●アヴァ・ユリコ・ハマ キャスティングディレクター ●ケイト・アントニーニ 共同プロデューサー ●ナビール・カーン、マルタ・クルアニアス・コンペス アソシエイトプロデューサー ●ルー・ワン・ホルボーン、ルー・チャン  
 出演 ●ウー・カー・シー、リー・カンジョン、シュー・ハイベン、ハン・シェミン、ジェン・リー・シャ、レオ・チェン、ウー・チェンイン、ファン・グイピン、エイプリル・ワン、ジュ・ヤティン、ワン・リミン、ジャネット・シェ、リリー・ガオ、リン・シン、ルー・チャン、フ・ランラン、リー・ジンシア、ダミアン・ブラウン、ジェイミー・ティアニー、ザカリー・サムスキー、スン・シャオシャオ  
 Written & Directed by ●Constance Tsang Producers ●Sally Sujin Oh, Eli Raskin, Tony Yang Cinematography ●Norm Li C.S.C. Production Designer ●Evaline Wu Huang Editor ●Caitlin Carr Music by ●Sami Jaro Costume Designer ●Ava Yuriko Hama Casting Director ●Kate Antognini Co-producers ●Nabeer Khan, Marta Cruañas Compes Associate Producers ●Lou Wang-Holborn, Lu Zhang Cast ●Ke-Xi Wu, Lee Kang Sheng, Haixpeng Xu, Min Han Hsieh, Lisha Zheng, Leo Chen, Gueping Wu, Guijing Huang, April Wang, Yating Zhu, Limin Wang, Janet Hsieh, Lily Gao, Lynn Xiong, Lu Zhang, Ranran Hu, Jinxia Li, Damien Brown, Jamie Tierney, Zachary Zamsky, Xiaoxiao Sun

## 愛の名の下に

## Mistress Dispeller (以愛之名)

China, USA / 2024 / 94min



© 2024 Jeonwonsa Film Co. All Rights Reserved.

## 作品解説

このドキュメンタリー作品では、プロの別れさせ屋の介在を通して、ある中年夫婦と若い女性の三角関係があらゆる角度から精査される。この「愛人払い」ビジネスは、夫婦カウンセリングの一種のバリエーションであり、妻が夫を不倫関係から引き離すために密かに恋愛の第一人者を雇って潜入させるといふものだ。本作が三角関係の三つの角のすべてに驚くほど接近できているのは、この作品の主要登場人物である愛人払いのワン・ジェンシー、通称ワン先生の手腕によるところだといふ。自分の顧客をカメラの前に立たせることができた愛人払いは彼女だけで、資料によれば、残りの角の二つ、つまり夫とその不倫相手の若い女性に関しては、制作チームは当初は現代中国の愛についてのドキュメンタリーを作るといふ名目で彼らにアプローチしたとのこと(撮影後に、改めて全員がこの作品への出演に同意した模様)。「ストレイ 犬が見た世界」で知られる香港系アメリカ人監督エリザベス・ローの長編2作目。ヴェネチア映画祭のオリゾンティ部門で上映され、アジア映画を対象としたNETPAC賞を受賞した。



監督

エリザベス・ロー  
Elizabeth LO

香港で生まれ育ち、ニューヨーク大学ティッシュ芸術学校のBFAとスタンフォード大学のMFAを取得。ドキュメンタリー監督として、IDFA、SXSW、トライベッカ、MoMAなどへの出品歴がある。Filmmaker Magazineの「25 New Faces of Independent Film」、DOC NYCの「40 Under 40」にも選出。長編デビュー作「ストレイ 犬が見た世界」は、2020年にトライベッカで上映、Hot Docsで最優秀国際長編賞を受賞し、インディペンデント・スピリット・アワード、批評家選出ドキュメンタリー賞にノミネート。同作はMAGPIE・ビグチャーズによって劇場公開され、また「Hotel 22」、「Bisonhead」、「Mother's Day」といった短編映画監督作は、世界中の大学や図書館に収蔵されている。

## メッセージ

物心ついた時から私はラプストーリーが好きでした。香港で育った私は、地元のビデオレンタル店の恋愛映画コーナーもいつも真っ先に見ていました。「誰かのいい恋愛」「ソフティング」の恋人、インパクトに惹かれます。「ムーン・ルーシェ」、「ロスト・イン・トランスレーション」といった映画を繰り返し見ながら成長し、世界中の多くの人々と同時に理想的なロマンスに私の恋愛観も影響されました。しかし私の家族の中での愛の経験は、それらの映画に描かれているものとは大きく異なり、犠牲や義務、言葉にされないものと密接に結びついていました。監督として、この特殊な愛の形を自分のカメラを通して見たかったのです。そして不倫の危機を通して、私の文化における感情の表現や体験を探りたかったのです。この映画は、過去10年の間に中国で出てきた結婚相手とその愛人の不倫関係を終わらせる愛人払いの世界、新たな「愛の産業」が舞台です(これは経済成長と共に急増した不倫の反映でもあります)。費用は数万円ドルから、愛人払いは通常、事に2〜3か月の期間で雇われ、自分の身分で愛人の生活に割り込み、信頼を得て愛人自身が関係を終わらせるように仕向けます。正確な数字は不明ですが、インターネット上には数百もの別れさせ屋の広告が存在しています。準備の過程で、私たちはワン・ジェンシーに出会うまでに何十もの別れさせ屋に会いました。愛人達も含め彼女のクライアントは、彼女を信頼し慕っているようで、このおかげで未知らぬで隠される家族のプライベートのあらゆる内情にこれまでにはいほど深く立ち入ることができました。本作では、三角関係のすべての人物に共感をもって掘り、「陣中待」のような愛を築こうとしました。「陣中待」のように本作の舞台である現代中国は不安定な状況です。愛人産業は、中間階級の拡大と富裕層の上昇による家族や社会的規範の変化と密接しているのです。この複雑した愛の物語を撮影する中で、欲望、孤独、後悔といった言葉にできない感情が私の撮影の中から湧き出てきました。李さん、李婦人、フェイフェイが安心して自分自身を見せるための時間と空間を確保しました。カメラの動きを排除し、ショットを通常より長くすることで、李氏夫妻とフェイフェイは自分たちの内面を深く表現できるほどにリラックスでき、より多くの自分を見せてくれました。彼らが普遍している感情の抑圧や表現の難しさ、つながらずの興奮、そして捨てられることへの恐れは、私にとって非常に共感できるものでした。中国の広大な風景を背景に、プッチーニの「蝶の舞」からフランスのインディペンデント・スピリット・アワードに至るまでの音楽を選び、つながらずと過期、義務と欲望、過去と現在の間で揺れ動く心にもある余韻の風景を表現しました。米中の対立が深まる時代にあって、私は香港市民として、日々ややを運ぶのではなく、分断の中で橋渡しを目指すドキュメンタリー作品を作りたいと考えています。世界共通の普遍的な興味がありながらも現代中国に特有の出来事を取り下げることで21世紀における僕等つとこと、慮すること、孤独を感じることを、そして愛することの意味について問いかけたいと考えています。

監督・プロデューサー◎エリザベス・ロー プロデューサー◎エマ・D・ミラー プロデューサー◎マギー・ロー 編集◎シャーロット・ムンク・ハンズステン 共同編集◎エリザベス・ロー、シャーロット・ムンク・ハンズステン  
エグゼクティブ・プロデューサー◎ジュリエット・ケルシー・ケニグ、ジェラルド・ホワイト・ドレイフス、エグゼクティブ・プロデューサー、ニック・シュメイカー、ジェニファー・グリンショウ、デビッド・レヴィン、ドーン・オルムステッド、エグゼクティブ・プロデューサー◎デヴィッド・テラー、デビッド・クック、グザヴィエール・エグゼクティブ・プロデューサー◎スティーブ・ユエ、ローラ・ポロニー、共同エグゼクティブ・プロデューサー◎ローレン・ヘイバー、マニー・E・J・グロスマン 音楽◎ブライアン・マクマラー 撮影編集◎エリザベス・ロー 共同編集◎オグ・コンフォート、アダム・エドラー◎ジュ・ウジ、ソウル・テック、プロデューサー◎エリザベス・ロー、シャーロット・ムンク・ハンズステン  
Directed and Produced by◎Elizabeth Lo Produced by◎Emma D. Miller Producer◎Maggie Lo Edited by◎Charlotte Munch Bengtson Co-Edited by◎Elizabeth Lo Written by◎Elizabeth Lo, Charlotte Munch Bengtson  
Executive Producers◎Jenny Raskin, Kelsey Koening, Gerilyn White Dreyfus Executive Producers◎Nick Shumaker, Jessica Grimshaw, David Levine, Dawn Olmstead Executive Producers◎Rahdi Taylor, Davis Guggenheim  
Executive Producers◎Steve Cohen, Paula Froehle Executive Producers◎Lauren Haber, Marri E. J. Grossman Original Music by◎Brian McOmber Director of Photography◎Elizabeth Lo Co-Editor◎Ora DeKonfeld  
Assistant Editor◎Lixin Zhu Consulting Producer◎Mable Chan  
International Sales◎The Zhu Film Sales

## Notes

This documentary is a close examination, from every angle, of a love triangle between a middle-aged couple and a young woman, through a professional "dispeller" of mistresses. This profession is a variation of marriage counseling in which a wife secretly hires a relationship specialist to intervene in situations of infidelity, pulling her husband away from his lover. The film's stunning ability to explore all three angles of the love triangle is a tribute to the skillful technique of the dispeller, Wang Zhenxi, known as Teacher Wang. She is the only one in her profession who has succeeded in convincing her clients to be filmed. The production team initially approached the husband and his young mistress under the guise of creating a documentary about love in contemporary China, and all parties also approved post-filming. This is the second feature film by Hong Kong-American director Elizabeth Lo, who gained recognition for her first film, "Stray." "Mistress Dispeller" was screened in the Orizzonti section of the Venice Film Festival and received the NETPAC Award for Asian cinema.

## Director's Biography

Born and raised in Hong Kong, Elizabeth holds a BFA from NYU Tisch School of the Arts and an MFA from Stanford University. Elizabeth is a filmmaker whose documentary films have been showcased at Sundance, IDFA, SXSW, Tribeca, MoMA, AFI Fest, True/False, New York Times Op-Docs, Field of Vision and PBS' POV. Elizabeth has been featured in Filmmaker Magazine's "25 New Faces of Independent Film," DOC NYC's "40 Under 40," and Cannes Lions' "New Directors Showcase." Her debut feature, "Stray," won Best International Feature at Hot Docs and received nominations from the Independent Spirit Awards, Critics Choice Documentary Awards and Cinema Eye Honors after premiering at Tribeca in 2020. A New York Times "Critic's Pick," "Stray" was released theatrically by Magnolia Pictures and is now streaming on Hulu. Her short films — including "Hotel 22," "Bisonhead," and "Mother's Day" — have been acquired by colleges and libraries worldwide.

## Director's Statement

I have loved love stories for as long as I can remember. Growing up in Hong Kong, the romance section of our local movie rental store was always the first place I'd look. I came of age watching movies like "A Room with a View," "Notting Hill," "Bend It Like Beckham," "Moulin Rouge" and "Lost in Translation on repeat. Like many around the world, these idealized visions of romance shaped mine.

Yet my experience of love within my own family was markedly different from what I saw represented in these movies. In my home, love was bound up with sacrifice, duty and what's left unsaid. As a director, I wanted to see this specific kind of love through my own camera, and use a crisis of infidelity as my entryway to discover how emotion is expressed and experienced in my culture.

The film is set within the world of mistress dispelling, a new "love industry" specialized in ending affairs between married spouses and their extramarital lovers that has only emerged within the last decade in China (a response to rising rates of adultery that have ballooned alongside its economy).

For a fee that can start at tens of thousands of dollars, a mistress dispeller is typically hired for two to three months by a wife to infiltrate a mistress's life — to gain the mistress's confidence under a false identity and influence her to end the affair of her own accord. There are no exact figures for how many operate in China, but ads for hundreds of mistress dispelling companies exist online.

During our scouting process, we met with dozens of them — until we found Wang Zhenxi. Teacher Wang's clients seem to adore and trust her (including the mistresses she befriends) and this allowed us to gain unprecedented access to all angles of what would typically be a private family matter concealed by shame. My aim was to craft a Rashomon-inspired romance that empathetically portrayed all sides of a love triangle. Like "Rashomon," our aim is set during a time of national tumult; our protagonists are grappling with seismic shifts to society and family that have resulted from China's rapidly expanding middle and upper classes and the rising divorce rate.

In filming this fractured love story, something indefinable around longing, loneliness and regret sprang from its cracks. By eschewing camera movement and holding shots for unconventionally long amounts of time, Mr. Li, Mrs. Li and Fei Fei were allowed to feel comfortable enough to reveal deeper layers of themselves as they struggled with shortcomings I found all too relatable: the repression of emotion, the difficulty of expression, the excitement of connection, the dread of abandonment. Over China's sweeping landscapes, we chose a soundtrack that stretched from Puccini's "Madame Butterfly" to French indie band Odezenne to convey the eternal pull — between connection and conformity, duty and desire, the past and the present — that lives in each of us.

In an era of increasing polarization between the US and China, it was important to me as a Hong Kong citizen to make a documentary film that bridges this divide rather than alienating people and cultures from one another. By investigating an experience that is at once universally familiar and uniquely specific to contemporary China, I hope to ask what it means to hurt, to heal, to fear loneliness, and to love, in the 21st century.

# ポル・ポトとの会合 Meeting with Pol Pot (Rendez-vous avec Pol Pot)

France, Cambodia, Taiwan, Qatar, Turkey / 2024 / 112min



© Dulac Distribution

## 作品解説

ジャーナリストのエリザベス・ベッカーが学者のマルコム・コールドウェルとジャーナリストのリチャード・ダッドマンと共に1978年にプノンペンを訪れた時の記録『When the War Was Over』を大まかに脚色したこの物語は、ポル・ポトとの独占インタビューを前に、3人のジャーナリストたちが役人たちによる厳しい統制下で、政策の施行現場を巡る様子を追う。役人たちが信奉している現実の断片は、時折、表面に亀裂が生じ、彼ら3人は、革命の教義の下で彼らが犯している恐ろしい行為を垣間見ることができるが、肝心のポル・ポトとの会合の実施ははずると先延ばしにされていく……。色褪せたアーカイブ映像や写真、そして部分的に土人形劇を劇映画に組み合わせることで、リティ・パンは事実に基づくこの架空の物語を長く記憶に残る誠実な作品に仕立て上げている。彼はそのキャリアの大部分を、故郷カンボジアのクメール・ルージュによる大量虐殺の時代を探求することに捧げてきたが、本作はそうした作品群に重要な側面を加えるものになるはずだ。カンヌ映画祭のカンヌ・プレミア部門で初上映された。



監督

リティ・パン

Rithy PANH

カンボジアのプノンペン生まれ。クメール・ルージュ政権による大量虐殺を逃れ、1980年にパリに到着。IDHECで学ぶ。2003年の『S21、クメール・ルージュの虐殺者たち』は、1975年から1979年にかけてクメール・ルージュによって組織的に行われた抹殺政策を検証し、広く受賞したドキュメンタリーである。2006年、カンボジアにボバナ視聴覚リソースセンターを共同設立。

同センターはカンボジアの視聴覚遺産のアーカイブへの保存とその専門家の養成を行っている。2013年には監督作『消えた画 クメール・ルージュの真実』がカンボジア映画として初めてアカデミー賞外国語映画賞にノミネートされる。2020年の第70回ベルリン映画祭のコンペティション部門に出品された前作『消えた画』は、最優秀ドキュメンタリー賞を受賞。また、グラセット社より出版されたクリストフ・パタイユとの共著『消去 — 虐殺を逃れた映画作家が語るクメール・ルージュの記憶と真実』および『Peace with the Dead』を含む、数冊の本を共著者として発表している。

## Notes

A feature film based loosely on the journalist Elizabeth Becker's account of her visit to Phnom Penh in 1978, alongside scholar Malcolm Caldwell and journalist Richard Dudman, titled "When the War Was Over." It follows the three journalists as they must navigate strict official control in order to observe how government policy is implemented, leading up to their exclusive interview with Pol Pot. The officials' meticulously crafted facade occasionally crumbles, offering the journalists a fleeting view of the terrible deeds carried out in the name of the revolution. Still, their eagerly awaited meeting with Pol Pot continues to be postponed. Rithy Panh has created a poignant and memorable piece of fictional narrative rooted in fact by incorporating not only faded archival footage and photographs into the film, but also elements of shadow puppet theater. Panh has devoted much of his career to examining the Khmer Rouge era in his native Cambodia, and this film surely provides significant new depth to this oeuvre. It premiered in the Cannes Première section of the Cannes Film Festival.

## Director's Biography

Born in Phnom Penh, Cambodia, Rithy Panh arrived in Paris in 1980 after fleeing the genocide led by the Khmer Rouge regime.

He studied at IDHEC. In 2003, S21, The Khmer Rouge Killing Machine, a widely awarded documentary, reviews the policy of systematic elimination orchestrated by the Khmer Rouge between 1975 and 1979. In 2006, he co-founded the Bophana center in Cambodia, allowing archiving Cambodian audiovisual heritage and training in its professions.

In 2013, his film The Missing Picture was the first Cambodian film nominated for an Oscar, for best foreign language film. His latest film Irradiated, in competition at the Berlinale 2020, received the award for best documentary. Rithy Panh has co-authored several books including "The Elimination" and "Peace with the Dead" with Christophe Bataille published by Grasset.

監督◎リティ・パン 脚本◎ピエール・エルワン・ギヨーム、リティ・パン(エリザベス・ベッカー著『When the War Was Over』を原作とする) 撮影◎エメリック・ピラルスキー、メサ・プラム 編集◎リティ・パン、マチュー・ラクロワ 音響◎ニコラ・ヴォルト、杜篤之(ト・ドゥーチ)、エリック・ティセラン、社則剛 美術◎マゾク・サルト、スロ・キムサン、チャルレー・クラウチ 衣装デザイン◎アリアーヌ・ヴィアレット プロダクションマネージャー◎ソフィ・デュ・ブー 音楽◎マルク・マードー 音楽共同制作・録音◎ミッチ・リン、ジャオティン・サン(指揮:チャン・ユアン) 制作◎CDP およびアヌベップ・プロダクション、タイカ、ドー・ハ映画協会、TRTシネマ、LHBxアテチュード、オハラ・センター 協力◎フランス国立映像センター、Canal+, Ciné+, フランコフォニー-映像基金、ラ・バンク・ボスタル・イマージュ 16 プロデューサー◎カリム・デュバル、リティ・パン、ジュスティーン・O. ロジャー・ホアン、フットマ・ハッサン・アルマイヒ、ハナ・イッサ、メフメット・ザビド・ババチ、ムハンマド・ジヤード・バドゥル、ミルサド・ブリアトラ、ヨバン・マルヤノヴィッチ、ジョルジュ・マルク・ベナムー フランス配給◎Dulac Distribution 国際セールス◎Playtime 出演◎ルネ・ジャコブ、クルゴワール・コラン、シリル・グイ、ブノワ・リム、ソマリム・マオ  
Director◎Rithy Panh Screenplay◎Pierre Erwan Guillaume, Rithy Panh (based on When the War Was Over by Elizabeth Becker) Cinematography◎Amyeric Pilarski, Mesa Prum Editing◎Rithy Panh, Matthieu Laclau Sound◎Nicolas Volte, Tu Dau-Chih, Eric Tisserand, Tu Tse-Kang Set Design◎Amyeric Pilarski, Mang Sareth, Sou Kimsan, Chaney Krauch Costume Design◎Ariane Viallet Production Manager◎Sovichka Cheap Music◎Marc Marder Music co-produced and recorded by◎Mitch Lin, Shao-Ting Sun Under the direction of◎Yu-An Chang A production◎CDP and Anuphep Production, Taicxa, Doha Film Institute, TRT Sinema, LHBx An attitude, Obala Center With the letter C national de la Cinématographie et de l'image animée, Canal+, Ciné+, le Fonds Image de la Francophonie, La Banque Postale Image 16 Producers◎Catherine Dussart, Rithy Panh, Justine O., Roger Huang, Fatma Hassan Alrehami, Hanan Issa, Mehmet Zahid Sobaci, Muhammed Ziyad Varol, Mirsad Purivatra, Jovan Marjanovic, Georges-Marc Benamou Cast◎Irene Jacob, Grégoire Colin, Cyril Guei, Bunhok Lim, Somaline Mao French Distribution◎Dulac Distribution International Sales◎Playtime

## 無所住

## Abiding Nowhere (無所住)

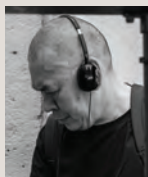
Taiwan, USA / 2024 / 79 min



Photo by Claude Wang

## 作品解説

マレーシア出身の台湾の巨匠ツァイ・ミンリヤンの演出、リー・カンションの主演による「行者(Walker)」シリーズの第10作目。9作目の『何処』に続き、アノン・ファンファンも出演している。スミソニアン国立アジア美術館の委託を受けて制作された作品で、同美術館のあるワシントンDCの街やフリーア美術館を舞台に、有名な文学作品『西遊記』の着想源となった7世紀の仏僧玄奘(三蔵法師)の中国からインドへと至る巡礼の旅からインスパイアされた、非常にゆっくりとした修行僧の歩みが捉えられている。ベルリン映画祭のベルリナーレ・スペシャル部門で世界初上映された。



## 監督

ツァイ・ミンリヤン  
TSAI Ming-Liang

1957年、マレーシアに生まれる。1992年、長編デビュー作『青春神話』(92)がベルリン映画祭でプレミア上映される。第2作『愛情萬歳』(92)でヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞し、ベルリン映画祭でも『河』(96)が審査員特別賞を受賞したことにより、メジャーな映画監督としての地位が固まった。今までの長編映画は全て世界三大映画祭で出品され、そのうち5作品はFIPRESCI賞を受賞。2009年、『ヴィザージュ』(09)はルーブル美術館に収蔵された初めての劇映画となった。

近年、ツァイは美術界からも注目を集め、様々な展覧会やフェスティバルへ招待されており、『Hand-sculpted Cinema』や『The removal of industrial process from art making』といった美的理念を提唱している。2012年に「行者」シリーズを開始し、完成された10作品は世界中のアートフェスティバルやギャラリーで上映された。一方、台湾ではツァイは『Art Museum as Cinema』、『The Author's Intended Way of Viewing』といったコンセプトを提唱し、週刊に商業化した映画産業とのバランスをとるための新しい映画の見方を紹介している。

## メッセージ

「Walker」シリーズのコンセプトは、10年前に私が演出した演劇から生まれました。その中で、シャオカン(リー・カンション)がソロシーンの一部として、ゆっくりと歩くパフォーマンスを行いました。このシーンは美しく力強く、私の心を深く打ちました。そのため、私はこのパフォーマンスを映像作品として制作することを決意しました。

私は、シャオカンの外見をスタイリングしました。剃り上げた頭、裸足、そして赤いローブを纏った姿は、まるで苦行者のようです。このアイデアは、仏典を求めて中国からインドまで数千マイルの旅を歩んだ唐代の僧侶、玄奘の精神にインスパイアされたものです。

私は、この現代版の玄奘が世界を歩き回ることができるかどうかを考えました。彼が歩く各地を映画にできるのではないかと考え、10年間で10本の映画を作ろうと思ったのです。彼が非常にゆっくりと歩いているため、観客は彼を見ながら、彼の周りの世界にも目を向けざるを得ません。観客は、この視点を通して世界をどう感じるのでしょうか。「Walker」シリーズは、2012年に始まりました。これまでに、10本の映画を制作するという目標を達成しました。ワシントンD.C.で制作された第10作目は、私にとってまるで夢のようです。

## Notes

The tenth title of the Walker series directed by the Taiwan-based Malaysian maestro Tsai Ming-Liang, starring Lee Kang-shen. Anong Houghheangsy also appears in this film, following his performance in the ninth film "Where" (2022). Commissioned by the Smithsonian Institution's National Museum of Asian Art, the film captures the very slow steps of an ascetic monk in sceneries of Washington D.C. and Freer Gallery of Art, inspired by the 7th century Buddhist monk Xuanzang's pilgrimage from China to India, which inspired the famous literary work "Journey to the West." The film had its world premiere at the Berlin International Film Festival Berlinale Special Section.

## Director's Biography

Born in Malaysia in 1957, Tsai Ming-Liang premiered his debut feature, "Rebels of the Neon God", at the Berlinale in 1992. His sophomore film, "Vive L' amour" (1994), won the Golden Lion award at the Venice Film Festival while "The River" (1996) won the Jury Award at Berlin, thus solidifying his status as a major filmmaker. All of his feature films so far have been selected by the top three film festivals of the world while five of them have won the FIPRESCI Award. In 2009, "Face" became the first film to be included in the collection of the Louvre Museum's "Le Louvre s'offre aux cinéastes".

In recent years, Tsai has also received attention in the art world, having been invited to participate in various art exhibitions and festivals, and for putting forth such aesthetic ideas as the "Hand-sculpted Cinema" and "The removal of industrial processes from art making". In 2012, he began his "Slow Walk" series and has since completed 10 films, screened at art festivals and galleries around the world. Back in Taiwan, he actively promoted the concept of "Art Museum as Cinema" and "The Author's Intended Way of Viewing", introducing new film-watching modes as a way to balance the overly commercialized film market.

## Director's Statement

The concept for the Walker series was born out of a play I did ten years ago, in which Hsiao Kang performed a slow walking segment as part of his solo scene. It was beautiful and powerful, and it touched me deeply. I therefore decided to turn this performance into a work of moving images.

I designed Hsiao Kang's look — shaved head, bare feet, red robes, like an ascetic. This idea was inspired by the spirit of Xuanzang, a Tang Dynasty monk who travelled thousands of miles on foot from China to India in search of Buddhist scriptures.

I wondered if this modern version of Xuanzang could walk around the world. I thought each location that he walks at could be a film. I could make ten films in ten years, perhaps more. When we observe the walker in these films, because he is walking so slowly, we can't help but also see the world around him. What would the viewer make of the world, seen through this way?

The Walker series began more than ten years ago in 2012. To date, I have realized my goal of making ten films. That the tenth film is made in Washington DC is like a dream to me.

監督●ツァイ・ミンリヤン エグゼクティブプロデューサー●ツァイ・ミンリヤン、ユー・ペイフア 共同エグゼクティブプロデューサー●リー・シューピントム、ヴィック プロデューサー●クラウド・フン  
ライオンプロデューサー●チェン・イー 撮影監督●ジョン・ユアン・チャン 衣装デザイナー●ワン・チャウ・フイ 編集●ジョン・ユアン・チャン 音響デザイナー●リン・ツァーシアン  
共同制作●C35フィルムズ スチール写真撮影●クラウド・フン グラフィックデザイナー●ウインター・チェン タイトル書道●リー・カンシェン 英語翻訳●オン・チャオフン  
プレゼンテーション●スミソニアン協会、国立アジア美術館、台湾公共テレビ台基金会、ホームグリーンフィルムズ 製作●ホームグリーンフィルムズ 協力●台湾文化部(中華民国)、国立アジア美術館  
出演●リー・カンション、アノン・ファンファン

Director●Tsai Ming-Liang Executive Producer●Tsai Ming-Liang, Yu Pei-Hua Co-Executive Producer●Li Shu-Ping, Tom Vick Producer●Claude Wang Line Producer●Chen Yi  
Director of Photography●Jhong-Yuan Chang Costume Designer●Wang Chia-Hui Film Editor●Jhong-Yuan Chang Sound Designer●Lin Zi-Xiang In Association With●C35 FILMS  
Still Photographer●Claude Wang Graphic Designer●Winder Chen Film Title Calligraphy●Lee Kang-Sheng English Translation●Ong Chao-Hung

Cast●Lee Kang-Sheng, Anong Houghheangsy  
Present by●Smithsonian Institution's National Museum of Asian Art, Taiwan Public Television Service Foundation, HomeGreen Films  
With Support●Ministry Of Culture, Taiwan (R.O.C.) & National Museum of Asian Art, A HOMEGREEN FILMS production



## 何処

Where (何處)

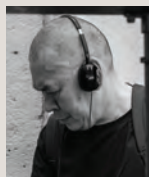
Taiwan / 2022 / 91min



Photo by Claude Wang

## 作品解説

2022年11月から2023年1月にかけてパリのポンピドゥー・センターにて開催されたツァイ・ミンリャン監督の全面的なレトロスペクティブと展覧会「Une Quête」に合わせて制作された「行者(Walker)」シリーズの第9作。『日子』(20)に出演していたアノン・ファンファンシーが行者役のリー・カンションと共に主演しており、パリの賑やかな街で行者と出会う自分自身を演じている。本作のプロデューサーによれば、ツァイ監督は「行者」10作目の『無居住(Abiding Nowhere)』と本作を姉妹作のように考えており、どちらかというとな本作の方が順番的には後に来るのだという。ポンピドゥー・センターの大きな空間の床に置かれた非常に大きな白いキャンパスのような布にアノンが木炭のようなもので何本もの線を描き、その脇を行者が非常にゆっくりと歩いていく。その動きの極度なスローさにも関わらず、両者の邂逅はとてもスリリングだ。



監督

ツァイ・ミンリャン

TSAI Ming-Liang

P22を参照

## メッセージ

行者を撮影することは、まるで屋外でスケッチを描くようなものです。

行者はパリにいて、アノンも同じくパリにいます。

彼らはただすれ違うだけで、他には何も起こりません。

ポンピドゥーセンターから、私の行者シリーズを展示したいとの申し出がありました。

そこで私は、この有名な現代美術館を撮影し、私の第9作目の行者シリーズに加えることにしました。

記憶として。

## Notes

The 9th film in the Walker series, produced in conjunction with Tsai Ming-Liang's extensive retrospective and exhibition "Une Quête" held at the Centre Pompidou in Paris from November 2022 to January 2023. Following his performance in "Days" (2020), Anong Hougheuangsy plays himself in this film where he encounters a pilgrim played by Lee Kang-shen in the bustling streets of Paris. According to the producer of this film, Tsai considers this and the 10th film of the Walker series "Abiding Nowhere" (2024) as sister films, and this film is intended to position later in the sequence. Anong Hougheuangsy draws many lines with a charcoal on a very large white canvas-like cloth placed on the floor of the large space in Centre Pompidou, and the pilgrim walks very slowly beside him. Despite the extreme slowness of their movements, the encounter between the two is very thrilling.

## Director's Biography

P22を参照

## Director's Statement

Filming the walker is like making a sketch outdoors.

The walker is in Paris and so is Anong.

They pass each other, nothing else happens.

The Centre Pompidou wanted to exhibit my Walker films.

So I decided to film this famous contemporary art museum and include it in my ninth Walker film.

For memory's sake.

監督 ● ツァイ・ミンリャン プロデューサー ● クロード・ワン ラインプロデューサー ● ツァイ・ジーチン 撮影監督 ● チャン・ジョンユアン 衣装デザイナー ● ワン・チャーファイ  
サウンドスーパーバイザー ● デニス・ツァオ 編集 ● チャン・ジョンユアン スチール写真 ● クロード・ワン 協力 ● ポンピドゥー・センター 制作およびワールドセールス ● ホームグリーン・フィルムズ  
スポンサー ● アンサン財団 プレゼンテーション ● 台湾公共放送サービス財団、ホームグリーン・フィルムズ  
出演 ● リー・カンション、アノン・ファンファンシー

Director ● Tsai Ming-Liang Producer ● Claude Wang Line Producer ● Tsai Chih-Chin Cinematography ● Chang Jhong-Yuan Costume Designer ● Wang Chia-Hui Sound Supervisor ●  
Dennis Tsao Film Editor ● Chang Jhong-Yuan Still Photographer ● Claude Wang With the Support of ● Centre Pompidou Sponsored by ● Pun-Sain Foundation Presented by ● Taiwan  
Public Television Service Foundation, Homegreen Films

Cast ● Lee Kang-Sheng, Anong Hougheuangsy  
Production & World Sales ● Homegreen Films

## 未完成の映画

## An Unfinished Film (一部未完成的の電影)

Singapore, Germany / 2024 / 107min



©Yingfilms Pte. Ltd.

## 作品解説

2019年、物語は10年間電源が入っていなかったコンピューターが起動される場面から始まる。そこには放置された未完の映画が入っており、その映画の監督は主演俳優を呼び出し、制作の再始動を提案する。様々な理由で躊躇していたものの、2020年1月の春節を目前に撮影準備が始まると、主演俳優はクルーに合流している。彼らはすぐに制作に取りかかるが、程なくしてコロナ禍対策のためのロックダウンのニュースが広まり始め、何人かのキャストは荷物をまとめて去っていく。そしてすぐにホテル全体が強制的に封鎖され、主演俳優とクルーは各部屋に閉じ込められてしまう……。本作は、未完に終わったクイア映画を完成させるために再集結した映画制作チームを描いたドキュメンタリー作品。映画制作の過程とパンデミックを生き抜く過程が、感染拡大で制作が中断し、全員がホテルで隔離されるという場面で結び付けられる。そこからフィクションと現実の境界が更に曖昧になっていくが、それでも溢れ出る真摯さや真実味がその作品の真骨頂だろう。カンヌ映画祭にて特別上映作品として上映された。



監督

ロウ・イェ

LOU Ye

1965年、上海生まれ。上海大学美術学院にてアニメーションを学び、その後北京電影学院にて映画制作を学ぶ。94年、初の長編劇映画「デッド・エンド / 最後の恋人」を監督するも、中国国内では2年間の上映禁止となる。2作目「ふたりの人魚」(00)はロッテルダム映画祭タイガー・アワード、また第1回東京フィルメックスで最優秀作品賞を受賞したが、同じく中国では上映禁止となる。現代中国映画における古典とみなされる同作は、2021年に自身の監督の元でオリジナルの16mm A-Bネガより4K復元された。続く「パープルバタフライ」(03)、「天安門、恋人たち」(06)、「スプリングフィーバー」(09)は全てカンヌ映画祭コンペティションに出品。ノリを舞台にした「ノリ、ただよう花」(11)はヴェネチア映画祭にて上映された。「二重生活」(12)は再びカンヌ映画祭のある視座部門に出品。「ブライインド・マッサージ」(14)はベルリン映画祭コンペティション部門で上映され銀熊賞(芸術貢献賞)を受賞。「シャドウプレイ」(18)は台北台湾金馬獎で、「サタデー・フィクション」(19)はヴェネチア映画祭にて上映された。

©Travis Wei

監督●ロウ・イェ 脚本●ロウ・イェ、インリー・マー プロデューサー●フィリップ・ボーバー、インリー・マー ラインプロデューサー●シュー・ルー 撮影監督●ゼン・ジエン 編集●ティエン・ジャミン  
 衣装デザイン●ヤン・ヤン キャスティングディレクター●チャン・ロン プロダクションデザイン●チョン・チェン ヘア&メイク●ジャ・イェン サウンドデザイナー●フー・カン リレコーディングミキサー●フー・カン、タン・アイロン VFXスーパーバイザー●ワン・レイ 製作会社●Yingfilms Pte. Ltd. エッセンシャル・フィルムズ、ZDF/ARTE、Cinema Inutile、Teamfun International GmbH、ゴールドラッシュ・ピクチャーズ 出演●チン・ハオ、マオ・シャオルイ、チー・シー、ホアン・シュエン、リャン・ミン、チャン・ソンウエン、ヨウヨウ  
 Director●Lou Ye Writers●Lou Ye, Yingli Ma Producers●Philippe Bober, Yingli Ma Line Producer●Xu Le Director of Photography●Zeng Jian Editor●Tian Jiaming Costume Design●Yang Yang Casting Director●Zhang Rong Production Design●Zhong Cheng Hair & Make-Up●Zhe Yan Sound Designer●Fu Kang Re-Recording Mixer●Fu Kang, Tan Ailong VFX Supervisor●Wang Lei Production●Yingfilms Pte. Ltd., Essential Films, ZDF/ARTE, Cinema Inutile, Teamfun International GmbH, Gold Rush Pictures  
 Cast●Qin Hao, Mao Xiaorui, Qi Xi, Huang Xuan, Liang Ming, Zhang Songwen, Youyou

## Notes

The film begins in 2019, when an inactive computer activates after 10 years. Inside, there is an unfinished film, and the director reaches out to the lead actor suggesting resuming the production. Although hesitant for a variety of reasons, the lead joins the crew as they prepare for the shoot before the Chinese New Year in January 2020. The news on COVID lockdown starts to spread shortly after production started, and a few cast members decide to leave. Soon the entire hotel is forced into lockdown, leaving the actor and crew trapped in their rooms... This docu-fiction illustrates a film crew that reunites to complete a queer film that remained unfinished. The process of making the film and surviving the pandemic intersects by a scene in which the production is interrupted by the spread of a virus, and everyone is quarantined in a hotel. From there, the boundary between fiction and reality blurs even more, yet the overflowing sincerity and truthfulness is the essence of this film. The film was shown as a special screening at the Cannes Film Festival.

## Director's Biography

Lou Ye was born in Shanghai in 1965. He studied animation at the Shanghai School of Fine Arts and then filmmaking at the Beijing Film Academy.

His debut film, "Weekend Lover" (1994), was banned for two years in China. He attracted international acclaim with his second feature "Suzhou River" (2000), which won the Tiger Award at the International Film Festival Rotterdam. It too was banned in China. The film, now considered a classic of modern Chinese cinema, was restored in 4K in 2021, under the supervision of Lou Ye himself, working from the original 16mm A-B negative.

His next three films: "Purple Butterfly" (2003), "Summer Palace" (2006), and "Spring Fever" (2009) were all selected in Competition at Cannes. His Paris-set film "Love and Bruises" (2011) premiered at the Venice International Film Festival. Ye returned to Cannes with "Mystery" (2012), which was selected for Un Certain Regard. "Blind Massage" (2014) premiered in Competition in Berlin and won the Silver Bear for Outstanding Artistic Contribution. "The Shadow Play" (2018) premiered at the Taipei Golden Horse Film Festival. "Saturday Fiction" (2019) was selected in Competition at Venice.

## スホ

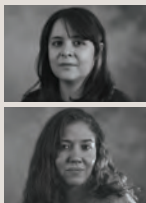
Sujo

Mexico, USA, France / 2024 / 125min



## 作品解説

麻薬取引の温床であるミチョアカン州の田舎で、シカリオ(殺し屋)の父のもとに生まれたスホは4歳で孤児になる。人里離れた丘の上に住む叔母ネメシアは、カルテルの掟によって命を狙われることになった幼いスホを匿い、彼女と姉妹的な関係にある友人ロザリアと、その2人の息子だけを伴って彼は育てられる。成長するにつれ、彼は親から引き継いだ血まみれの遺産について知るようになるが……。本作は暴力の連鎖の中で、一人の少年が忍耐強く自分の道を見つけようとするまでを描く成長物語。直接的な暴力は画面には殆ど映らないものの、私たち観客がそれが差し迫った避けられない前兆のように常に潜んでいるのを強く感じるだろう。リアリズムと抒情性を効果的に融合させながら、カルテルの暗躍を背景にした暴力と世代間のトラウマが巧みな脚本によって描かれている。アストリッド・ロンデロとフェルナンダ・ヴァラデスの映画作家デュオによる『息子の面影』(2020)に続く長編作品。前作に続き、本作もサンダンス映画祭で上映され、見事審査員特別賞を受賞した。



## 監督

アストリッド・ロンデロ&フェルナンダ・ヴァラデス  
Astrid RONDERO & Fernanda VALADEZ

アストリッド・ロンデロとフェルナンダ・バラデスは、メキシコの脚本家、監督、プロデューサー。彼女たちは15年以上にわたる共同制作を通じ、長編映画2本『The Darkest Days of Us』(17)と『息子の面影』(20)、短編映画3本『Of This World』(10)、『In Still Waters』(11)、『400 Bags』(14)を制作してきた。『息子の面影』は、サンダンス映画祭、サンセバスティアン国際映画祭、チュリッヒ映画祭、テサロニキ映画祭で受賞し、ゴッサム賞の最優秀国際映画賞を受賞した。『スホ』は、彼女たちにとって3作目の長編映画となる。

## メッセージ

私たちはアストリッド・ロンデロとフェルナンダ・バラデス、メキシコ出身の脚本家、監督、プロデューサーです。『スホ』は、私たちが監督として制作した2本目の長編映画であり、長編映画での3度目のコラボレーション作品です。私たちの映画の力強さは、少数派としての視点にあり、現代における物語を伝えるという強いコミットメントから生まれています。そして、現在のメキシコは、麻薬カルテルによる暴力で数千人の子供たちを孤児にしている時代です。彼らの中には、麻薬戦争の「付随的な被害者」としての犠牲者の子供たちもいれば、加害者として関与した人々の子供たちもいます。本作は、そうした「加害者側」の子供たちについて描いた物語です。私たちはこう問いかけました——「これらの子供たちは何を受け継ぎ、何を待ち受けているのか?」そして、その問いがこの物語の形を作る出発点となりました。「若者が運命に立ち向かうためには、何が必要なのだろうか?」

『スホ』は、名前と男性の2つの起源についての物語です。カルテルの殺し屋が、自分の息子に馬の名前を付けるという話を通じて、私たちは「超強」について語っています。隠された遺産や、無意識のうちに引き継がれる夢——それは、私たち自身ではなく、両親やその前の世代が抱いていた夢です。それは、人間の経験がすべてつながった多くのキャラクターたちを通して描かれた成長物語です。彼を愛し、教え、成長の過程で去っていった人々を描いたエピソード形式の映画です。これは、私たちが監督として最も興奮した点の一つでもあります。この映画の目標は、物語的にも形式的にも視覚的にも新たな探求を行うことでした。『スホ』はエピソードごとに視覚的な物語が変わり、まるで各サブキャラクターがスホの人生の一つの季節を象徴しているかのように描かれています。各エピソードには、それぞれ異なる雰囲気を持てることを目指し、テキスト、光、ムーブの探求を行う中で、各エピソードを異なるレンズで撮影するという手法を取り入れました。この映画には、複数の現実が交錯しています。それは派手なスタイリッシュなものではなく、より古代的で原始的なものを目指しており、最初の人たちから受け継がれてきた信仰やイメージに近いものです。それは、火のように、星空の夜のように、そして死のように、神秘的でありながら現実的なものとして描かれています。エピソードはまるでリアリズムの各面のように、一つ一つが複雑な全体像を形成するためのピースや層を加えています。最終的には、この映画全体が若者スホの肖像となり、彼が本来あるべき人への約束を描いています。

脚本・監督 ● アストリッド・ロンデロ、フェルナンダ・バラデス プロデューサー ● アストリッド・ロンデロ、フェルナンダ・バラデス、ティアナ・アルセガ 共同プロデューサー ● ジュエル・ロス、ヴァージニー・デウエサ、ジャン・バティスト・バイリー・メトド エグゼクティブプロデューサー ● ガス・コーウィン 撮影監督 ● シメナ・アマン 編集 ● アストリッド・ロンデロ、フェルナンダ・バラデス、スーザン・コーダ  
美術 ● ベレン・エストラーダ 音響デザイン ● オマル・アラレス、エスピノ オリジナルサウンドトラック ● アストリッド・ロンデロ  
出演 ● ファン・ヘスス・バレラ、ヤディラ・ペレス、エスタバ、サンドラ・ロレンザーノ、アレクシス・ハシエル・バレラ、ハイロ、エルナンデス・ラミレス、ケビン・ウリエル・アギラル、ルナ、カルラ・ガリード  
Script, Direction ● Astrid Rondero and Fernanda Valadez Producers ● Astrid Rondero, Fernanda Valadez, Diana Arcega Co-Producers ● Jewel Ross, Virginia Devesa, Jean-Baptiste Bailly-Maitre Executive Producer ● Gus Corwin Cinematographer ● Ximena Amann Editors ● Astrid Rondero, Fernanda Valadez, Susan Korda Production Design ● Belén Estrada  
Sound Design ● Omar Juárez Espino Original Soundtrack ● Astrid Rondero  
Cast ● Juan Jesús Varela, Yadiria Perez Esteban, Sandra Lorenzano, Jassiel Varela, Jairo Hernández Ramirez, Kevin Uriel Aguilar Luna, Karla Garrido

## Notes

In rural Michoacán, a hotspot for drug trafficking, Sujo was born to a hitman father but then orphaned at age four. His aunt, Nemesia, who lives in a remote hilltop home, takes him in after the rules of the cartel make him a target. He grows up among danger, with his friend Rosalia who has a sisterly bond with Nemesia, and Rosalia's two sons. As he matures, he begins to uncover the bloody legacy his father has bequeathed him. A coming-of-age story that portrays a boy's patient journey to find his own path amid cycles of violence. Although direct violence rarely appears on screen, the audience acutely senses its ever-present, looming threat. The film through its masterful script effectively blends realism and lyricism, depicting the violence and intergenerational trauma fueled by the cartel's activities. Like filmmaking duo Astrid Rondero and Fernanda Valadez's last feature "Identifying Features" (2020), this film was also screened at the Sundance Film Festival, where it won the Special Jury Award.

## Directors' Biography

Astrid Rondero and Fernanda Valadez are Mexican writer-directors and producers.

Through their collaboration for over 15 years, they have produced two feature lengths, "The Darkest Days of Us" (2017) and "Identifying Features" (2020) as well as three short films, "Of This World" (2010), "In Still Waters" (2011) and "400 Bags" (2014). "Identifying Features" received awards in Sundance, San Sebastian, Zurich, Thessaloniki and a Gotham Award for Best International Film. "Sujo" is their third feature film together.

## Directors' Statement

We are Astrid Rondero and Fernanda Valadez and we are writers, directors, and producers from Mexico. Sujo is our second feature as directors and our third creative collaboration on a feature film. We believe the strength of our films comes from us being part of a minority and that we are committed to telling the stories of our time. And what a time it is in Mexico. Thousands of kids have become orphans due to the violence of the drug cartels. Some of them are children of the victims, "the collateral damage" of the drug war. But others are the sons and daughters of the people who actively participated as perpetrators. This is a story about these "others." We wondered - what is the inheritance of these kids, what awaits them? and then came the question that shaped this story - what would it take for a young man to challenge what appears to be his destiny?

Sujo became the tale of two origins: that of a name and that of a man, in the tale of a cartel gunman naming his son after a horse, we aim to talk about transcendence, about hidden inheritances, about the dreams we fulfill without us knowing; dreams in the minds of our mothers and fathers, and their mothers and fathers before them, a flow of human experience that connects us all and is not oblivious to the hopes of previous generations.

Formally, Sujo is a coming-of-age story told through the many characters that meant something in Sujo's life: the people who loved him, taught him, and left behind as he grew up. It is an episodic film, and that's one of the aspects that excited us the most as directors: our goal in this film was to explore narratively, formally, and visually. Sujo has a visual narrative that changes as the episodes change as if every secondary character were a season in Sujo's life. We wanted each episode to have its atmosphere. And as we were exploring texture, light, and mood, we decided to shoot each episode with a different set of lenses that were key in that exploration.

The film has different levels of reality. Not in a flashy or stylized way, because we were looking for something more ancient and primal. Like beliefs and imagery that come from the first women and men, elements as magical as they are mysterious and real, like the fire, like a starry night, like death. So we want the episodes to be like the faces of a prism, each one adding a piece and a layer of a more complex object. In the end, the whole film is a portrait of this young man, Sujo. A portrait but also a promise of the man he deserves to be.

## 地獄に落ちた者たち

The Damned

Italy, Belgium, USA, Canada / 2024 / 89min



## 作品解説

1862年、北軍の志願兵部隊が北西部の辺境を偵察する任務を与えられる。彼らは、若者、年配者、神を恐れる者、神を恐れない者など、あらゆる階層の多様な集団だった。彼らの多くに共通しているのは、銃を撃った経験が殆どなく、ましてや人を殺したことなどないということだ。ただ、彼らが長い間本当に戦わなければならない敵は、屈辱であり、北西部の厳しい気候だった。彼らは神の存在に疑問を抱き、善と悪の概念について議論し、高まる幻滅感を理解しようとするが……。これまで20年以上に渡ってアメリカの見過されてきた辺境を描き続けてきたイタリア出身の映画監督ロベルト・ミネルヴィーニが、同国の南北戦争に目を向けた最新作。アメリカという国のアイデンティティを形作ってきた信仰、夢や希望、階級、そしてコミュニティといった要素が、これまでのミネルヴィーニの作品と同様に、この時代劇でも少し形を変えて探求されている。カンヌ映画祭のある視点部門で初上映され、同部門で監督賞を受賞した。



監督

## ロベルト・ミネルヴィーニ

Roberto MINERVINI

ロベルト・ミネルヴィーニは、イタリア出身でアメリカを拠点に活動する映画監督である。彼は、演出と観察の要素を組み合わせたナラティブ・ドキュメンタリーの分野で世界的に著名なオールドールの一人と広く認識されている。2004年にニューヨーク市のニュースクールでメディア学の修士号を取得した後、アジアの大学でドキュメンタリー映画制作を教えていた。2007年にテキサスに移住し、そこで『The Passage』、『Low Tide』、『Stop the Pounding Heart』の3本の長編映画を監督した。これらの映画は『テキサス三部作』として知られ、アメリカ南部の農村地域を描いている。その後、ルイジアナを舞台にした『The Other Side』や『What You Gonna Do When the World's on Fire?』といった2本の長編映画を監督し、アメリカ社会の政治的領域に焦点を当て、社会的不正に言及している。近年では、彼のプロダクション会社 Pulpa Film を通じて、他の先鋭的な映画製作者の作品もプロデュースしており、例えば、バヤル・カバディアの初のフィクション映画『All We Imagine as Light』やサンドロ・アロンソの『Eureka』などを手がけていた。ロベルトの最新作『地獄に落ちた者たち』は、彼にとって初のフィクション映画である。

## Notes

In 1862, a volunteer regiment from the Union is tasked with a reconnaissance mission in the northwest frontier of the United States. The diverse group includes young and old, the devout and the unbelieving. Most lack experience with firearms, forget about having ever killed anyone. However, the real enemies they face are endless monotony and the persistently harsh climate of the northwest. They grapple with doubts about God's existence, debate about good and evil, and try to understand their growing sense of disillusionment, and it almost feels as if battle will never come. Italian director Roberto Minervini, who has spent over twenty years depicting overlooked peripheries of America, chooses to focus on the Civil War in this film. Minervini's favorite themes of faith, dreams, hope, class, and community—elements that have shaped the identity of the United States—are explored in a slightly different manner in this period piece. The film premiered in the Un Certain Regard section of the Cannes Film Festival, where it won the Best Director award.

## Director's Biography

Roberto Minervini is an Italian-born film director, who lives and works in the U.S. He is widely considered to be one of the world's most prominent auteurs of narrative documentaries, which combine dramatized and observational elements. After completing a Master of Arts in Media Studies at the New School in New York City in 2004, Roberto taught Documentary Filmmaking at the university level in Asia. In 2007, he moved to Texas, where he directed three feature films, "The Passage", "Low Tide" and "Stop the Pounding Heart", a Texas Trilogy that focused on rural communities in the American South. He then went on to direct two feature films set in Louisiana, "The Other Side" and "What You Gonna Do When the World's on Fire?", shifting to the political realm of American society and touching on social injustice.

In more recent years, he has begun to produce the work of other visionary filmmakers through his production company Pulpa Film, including Payal Kapadia's first fiction film "All We Imagine as Light" and Lisandro Alonso's "Eureka". Roberto's latest film, "The Damned", is his first fiction film.

監督・脚本◎ロベルト・ミネルヴィーニ 撮影監督◎カルロス・アルフォンソ・コラル 編集◎マリー・エレーヌ・ドゥゾ サウンド◎ペルナット・フルティアナ・チコ サウンド編集◎イングリッド・シモン リレコーディング◎ミキサー◎トーマス・ゴウダー カラリスト◎ナタリア・ラゴセオ オリジナル音楽◎カルロス・アルフォンソ・コラル ライブプロデューサー◎フランチェスカ・ヴィットリア・ベネット、ヒリアナ・グロズダノヴァ 製作◎パオロ・ベンツィ(オクタ・フィルム)、デニス・ピン・リー & ロベルト・ミネルヴィーニ(プルパ・フィルム)、パオロ・デル・ブロンコ(ライ・シネマ) エグゼクティブ・プロデューサー◎テレス・マンニン、ジャン・アレクサンデル・ルシアーニ、アネット・ファスホル 共同製作◎アリス・ルメール & セバスチャン・アンドレス(ミシガン・フィルムズ)、オクタ・フィルム & プルパ・フィルム、ライ・シネマと共に共同製作◎ミシガン・フィルムズ、VOO OBE Be tv, シュルター・プロダクション 協力◎ストロゴニア、ムーンドロップフィルムズ 協力◎MIC - Direzione Generale Cinema e audiovisivo, フランス提携共同プロモーションセンター、フリウリヴェネツィア、ジュリア州視覚基金、Taxshelter.BeおよびING, ベルギー連邦政府の映画産出制度、リノ・ヒエレンツォ映画基金、カナダの連邦映画産出プログラム(Cavco)、オベック州の州営映画産出プログラム(Sodec) 協力◎Kabou Production(カナダ) 国際セール & フランス配給◎Les Films Du Louange  
Directed by◎Roberto Minervini Written by◎Roberto Minervini Director of Photography◎Carlos Alfonso Corral Editing◎Marie-Hélène Dozo Sound◎Bernat Fortiana Chico Sound Editing◎Ingrid Simon Re-Recording Mixer◎Thomas Gauder Colorist◎Natalia Raguoso Original Score◎Carlos Alfonso Corral Line Producers◎Francesca Vittoria Bennett & Biliana Grozdanova Produced by◎Paolo Benzi (Okta Film), Denise Ping Lee & Roberto Minervini (Pulpa Film), Paolo Del Brocco for Rai Cinema Executive Producers◎Teresa Mannino, Jean-Alexandre Luciani, Annette Fauboh Co-produced by◎Alice Lemaire & Sébastien Andres (Michigan Films) A production◎Okta Film and Pulpa Film with Rai Cinema In Co-Production with◎Michigan Films, VOO OBE Be tv, Shelter Prod In Association with◎Stregonia, Moonduckling Films with the Support of◎MIC - Direzione Generale Cinema e audiovisivo, Centre du cinéma et de l'audiovisuel de la Fédération Wallonie-Bruxelles, Fondo Audiovisivo Friuli Venezia-Giulia, Taxshelter.Be and ING, Tax shelter du gouvernement fédéral de Belgique, Film Commission Torino Piemonte, Federal tax credit program of Canada (Cavco), Provincial tax credit program of Québec (Sodec)  
Cast◎Jeremiah Knapp, René W. Solomon, Cuyler Ballenger, Noah Carlson, Judah Carlson, Tim Carlson, Bill Gehring  
In Collaboration with◎Kabou Production (Canada) International Sales & French Distribution◎Les Films Du Louange

## ザ・ゲスイドウズ

The GESUIDOUZ

Japan / 2024 / 93min / 配給：ライツキューブ



©2024 「ザ・ゲスイドウズ」製作委員会

## 作品解説

26歳になったばかりのハナコは鳴かず飛ばずのバンド「ザ・ゲスイドウズ」でボーカルを務める。一向に売れる気配のない彼らの体たらくを見かねたマネージャーは、厄介払いを兼ねて、移住支援制度を活用して彼らを田舎へ強制移住させようとする。27歳で早逝したロック・レジェンド達に自らを重ねつつ、ハナコは27歳で死ぬこととグラストンベリー・フェスティバルへの出演を自らに誓い、何もない田舎で新しい曲を書こうとするが……。パンク音楽とホラー映画にオマージュを捧げる本作は、アキ・カウリスマキ監督の「レニングラード・カウボーイズ」シリーズを彷彿とさせる、とぼけた物語展開が魅力のファンタスティック・ロック・ムービー。だが、この作品が私たち観客の心を最終的に震わせるのだとすれば、それはジャンルを問わず、あらゆるポップ・カルチャーの持つある種の本質がこの作品が正確に突いているからだろう。大衆文化における「しょうもないもの」に人生を変えられた経験を持つ全ての人に観てもらいたい作品だ。トロント国際映画祭のミッドナイト・マッドネス部門でワールドプレミア上映された。



監督

宇賀那健一

UGANA Kenichi

1984年生まれ、東京都出身。ファンタジーでパンクシッな作風がトロント国際映画祭、シッチェス映画祭、ブリュッセル国際ファンタスティック映画祭、ポルト国際映画祭、スラムダuns映画祭、ファンタスティック映画祭、モントリオール・ニューヴォー・シネマ映画祭、トリノ映画祭など数々の国際映画祭で評判を呼ぶ。代表作は「悪魔がはらわたでいけにえで私」【異物 - 完全版 -】「転がるビー玉」等。最新作として初の国際共同製作のオール NY ロケのロマンスコメディが撮影済み、今冬に台湾と日本で撮影を行う国際共同製作のホラー映画が控える。

## メッセージ

約15年前、初めての長編映画のお話をいただいたとき、その映画のために何年もの時間を費やしましたが（勿論僕の実力不足もあり）結局クランクインすることは出来ませんでした。僕は絶望しながらもけじめをつけるために、映画に全然関係ない企業に就職して営業の仕事をはじめました。それでもやっぱり映画が諦めきれなくて、毎日仕事を終えると定時に帰り撮れるかどうか分からない脚本と企画書を作り続ける日々を3年間過ごしていました。そんな時代があり、沢山の人の助けがあって今に至ります。今でも脚本を書くことは苦しいし、映画を撮ることは怖くて、一生慣れないんだろうなと思います。それと同時に世間からは下らないと馬鹿にされるようなジャンル映画に、僕は手を伸ばし続けるんだという覚悟を今は持っています。それはきっとこの数年間で共に戦った仲間を、そして僕の映画を愛してくれる人たちを見つけたからだと思っています。そんなことを思いながらこの映画を作りました。夢を持っている人、夢を叶えた人、夢を見失っている人、夢破れた人、全ての人にこの映画が優しく寄り添えますように。

## Notes

Hanako, just turned twenty-six, is the singer in a struggling band called The GesuidouZ. Frustrated with their lack of success, their manager decides to take advantage of a relocation support program to send them to the countryside and be rid of them. Aspiring to either die at twenty-seven like her rock heroes or perform at the Glastonbury Festival, Hanako forges ahead writing new songs in the unfamiliar environment. A fantastical rock movie that pays homage to punk music and horror films, featuring a whimsical narrative reminiscent of Aki Kaurismäki's Leningrad Cowboys series. Ultimately however, what makes the film resonate with us is its ability to transcend boundaries of genre and still capture the essence of numerous popular culture phenomena. This film is meant for anyone who has felt their lives changed by "trivial" popular culture. It had its world premiere in the Midnight Madness section of the Toronto International Film Festival.

## Director's Biography

Born in 1984 in Tokyo, Uguana Kenichi is known for his punkish fantasy style, which has garnered attention at numerous international film festivals, including the Toronto International Film Festival, Sitges Film Festival, Brussels International Fantastic Film Festival, Fantasporto, Slamdance Film Festival, Fantastic Fest, Montreal Festival du Nouveau Cinéma, and the Torino Film Festival. His notable films include, "Visitors - Complete Edition", "Extraneous Matter - Complete Edition", and "Rolling Marbles". The production of his latest project, an international co-production romantic comedy shot in New York, has already been completed, and he is set to begin filming an international co-production horror film in Taiwan and Japan.

## Director's Statement

About fifteen years ago I had the chance to make my first feature film, but my lack of skill led me to devote years to the project, and I never even started filming. Crushed, I took a sales job in a company far from the film world, to close that chapter of my life. Yet I was unable to give up on my dream, and each day I would go home promptly after work to continue working on scripts and film proposals that I doubted would ever be realized. Three years passed in that kind of routine. So it hasn't been a straight line, and I only made it here with the help of many people. Writing scripts is still a struggle and shooting them hasn't lost its intimidation. I doubt I'll ever shake any of that. At the same time, I now have the resolve to continue picking the kind of genre films that society often ridicules as trivial. I believe it's because I've discovered comrades to fight alongside, as well as people who cherish my films. I made this one with these thoughts in mind. My hope is that it can offer comfort to everyone—those with dreams in their hearts, those who've achieved their dreams, those who've lost sight of their dreams, and those whose dreams have been destroyed.

監督・脚本●宇賀那 健一 音楽●今村 裕央 楽曲プロデュース●KYONO エグゼクティブプロデューサー●鈴木 祐介 プロデューサー●角田 陸 ラインプロデューサー●工藤 渉 撮影●古屋 幸一 照明●加藤 大輝 録音●岩崎 政志 美術●松塚 隆史 スタイリスト●中村 もやし ヘアメイク●くつき 綾音 特殊メイク・特殊造型●千葉 実生 遠藤 斗貴彦 助監督●可児 正光 編集●小美野 昌史 VFX●松野 友喜人 聲音・効果●MA●鈴木 紀貴 カラーグレーディング●山田 祐太(レスパシジョン) 制作主任●白鳥 飛翔 スチール●柴崎 まどか キャスティング●渡辺 有美 配給●ライツキューブ 出演●夏子、今村裕央、喜矢武 豊、Rocko Zevenbergen、遠藤雄弥  
Director and Screenplay●Uguana Kenichi Music●Imamura Leo Music Producer●Kyono Executive Producer●Suzuki Yusuke Producer●Sumida Riku Line Producer●Kudo Wataru Cinematographer●Furuya Koichi Lighting Director●Kato Daiki Sound Operator●Iwasaki Kanishi Production Designer●Matsuzaka Takashi Wardrobe Master●Nakamura Moyashi Hair & Make-up Artist●Kutsumi Ayane Special Makeup●Special Effects●Chiba Mio, Endo Tokihiko Assistant Director●Kani Masamitsu Editor●Kominio Masashi VFX Supervisor●Matsuo Yuki Mixer●Suzuki Noritaka Color Grading●Yamada Yuta(L'espacVision) Production Manager●Shiratori Asuka Still Photographer●Shibasaki Madoka Casting Director●Watanabe Yumi Cast●Natsuko, Imamura Leo, Kyan Yutaka, Rocko Zevenbergen, Endo Yuya Distributed by●Rights Cube

## 第25回東京フィルメックス メイド・イン・ジャパン

## TOKYO FILMeX 2024 Made in Japan

会場：丸の内TOEI、ヒューマントラストシネマ有楽町

Venue: Marunouchi TOEI, HUMAN TRUST CINEMA Yurakucho

世界に向けて日本映画の多様な新作を4作品、ご紹介します。

Four latest and varied works of Japanese cinema will be introduced to the world.



## P29 ● ユリシーズ／宇和川輝

Ulysses Japan, Spain / Director: UWAGAWA Hikaru

## P30 ● 雪解けのあと(仮)／ルオ・イーシャン

After the Snowmelt Taiwan, Japan / Director: LO Yi-Shan

## P31 ● 椰子の高さ／ドゥ・ジエ

The Height of the Coconut Trees Japan / Director: Du Jie

## P32 ● DIAMONDS IN THE SAND／ジャヌス・ヴィクトリア

DIAMONDS IN THE SAND Japan, Malaysia, Philippines / Director: Janus VICTORIA

## ユリシイズ

Ulysses

Japan, Spain / 2024 / 73min



© ikoi films

## 作品解説

この映画は3部に分かれている。第1部では、マドリードで8歳の息子と2人きりで暮らすロシア人の母親に私たちは出会う。続く第2部では、一人の日本人男性がバスク人の若い女性と知り合う。2人は共に時間を過ごし、彼女は彼を友人たちに紹介する。そして第3部では、舞台は日本に移され、若い男性がお盆の時期に実家に帰省し、亡くなった祖父の霊を迎えるための準備を祖母と共に進めていく…。本作は、そのタイトルが示す通り、ジェームズ・ジョイスの『ユリシイズ』の形式的なアイデアを取り入れた作品で、更には『ユリシイズ』が大きく依拠しているホメロスの『オデュッセイア』を大まかに翻案したものだという。ただ、無論ここではギリシャの英雄の困難な帰郷の旅がそのまま語られているわけではない。むしろここでは「家」や「帰属」といった概念を巡って各々の物語が展開されており、世界の様々な場所での日常生活の断片が曖昧さを残したまま控えめな筆致で描かれている。本作はマルセイユ国際映画祭で初上映され、続いてサン・セバスチャン映画祭でも上映された。

監督

宇和川輝

UWAGAWA Hikaru



に映画制作をしている。

スペイン、サンセバスチャンの Elias Querejeta Zine Eskola で フィルムメイキング・コースの修士課程を修了。2023 年、サンセバスチャン国際映画祭映画作家助成レジデンシッププログラム Ikusmira Berriak に選出される。その後、初長編映画『ユリシイズ』がマルセイユ国際映画祭、サンセバスチャン国際映画祭に正式出品される。現在は東京を拠点

## メッセージ

この映画はホメロスの神話『オデュッセイア』の構造を用いて、自分が出会った人々、体感した時間、その場にいた空間を映画作品として記録していく、ある種の個人史を作るという試みでした。73 分という短い映画ですが、この中には自分が生きてきた数年間の時間が記録されています。自分の個人史はまだ続いています。一つのサイクルの締めくくりに、この映画が誕生したこと、そしてそれを観客の皆さんと共有できる機会をいただけているのが、とても幸せなことだと実感しています。それもまた、この映画に関わってくれた大切な仲間たちのおかげです。

## Notes

This film is divided into three sections. The first takes as its subject a Russian mother and her eight-year-old child living alone in Madrid. In the second, a Japanese man meets a young Basque woman. They spend time together and she introduces him to her friends. In the third part, the setting shifts to Japan where a young man returns to his childhood home during the Obon season to prepare for welcoming the spirit of his deceased grandfather alongside his grandmother. As the title suggests, the film incorporates the formal ideas of James Joyce's *Ulysses*, and is broadly adapted from Homer's *Odyssey*, which *Ulysses* was heavily based on. It goes without saying that it is not simply a retelling of the challenging homecoming journey of the Greek hero, but rather the stories unfold around concepts of "home" and "belonging," presenting fragments of everyday life from various parts of the world in a subtle style that leaves room for ambiguity. The film premiered at the Marseille International Film Festival and was subsequently screened at the San Sebastián Film Festival.

## Director's Biography

Uwagawa Hikaru completed his Master's degree in Filmmaking at Elias Querejeta Zine Eskola in San Sebastián, Spain. In 2023, he was selected for the Ikusmira Berriak residency program for filmmakers at the San Sebastián International Film Festival. His debut feature film "Ulysses" was officially screened at both the Marseille International Film Festival (FIDMarseille) and the San Sebastián International Film Festival. He is currently based in Tokyo, where he continues his filmmaking career.

## Director's Statement

Drawing on the structure of Homer's *Odyssey*, this is an attempt to create a personal history by documenting in a work of film the people I've met, the time I've lived, and the spaces I've been in. Although it's only 73 minutes long, it encapsulates several years of my life. My personal history is still unfolding, but at this juncture, I feel incredibly lucky that this film was born and that I have the opportunity to share it with you. I owe it all to the support of the invaluable companions who helped bring it to life.

監督 ● 宇和川輝 プロデューサー ● 宇和川輝、関野佳介 撮影 ● 宇和川輝、Avery Duncan、関野佳介 録音 ● Nicolás Auger、Joan Pàmies Lluís、吉川諒 セノグラファー ● 板倉勇人 スチール ● キー  
 整音 ● 黄永昌 カラーグレーディング ● 永井愛華 日本語字幕 ● 新谷和輝 英語字幕 ● D B Andreous 制作プロダクション ● ikoi films アンソニエイトプロダクション ● Elias Querejeta Zine Eskola  
 企画助成 ● Ikusmira Berriak © ikoi films  
 Director ● Uwagawa Hikaru Producer ● Uwagawa Hikaru, Sekino Keisuke Cinematographer ● Uwagawa Hikaru, Avery Duncan, Sekino Keisuke Recording ● Nicolás Auger, Joan Pàmies Lluís,  
 Yoshikawa Ryo Scenographer ● Itakura Yuto Still Photographer ● Kii Sound Mixer ● Hwang Young Chang Color Grading ● Nagai Manaka Japanese subtitle ● Niiya Kazuki English subtitle ●  
 DBAndreous Production Company ● Ikoi films Associate Production ● Elias Querejeta Zine Eskola Planning Support ● Ikusmira Berriak  
 Cast ● Alevtina Tikhonova, Dimitri Tikhonov, Enaitz Zulaika, Ishii Izumi, Hara Kazuko, Uwagawa Hikaru

## 雪解けのあと(仮)

## After the Snowmelt(雪水消融的季節)

Italy, Belgium, USA, Canada / 2024 / 110min / 配給：ドキュメンタリー・ドリームセンター



## 作品解説

本作は、ルオ・イーシャン監督の親友チュンが、2017年に恋人のユエとネパールでのトレッキング中に亡くなったことに端を発している。チュンとユエは降雪のために47日間山中の洞窟に閉じ込められたが、チュンは救出の3日前に亡くなり、ユエだけが生き残る。台湾に戻ったユエはチュンと交わした約束を、元々この旅行に加わる予定だったイーシャンに伝える。生き残った者は自分の体験を語らなければならないという約束だ。その言葉に応えるため、イーシャンはカメラを手に取りネパールへ向かい、チュンの足跡を辿る旅に出る……。この作品は一人の若者が初めて経験する深い喪失と格闘し、その意味を探る過程を辿るドキュメンタリーであり、同時に成長物語でもある。あくまでも主観に徹した一人称の作品だが、映像のフレーミングやその選択、そして編集のリズムにも非凡なセンスを感じさせる。親友が亡くなる前に残した手紙の使用も効果的で、死者と生存者の間の複雑な関係を親密に浮かび上がらせていく。山形県の豪雪地で作品の構成・編集を再考するレジデンシーに参加した「メイド・イン・ジャパン」である。



監督

ルオ・イーシャン

LO Yi-Shan

台湾生まれ。現代文学、文化人類学、社会科学に影響を受け、大学時代からフリーランスのライター、映画評論家として活動。10代の頃から台湾の亜熱帯山林にみられる人間と他の生き物の共存関係にひきつけられ、野性の美しさと複雑さを描くことは映画制作の動機となってきた。「雪解けのあと(仮)」は初の長編ドキュメンタリー作品である。

## メッセージ

この映画は、親友のチュンからの手紙を読んだときに始まった。「イーシャン、ただ愛することだよ」と死を前にした彼は私に書き残した。チュンと私が出会ったカトリック系の女子高では、彼の性自認は批判の対象とされた。彼は私の前で涙を流し、私は彼の強さに感動した。共に山歩きに逃げ場を見つけ、いつか一緒に海外旅行しようという約束をした。遭難事故のあと、反故になった約束を果たしたくて、私はこの映画を作ることに邁進した。「雪解けのあと」では、心の外傷から和解への道筋を描くことで、人生とは生き残ること以上に、真に生きること、そして愛することなのだという気づきを示したかった。

## Notes

The film was inspired by director Lo Yi-Shan's best friend, Chun, who died while trekking in Nepal with his boyfriend Yueh in 2017. A snowfall trapped the couple in a cave for 47 days, and Chun died three days before Yueh's rescue. Upon returning to Taiwan, Yueh reveals the promise she made with Chun to Yi-Shan, who had originally planned to join them on this trip - the survivor must tell their story. To fulfill this promise, Yi-Shan picks up her camera and heads to Nepal, embarking on a journey in Chun's footsteps ... The film is both a documentary and a story of growth, tracing one young person's sorrow and search for meaning in the profound loss she experiences for the first time. It is a first-person work that is entirely subjective, but the framing and the editing rhythm simultaneously shows an extraordinary sense of style. The effective use of letters left by Chun prior to his death intimately unfolds the complex relationship between the dead and the survivors. This film was "Made in Japan" created during a residency in snowy Yamagata Prefecture to reconsider the composition and editing of the work.

## Director's Biography

Born in Taiwan, Yi-Shan Lo has been influenced by literature, cultural anthropology, and social sciences and is an accomplished freelance writer and film critic since their university years. They have been fascinated by the intertwined relationships connecting humans and non-humans in Taiwanese subtropical mountains. Conveying the beauty and complexity of wilderness has been their motivation to make films. "After the Snowmelt" is their debut documentary feature.

## Director's Statement

The film was born as I received a letter from my best friend, Chun. He wrote before he died: "Yi-Shan, the only thing you have to do is to love." Chun and I met at a girl's high school, where his transgender identity drew criticism. He'd weep in front of me, while I was moved by his resilience. Together, we escaped to the mountains and promised to travel abroad someday. After the accident, the overwhelming desire to fulfill the broken promise drove me to make this film. Through "After the Snowmelt", I want to create a journey from trauma to reconciliation, offering the realization that life is about more than surviving - it's about truly living and loving.

監督◎ルオ・イーシャン プロデューサー◎羅玟珊、陳詠雙、卓婁嵐 共同プロデューサー◎藤岡朝子、陳溫溫 撮影◎羅玟珊、蔡維隆 サウンド・デザイン◎ヤニック・ダウビー 配給◎ドキュメンタリー・ドリームセンター 原題◎雪水消融的季節  
 Director◎Lo Yi-Shan Producers◎Yung-Shuang Chen, Tze-Lan Cho, Yi-Shan Lo Co-Producers◎Asako Fujioka, Angel Wen Chen Editor◎Jessica Wan-Yu Lin Cinematography◎Yi-Shan Lo, Wei-Long Tsai Sound Design◎Yannick Dauby  
 Distribution◎Documentary Dream Center





## DIAMONDS IN THE SAND

Japan, Malaysia, Philippines / 2024 / 102min



## 作品解説

離婚して東京で一人暮らしをしているサラリーマンの陽志。彼のことを心配してくれる母親もついに世界へしてしまう。意味のある人間関係は殆ど残っていないため、生きる意味がないという現実には彼は直面する。娘を養うために日本で介護士として働くミネルバとの偶然的な出会いは、陽志に自分の状況を新たな視点で見ると促す。そんな中、名前も知らない隣人の老人の腐乱死体が発見され、その死は孤独死と判定される。同じ運命を辿りたくない陽志は、従来の用心深さを捨て、ミネルバを追ってフィリピンの首都マニラに向かうが……。孤独死という日本の現象を探究することから始まった本作は、2013年のタレント・トーキョー(当時はタレント・キャンパス・トーキョー)の受賞企画であり、監督兼脚本家のジャヌス・ヴィクトリアにとっては初の長編作品となる。どんな作品でも必ず光る演技を見せるリリー・フランキーがここでも抜群の存在感を發揮しており、ベテラン撮影監督の芦澤明子による、日本とフィリピンの空気感をそれぞれに映し出す映像も魅力的である。



監督

ジャヌス・ヴィクトリア

Janus VICTORIA

フィリピンのマニラを拠点とする脚本家・監督。フィリピンの放送局やデジタルプラットフォーム向けに時事問題のドキュメンタリーを制作しながら、人々や場所の関係を探索している。これまでに『マニラの神話』を含む6本の短編映画や、東京のアパートでの孤独死に関するドキュメンタリー短編『沈黙との出会い』を制作。『DIAMONDS IN THE SAND』は長編映画としての監督デビュー作となる。

## メッセージ

人生の重さはどのように測ることができるのでしょうか？もし私たちが孤独死、つまり、数週間や数ヶ月後によく発見されるような死を迎えた場合、それは私たちに何をして語っているのでしょうか？この映画は、私が自分の人生と故郷であるマニラを見つめるために、ある意味ではその対極にある場所を通して向き合おうとしたものです。最終的に、孤独死とはただ一人で死ぬことではなく、忘れ去られることだと気づきました。そして、どれだけ良い人生を送ったかという真の尺度は、私たちが去ったときにどれだけ多くの人に惜しまれるかにあるのだと悟ったのです。

## Notes

Yoji is a divorced Japanese salaryman living alone in Tokyo. After the loss of his caring mother, he faces an empty life without any meaningful relationship. A chance encounter with Minerva, a Filipina who works as a caregiver in Japan to support her daughter, prompts Yoji to look at his situation in a new light. Meanwhile, he discovers the decomposing body of an elderly neighbor, whose name he doesn't know. His death is ruled to be a lonely death. Not wanting to suffer the same fate, Yoji throws caution and follows Minerva to Manila, the capital of the Philippines. The film, which began as an exploration of the Japanese phenomenon of lonely deaths, is the winner of 2013 Talents Tokyo (then Talent Campus Tokyo) and writer-director Janus Victoria's first feature film. Lily Franky, who never misses a glowing performance in any film, has an outstanding presence here, and the images by veteran cinematographer Ashizawa Akiko gorgeously project the ambience of Japan and the Philippines.

## Director's Biography

Janus Victoria is a writer and director born and based in Manila. A long-time media practitioner, she produces current affairs documentaries for Philippine broadcasting and digital platforms. Her work explores the relationships between people and places. She has completed six short features, including "Myth of Manila," and a documentary, "Encounters with Silence", about the lonely deaths in apartments in Tokyo. "Diamonds in the Sand" is her first feature film.

## Director's Statement

How do we measure the weight of our lives? If we die a kodokushi, or the lonely death, where our absence from this world is only discovered after weeks or months, what does it say about us? This film is my way of navigating life and my hometown of Manila by looking at another place that is in many ways its complete opposite. In the end, I've come to realize for myself that kodokushi is not about dying alone but about being forgotten. And ultimately, the true measure of how well we lived is how much we are missed when we are gone.

脚本・監督 ● ジャヌス・ヴィクトリア 製作 ● ローナ・ティエ、ダン・ヴィレガス、菅我満寿美 エグゼクティブ・プロデューサー ● マリア・ソフィア・アイト・マルド、ジョセット・アイト、ジム・G・バルタザール  
 エグゼクティブ・プロデューサー ● ダン・ヴィレガス、アントネット・ハダオネ、ローナ・ティエ、ホー・ユハン、菅我満寿美 エグゼクティブ・プロデューサー ● マネット・A・テイリット、市山 尚三、ジャヌス・ヴィクトリア  
 共同プロデューサー ● 嶋田 家、西前俊典、小林智浩 スーパーバイディング・プロデューサー ● キッツィー・カタラン ラインプロデューサー ● プロジェクト8、呉村 芳建、大西 望 撮影監督 ● 芦澤明子  
 照明監督 ● 榎木茂則 プロダクションデザイナー ● イー・ロ・ヴィ・フランシスコ セット・デザイナー ● 片平圭衣子 編集 ● スー・ムン・ワイ サウンドデザイナー ● コリネ・ド・サンホセ 作曲家 ● ジャイ・サルダジェノ  
 出演 ● リリー・フランキー、吉行和子、マリア・イザベル・ロペス、ソリマン・クルス、チャーリー・ディゾン  
 Written And Directed by ● Janus Victoria Produced by ● Loma Tee, Dan Villegas, Soga Masumi Executive Producers ● Maria Sophia Atayde-Marudo, Josselte Atayde, Jim G. Baltazar Executive Producers ●  
 Dan Villegas, Antoinette Jadaone, Lorna Tee, Ho Yuhang, Soga Masumi Executive Producers ● Manet A. Dayrit, Ichiyama Shozo, Janus Victoria Co-Producer ● Shimada Tsuyoshi, Nishimae Toshinori, Kobayashi  
 Tomohiro Supervising Producer ● Catsi Catalan Line Producers ● Project 8 Projects, Kuremura Yoshi, Onishi Nozomu Director of Photography ● Ashizawa Akiko Production Designer ● Eero Yves S.  
 Francisco Set Designer ● Katarika Keiko Lighting Director ● Miki Shigenori Editor ● Soo Mun Thyé Sound Designer ● Corinne De San Jose Music Composer ● Jai Saldajeno  
 Cast ● Lily Franky, Maria Isabel Lopez, Soliman Cruz, Yoshiyuki Kazuko and Charlie Dizon

## 第25回東京フィルメックス 関連事業 Talents Tokyo 2024

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、及びタレンツ・トーキョー実行委員会の主催、並びにベルリナーレ・タレンツ(ベルリン国際映画祭)との提携、ゲーテ・インスティトゥート東京の協力のもと、映像人材育成プロジェクト「Talents Tokyo 2024」を11月25日-12月1日に実施します。

本プロジェクトは、映画分野における東京からの文化の創造・発信を強化するため、「次世代の巨匠」になる可能性を秘めた「才能(= talent, タレント)」を育成することを目的に、映画作家やプロデューサーを目指すアジアの若者を東京に集めて実施します。現在世界で活躍するプロフェッショナルをエキスパート(Expert)として迎え、レクチャーや企画合評会を通じて第一線の人材の視線に晒されることで、強烈なインスパイアを受ける体験を促します。また、タレント同士やエキスパートとタレント、さらには映画祭「東京フィルメックス」に集まる映画作家たちとの交流により、国際的なネットワークを新たに築くことも目指します。

From November 25 - December 1, 2024, the talent development and networking platform "Talents Tokyo 2024" will be conducted under the supervision of the Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo, and Talents Tokyo Organizing Committee in cooperation with Berlinale Talents, and in collaboration with Goethe-Institut Tokyo.

Talents Tokyo 2024 brings together 17 upcoming promising filmmakers and producers. Film experts at the forefront of cinema including Anocha SUWICHAKORN PONG (Director), Alemberg ANG (Producer), Isabelle GLACHANT (World Sales), and Nikola JOETZE (Project Manager of Berlinale Talents) will share their experiences through lectures.

Under this year's theme "To Love is To See", each participant will have the opportunity to present their own project. Four experts will analyze each project from various aspects, such as directing, producing, and investment viability.

This initiative aims to inspire promising filmmakers to develop their voices and become the "Next Masters".

### メイン講師 Main Experts

- アノーチャ・スウィチャーゴーンポン (監督) Anocha SUWICHAKORN PONG (Director)
- アレンバーグ・アン (プロデューサー) Alemberg ANG (Producer)
- イザベル・グラシャン (ワールド・セールス) Isabelle GLACHANT (World Sales)
- ニコラ・ヨーツエ (ベルリナーレ・タレンツ、プログラム・マネージャー) Nikola JOETZE (Project Manager of Berlinale Talents)

### 参加者 Talents

監督 Directors : Danech SAN (CAMBODIA) / YAN Haohao (CHINA) / YANG Yanxi (CHINA) / François CHANG (FRANCE, CHINA) / CHAN Tze-woon (HONG KONG) / Adriano Rudiman (INDONESIA) / HATAKEYAMA Kana (JAPAN) / MURAKAMI Riko (JAPAN) / JANG Jeehye Kay (KOREA) / LAU Kok Rui (MALAYSIA) / Lkhagvadulam PUREV-OCHIR (MONGOLIA) / Alvin LEE (SINGAPORE) / Mai Huyền Chi (VIETNAM)

プロデューサー Producers : Annie SONG (CHINA) / B.M. Anggana (INDONESIA) / KOIDE Daiju (JAPAN) / SHEN Ivy Yu-Hua (TAIWAN)

### タレンツ・トーキョー開催概要

- 名称: Talents Tokyo 2024 / タレンツ・トーキョー 2024 ● 期日: 令和6(2024)年11月25日(月)~12月1日(日)
- 場所: 有楽町朝日スクエアほか
- ホームページ: <https://talents-tokyo.jp/>
- 主催: 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、タレンツ・トーキョー実行委員会
- 提携: ベルリン国際映画祭(ベルリナーレ・タレンツ)
- 協力: ゲーテ・インスティトゥート

### Outline of Talents Tokyo 2024

Title: Talents Tokyo 2024 Dates: From Monday, November 25, to Sunday, December 1, 2024 Venue: Yurakucho Asahi Square, etc. Organizers: Tokyo Metropolitan Government / Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) / Talents Tokyo Organizing Committee / In Cooperation with: Berlinale Talents / In Collaboration with: Goethe-Institut Tokyo Official home page: <https://talents-tokyo.jp/>

### 「ネクスト・マスターズ・サポート・プログラム」受賞者及び選抜企画

2014年に開始した、修了生対象のプログラム「ネクスト・マスターズ・サポート・プログラム」では、タレンツ・トーキョー修了生を対象に、a) 企画開発ファンド: 製作前の企画を実現するための支援(上限100万円)、b) プロモーションファンド: 完成間近の作品を後押しするための支援(上限50万円)、c) フェロシップ・プログラム: 国際マーケット参加の渡航費(上限20万円)の3種類の資金援助を実施します。

In 2014, Talents Tokyo launched a new initiative to support the alumni, providing grants from (a) Project Development Fund and (b) International Promotion Fund. Talents Tokyo awards a Project Development Fund grant of up to 1 million JPY or an International Promotion Fund grant of up to 500,000 JPY to the selected projects.

#### a) 企画開発ファンド Project Development Fund:

LI Yang (TT2016, 中国) <GHOST OF UENO> / OATES Yinchao (TT2023, 中国) <Water Has Another Dream> / Yuan YUAN (TT2023, 中国) <Heading South> / Zi GAO (TT2018, 中国) <Raja's Early Summer> / Yulia Evina Bhara (TT2020, インドネシア) <WATCH IT BURN> / NAKANISHI Mai (TT2023, 日本) <Child, Uninvited> / Sein Lyan Tun (TT2016, ミャンマー) <The Bamboo Family> / Angelina Marilyn BOK (TT2023, シンガポール) <Free Admission> / Siyou TAN (TT2022, シンガポール) <amoeba> / Nelson YEO (TT2014, シンガポール) <The Drought> / KUO Ming-Jung (TT2022, 台湾) <A Woman Builds> / NGUYEN Hoang Diep (TT2023, ベトナム) <The saddest stories on Earth>

#### b) インターナショナル・プロモーション・ファンド International Promotion Fund :

Alemberg ANG (TT2014, フィリピン) <Some Nights I Feel Like Walking> / Janus VICTORIA (TT2013, フィリピン) <Diamonds in the Sand> / CHIANG Wei Liang (TT2019, シンガポール) <Mongrel>

## Talents Tokyo 2024 Open Campus

日時: 令和6(2024)年11月28日(木) 会場: 有楽町朝日ホール スクエアB

ホームページ: <http://talents-tokyo.jp/> ※事前申込制、公式サイトより、11月27日までに登録してください。

### 【スケジュール】

**13:00-14:00 Open Campus: 内容[15 Years of Talents! Making Dream Projects Come True]**

登壇: アノーチャ・スウィチャーゴーンポン (Anocha SUWICHAKORN PONG) 氏 (タイ・映画監督)

ジャヌス・ヴィクトリア (Janus VICTORIA) 氏 (フィリピン・映画監督)

チャン・ウェイリャン (CHIANG Wei Liang) 氏 (シンガポール・映画監督)

司会: 市山尚三

**14:30-17:40 Open Presentation 内容: Talents Tokyo 2024 参加者 17名による企画発表**

**Talents Tokyo 2024 Open Campus Date: November 28th, 2024**

**Talk Event: "15 Years of Talents! Making Dream Projects Come True"**

by Anocha SUWICHAKORN PONG (Thailand, Film Director),

Janus VICTORIA (Philippines, Film Director) and CHIANG Wei Liang (Singapore, Film Director).

Moderated by ICHIYAMA Shozo

Time: Thursday, November 28th 13:00 - 14:00 / Venue: Yurakucho Asahi Hall Square B

This session is open to the public

**Open Presentation to Film Professionals**

**Content: 17 participating talents present their projects to industry professionals and press members.**

Time: Thursday, November 28th 14:30 - 17:40 / Venue: Yurakucho Asahi Hall Square B

This session is open to press and film professionals

**Talents Tokyo HP (<https://talents-tokyo.jp>)**

Registration deadline: Wednesday, November 27th (registration will be open on Nov. 20)

## □ サイドイベント Side Events □

### ■ トークイベント: 国際共同制作の今

今年の東京フィルメックスは25年間の歴史で初めてコンペティション部門とメイド・イン・ジャパン部門の全上映作を複数の国・地域が参加する国際共同製作作品が占めることになりました。トークショーでは上映作品の監督が、自身の映画製作のリアルな経験を元に、国境や文化を超えた共同製作の意義や課題を率直に語り合います。

ヨーロッパでは欧州統合を背景に1990年代から多国籍の映画製作が定着していますが、アジアでも2000年代以降に勢いが加速し、現在は様々な形でグローバルな映画作りが実現しています。自国だけでは製作費を集めるのが難しい野心的な企画でも複数国から資金協力を得ることでリスクが分散され、より広い市場につながる事ができるのが国際共同製作のメリット。多様な視点が加わることでクリエイティブ面での相乗効果も期待されます。日本でも「一見すると邦画だが実は国際共同製作」という新作映画が徐々に増えています。今年8月には日伊映画共同製作協定が発効するなど、海外との協業の土台作りも進んでいます。

トークショーでは、アジアの若手監督たちが「なぜ国際共同製作を選んだのか」「文化的背景の異なるチームが映画作りにもどのような影響を与えたか」など、ボーダレスな映画製作の実情を具体的に掘り下げます。アジアと日本の映画の未来を展望する場として、ぜひご注目下さい。

日時: 11月26日(火) / 19:30-20:40(開場 19:20) 会場: 有楽町朝日スクエアB 参加方法: 無料 / HPより事前申込下さい。

#### 【登壇予定ゲスト】

スキャンダル・コプティ (Scandar COPTI) / コンペティション部門『ハッピーホリデーズ』監督

チウ・ヤン (QIU Yang) / コンペティション部門『空室の女』監督

ジャヌス・ヴィクトリア (Janus VICTORIA) / Made in Japan部門『DIAMONDS IN THE SAND』監督

コウヤ・カムラ (Koya KAMURA) / コンペティション部門『ソクチョの冬』監督

ファシリテーター: 深田晃司 (映画監督)

### ■ 特別対談: ロウ・イエ & 山中瑠子

[第25回東京フィルメックス]で審査員を務める中国のロウ・イエ監督と、カンヌ国際映画国際批評家連盟賞『ナミビアの砂漠』が大ヒット中の山中瑠子監督の特別トークイベントを[11月28日 19時30分から]開催します。手持ちカメラによる独特の映像美で激動する中国の人間ドラマを鋭く描いてきたロウ監督は、山中監督が最も敬愛するフィルムメーカーのひとり。独特の映像美学や鋭い社会的視点で中国映画の新たな地平を切り拓いてきたロウ監督と、斬新な人物描写で日本映画界に新風を吹き込んだ山中監督が初めて共に語り合う貴重な機会となります。それぞれの映画術や創作の深層に迫り、映画のこれからを探る2人の対話は必見! どうぞご参加下さい。

日時: 11月28日(木) / 19:30-20:40(開場 19:20) 会場: 有楽町朝日スクエアB 参加方法: 一般1,000円 / LivePocketより購入

#### 【登壇予定ゲスト】

ロウ・イエ (LOU Ye / 中国 / 映画監督)

プロフィールは審査員ページ(P4)をご確認ください

山中瑠子 (YAMANAKA Yoko / 日本 / 映画監督)

1997年生まれ、長野県出身。独学で制作した初監督作品『あみこ』がPFF アワード 2017で観客賞を受賞。翌年、20歳で第68回ベルリン国際映画祭に史上最年少で招待されたほか、香港、NYをはじめ10カ国以上で上映され、話題を呼んだ。本格的長編第一作となる『ナミビアの砂漠』(24)は第77回カンヌ国際映画祭 監督週間に出品され、女性監督として史上最年少となる国際映画批評家連盟賞を受賞した。監督作に山戸結希プロデュースによるオムニバス映画『21世紀の女の子』(18)の『回転てん子とどりむ母ちゃん』、オリジナル脚本・監督を務めたテレビドラマ『おやすみ、また向こう岸で』(19)、ndjcプログラムの『魚座どうし』(20)など。

## □ サイドイベント Side Events □

### ■ マスタークラス：ウェイン・ワン

昨年、第24回東京フィルメックスでクロージング作品としても「命は安く、トイレットペーパーは高い」を上映し、Q&Aにも登壇いただいたウェイン・ワン監督によるマスタークラスを開催。貴重なこの機会にぜひ、映画制作の極意をお聞きください。また、フィルメックスでは育成事業：タレント・トーキー内でマスタークラスは非公開形式で実施されていますが、今回はオープンな形式での実施。タレント・トーキー参加者にも大好評のウェイン・ワンの講義をお楽しみに。

日時：12月1日(日) / 16:15-17:45(開場16:00) 会場：有楽町朝日スクエアB 参加方法：一般1,000円 / LivePocketより購入

#### 【登壇予定ゲスト】

ウェイン・ワン (Wayne WANG / アメリカ / 映画監督)

父親が大好きだった映画スター：ジョン・ウェインにちなんで名付けられ、香港で生まれ育つ。17歳の時、両親が医学校への進学を期待してアメリカへの移住を手配したが、芸術に傾倒し、オークランドのカリフォルニア美術大学で映画とテレビについて学ぶ。1980年代初頭に「Chang is Missing」(82)、「Dim Sum: A Little Bit of Heat」(85)、「夜明けのレポート」(89)といった監督作で革新的な監督としての評価を確立。メジャー系で制作した「ジョイ・ラック・クラブ」(93)や「メイド・イン・マンハッタン」(02)、インディペンデント系でも「スモーク」(95)や「地上より何処かで」(99)といった作品で知られている。2007年には「千年の祈り」がサンセバスチャン映画祭最高賞のゴールデンシェル賞を受賞、2016年にはサンディエゴ・アジア映画祭で生涯功労賞を受賞している。現在、サンフランシスコとニューヨークを拠点としている。

モデレーター：市山尚三(東京国際映画祭プログラミング・ディレクター)

### NPO法人独立映画鍋 × 第25回東京フィルメックス共催

#### ■ 「世界に挑め！企画プレゼンカの磨き方」

作りたい映画の企画を思いついたとき、それをどのようにまとめ、プレゼンすればよいのでしょうか。海外を視野にいれて企画を売り込む国際映画祭の「企画マーケット」や「ピッチング」という言葉はなんとなく知っているけど、実際それらはどこで何のために行われていて、そこにたどり着くにはどのような手順を踏めばよいのかはあまり知られていないかもしれません。今回の講座では、タレントトーキーなどの育成プログラムへの参加方法や申請書の書き方など初歩的なところから、効果的に自分の映画をプレゼンするための秘訣まで探っていきます。海外のマーケットやピッチングの経験者である映画作家・プロデューサーや育成プログラムの審査員とともに、海外を見据えた企画プレゼンカを磨いていきましょう。

日時：12月1日(日) / 13:00-15:00(開場12:30) 会場：有楽町朝日スクエアB

参加方法：一般1,000円 / 映画鍋会員 500円 (事前予約不要、当日直接会場までお越しください)

#### 【登壇予定ゲスト】

池田 高明 (株式会社NHKエンタープライズ シニア・マネージャー)

映画チャンネル編成プロデューサー等を経て、2007年株式会社国際メディア・コーポレーション(現NHKエンタープライズ)入社。以来、映画やTV番組の買付け、ライセンス業務に携わる。現在、経営企画室法務・審査部勤務。人材育成分野では、映画上映専門家養成講座、映画美学映像翻訳講座特別講義、大学の映像ビジネス論講座等の講師を歴任。2011年よりタレントトーキー選考委員。ロンドン・シティ大学院文化政策・マネジメント学部修士課程卒業(セゾン文化財団助成事業)。文化経済学会会員。

太田信吾 (映画監督・俳優)

処女作の映画「卒業」がイメージフォーラムフェスティバル2010優秀賞・観客賞受賞。初の長編映画「わたしたちに許された特別な時間の終わり」が山形国際ドキュメンタリー映画祭2013で公開後、世界12カ国で公開。近作に映画「解放区」など。映画「現代版 城崎にて」でゆうばり国際ファンタスティック映画祭2022優秀芸術賞受賞。制作中の長編ドキュメンタリー「沼影市民プール」は、カルロヴィ・ヴアリ国際映画祭2024にて日本企画としては初となる「First Cut+ Works in Progress Award」を受賞

竹中香子 (プロデューサー・俳優・演劇教育)

2011年に渡仏し、日本人としてはじめてフランスの国立高等演劇学校の俳優セクションに合格し、2016年、フランス俳優国家資格を取得。2021年、太田信吾との共同企画、映画「現代版 城崎にて」では、プロデュース、脚本、主演を担当し、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2022にて優秀芸術賞を受賞。2021年より、太田信吾映像作品のすべてのプロデュースを担当。現在、太田信吾最新作「沼影市民プール」で初の長編プロデュースに挑む。

渡邊一孝 (プロデューサー)

配給会社、俳優事務所、映画祭のスタッフを経て、日英字幕制作、自主映画の制作を行う。2014年に映画の企画から配給・セールス及び日英翻訳/字幕制作を行う株式会社E.x.N(エクス)を設立。日本のローカル性を持った映画や、アジア諸国との共同製作映画をプロデュースする。山形国際ドキュメンタリー映画祭「ヤマガタ・ラフカット」部門プログラムコーディネーター。プロデュース作として、「海辺の彼女たち」など。

司会：新谷和輝(映画研究者 / 独立映画鍋共同代表)

【お問い合わせ】NPO法人独立映画鍋(070-5664-8490) / info@eiganabe.net

## 第25回東京フィルメックス スタッフ・協力者一覧

### 第25回東京フィルメックス実行委員会 / TOKYO FILMeX 2024 Organizing Committee

#### ●特定非営利活動法人東京フィルメックス / TOKYO FILMeX (Nonprofit Organization)

市山尚三 / 理事長	ICHIYAMA Shozo, Chairperson
黒沢 清 / 理事	KUROSAWA Kiyoshi
諏訪敦彦 / 理事	SUWA Nobuhiro
山内真理 / 理事	YAMAUCHI Mari
國貴瑞恵 / 理事	KUNIZANE Mizue
深津純子 / 理事	FUKATSU Junko
篠崎 誠 / 理事	SHINOZAKI Makoto
渡辺真起子 / 理事	WATANABE Makiko
木村正彦 / 理事	KIMURA Masahiko
田中誠一 / 理事	TANAKA Seiichi
中川直政 / 監事	NAKAGAWA Naomasa
北村二郎 / 監事	KITAMURA Jiro

#### ●共催 / Co-presented by:

朝日新聞社	Asahi Shimbun Company
-------	-----------------------

矢野優子 (朝日新聞社メディア事業本部アカウントソリューション1部長)	YANO Yuko (The Asahi Shimbun Company)
多留岳人 (朝日新聞社メディア事業本部アカウントソリューション1部次長)	TARU Takehito (The Asahi Shimbun Company)
松浦敬 (朝日新聞社メディア事業本部アカウントソリューション1部アカウント担当次長)	MATSUURA Takashi (The Asahi Shimbun Company)

#### ●助成 / Supported by :

文化庁文化芸術振興費補助金 (映画祭支援事業)  
 公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京【芸術文化魅力創出助成】  
 在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ

#### ●特別協賛 / Special Sponsors:

シネマイニュティル	Cinema Inutile
-----------	----------------

#### ●協賛 / Sponsors:

デジタメ	digitame
シマフィルム	Shima Film
コネクション	Connection
	KODAK

#### ●協力 / In collaboration with

アテネ・フランス文化センター	Athénée Français Cultural Center
東映	TOEI
東京テアトル	Tokyo Theatre
東京学生映画祭	Tokyo Student Film Festival
Festival Scope Pro	Festival Scope Pro

(提携企画 Talents Tokyo 2024)

●主催: 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、 タレント・トーキョー実行委員会	Talents Tokyo 2024"
●提携: ベルリン国際映画祭 (ベルリナーレ・タレント)	Co-presenter: Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo and Talents Tokyo Organizing Committee
●協力: ゲーテ・インスティトゥート東京	Cooperation: Berlinale Talents
	Collaboration with GOETHE-INSTITUT Tokyo

"

●協力 / Special Thanks to:

相原裕美 AIHARA Hiromi  
 秋山京子 AKIYAMA Kyoko  
 アレックス・ロー Alex LO  
 安藤裕康 ANDO Hiroyasu  
 藤岡朝子 FUJIOKA Asako  
 ショーレ・ゴルパリアン Shohreh GOLPARIAN  
 樋口裕子 HIGUCHI Yuko  
 堀三郎 HORI Saburo  
 池田高明 IKEDA Takaaki  
 井上幸治 INOUE Koji  
 ジャ・ジャンクー JIA Zhang-ke  
 金敬淑 KIM Kyung Sook  
 木村郁子 KIMURA Ikuko  
 小林一毅 IKKI KOBAYASHI  
 ウルリケ・クラウトハイム Ulrike KRAUTHEIM  
 久保添倫成 KUBOZOE Norishige  
 久保田ゆり KUBOTA Yuri  
 松本正道 MATSUMOTO Masamichi  
 松下由美 MATSUSHITA Yumi  
 三好剛平 MIYOSHI Gohei  
 宮本則昭 MIYAMOTO Noriaki  
 中平一史 NAKADAIRA Kazushi  
 中平三紀 NAKADAIRA Miki  
 根本理恵 NEMOTO Rie  
 西嶋憲生 NISHIJIMA Norio  
 西澤彰弘 NISHIZAWA Akihiro  
 新谷和輝 NIYA Kazuki  
 荻野大輔 OGINO Daisuke  
 及川愛 OIKAWA Mana  
 大倉美子 OKURA Yoshiko  
 定井勇二 SADAI Yuji  
 齋藤敦子 SAITO Atsuko  
 斉藤陽 SAITO Yo  
 坂本安美 SAKAMOTO Abi  
 四方智子 SHIKATA Satoko  
 曾我満寿美 SOGA Masumi  
 諏訪敦彦 SUWA Nobuhiro  
 土屋豊 TSUCHIYA Yutaka  
 安田久美子 YASUDA Kumiko  
 吉田佳代 YOSHIDA Kayo  
 堀池 みほ HORIIKE Miho  
 竹中島 広道 TAKENAKAJIMA Hiromichi  
 藤森 朋果 FUJIMORI Tomoka  
 福井 一夫 FUKUI Kazuo  
 佐々木 淳 SASAKI Jun  
 王山 WANG Shan  
 及川愛 OIKAWA Mana  
 松田恵莉 MATSUDA Eri  
 渋谷哲也 SHIBUTANI Tetsuya  
 杉田協士 SUGITA Kyoshi  
 藤原敏史 FUJIWARA Toshifumi  
 アンドレアス・ベッカー Andreas BECKER  
 葛生賢 KUZUU Satoshi  
 折原みよ ORIHARA Miyo  
 松下由美 MATSUSHITA Yumi  
 清水裕 SHIMIZU Yu  
 ビターズ・エンド Bitters End  
 エフネス F-ness

フィリン FILLIN  
 独立映画館 Independent Cinema Guild  
 日本ファクシミリ Japan Facsimile  
 ライツキューブ Rights Cube  
 ステージ Stage  
 東京国際映画祭 Tokyo International Festival  
 UNIJAPAN UNIJAPAN  
 ビーモ VIEMO  
 映像産業振興機構 (VIPO) VIPO  
 JAIHO JAIHO  
 SONIC SONIC  
 クレイトプス株式会社 CREATPS  
 Alberto Alvarez AGUIERA  
 Anais GAGLIARDI  
 Anne-Laure BARBARIT  
 Anocha SUWICHAKORNPOONG  
 Dorian MAGAGNIN  
 Hsiao Wen CHIU  
 Isabelle GLACHANT  
 Raphaëlle QUINET  
 Hussein AKBARALY  
 Ruta SVEDKAUSKAITE  
 Sebastien CHESNEAU  
 Wayne WANG  
 Louise RICHARD  
 Joris BOYER  
 Léonard ALTMANN  
 Lucie VARENNE  
 Fiorella AGUAYO  
 Aemberg ANG  
 Nikola JOETZE  
 Claude WANG  
 Gaiane FRITSCH  
 Theo LIONEL  
 Ara SHIN  
 Cecilia PEZZINI  
 Sabrina ARGOUB  
 Lorna TEE  
 Linda VENTURINI  
 Nuria PALENZUELA  
 Emma RIVAYRAND  
 Chloé VIALA  
 Esther DEVOS  
 Sébastien FOUQUE  
 Théopane BÉRENGER  
 XUAN Trang Nguyen Thi  
 Kendy Chan O.T.  
 Kenix Mak C.Y.  
 Angel OK SHING  
 Alice LEUNG  
 Sylvia TU  
 Tim MARCZENKO  
 Fraser ASH  
 Jillian GROENING  
 Sunny JIANG  
 Casper LEUNG  
 Josie CHOU  
 LIN Xudong  
 Joey ZHANG

WOO Jueren  
 WAN Jiahuan  
 Asian Shadows  
 Cercamon  
 Films Boutique  
 Finecut  
 Les Films du Losange  
 Luxbox  
 mk2  
 Pyramide Films  
 Goodfellas  
 Playtime  
 Indie Sales  
 Alpha Violet  
 Be For Films  
 Homegreen Films  
 Coproduction Office  
 Party Film Sales  
 charades  
 IQIYI  
 Sundream Motion Pictures  
 Fabula Entertainment  
 Rhombus Media  
 Ying Films

●字幕 / Subtitles Producers

アテネ・フランセ文化センター Athénée Français Cultural Center  
 赤松幸洋 AKAMATSU Yukihiro  
 堀 三郎 HORI Saburo  
 今井将人 IMAI Masato  
 桑原広考 KAWAHARA Hirotaka  
 小谷香織 KOTANI Kaori  
 大久保美枝 OKUBO Mie  
 鈴木祐二 SUZUKI Yuji  
 田中雅子 TANAKA Masako  
 玉田友利子 TAMADA Yuriko  
 鳥居真二 TORII Shinji  
 吉岡文平 YOSHIOKA Bumpei

●字幕翻訳・監修 / Subtitles Translators/Supervisors

秋葉亜子 AKIBA Ako  
 市山尚三 ICHIYAMA Shozo  
 大西公子 ONISHI Kimiko  
 神谷直希 KAMIYA Naoki  
 島根磯美 SHIMANE Isomi  
 杉山緑 SUGIYAMA Midori  
 鈴木真理子 SUZUKI Mariko  
 手束紀子 TEZUKA Noriko  
 根本理恵 NEMOTO Rie  
 橋本裕充 HASHIMOTO Hiromitsu  
 樋口裕子 HIGUCHI Yuko  
 藤井美佳 FUJII Mika  
 松岡環 MATSUOKA Tamaki  
 松岡葉子 MATSUOKA Yoko  
 間瀬康子 MABUCHI Yasuko  
 最上麻衣子 MOGAMI Maiko

## スタッフ/ Staff

特定非営利活動法人東京フィルメックス 事務局

## プログラム・ディレクター: Director of Programming

神谷直希 KAMIYA Naoki

久米修人 KUME Shuto

林 未侑 HAYASHI Miyu (タレント・トーキョー/Talents Tokyo)

朱美霖 ZHU Meilin

山崎睦美 YAMAZAKI Mutsumi

曹 瀟瀟 CAO Xiaoxiao (タレント・トーキョー/Talents Tokyo)

富田三起子 TOMITA Mikiko

真木弘智 MAKI Hirotomo

大塚健太郎 OTSUKA Kentaro (808)

市川太一 ICHIKAWA Taichi (808)

田邊友姫 TANABE Yuki (808)

吉海裕三 YOSHIKAI Yuzo

水野綾 MIZUNO Aya

杉山智昭 SUGIYAMA Tomoaki

荒川佳祐 ARAKAWA Keisuke (Pio)

副島論史 SOEJIMA Satoshi (Pio)

## パブリシティ

斉藤陽 SAITO Yo (Playtime)

牧野咲耶子 MAKINO Sakuyako (P2)

## 作品選考委員 Selection and Preselection Committee

神谷直希 KAMIYA Naoki

金敬淑 KIM Kyungsook

朱美霖 ZHU Meilin

松本元子 MATSUMOTO Motoko

森宗厚子 MORIMUNE Atsuko

深津純子 FUKATSU Junko

山崎睦美 YAMAZAKI Mutsumi

明田川 志保 AKETAGAWA Shiiho

青木希羅 AOKI Kiyora

足羽 美香 ASHIWA Mika

藤井 秋 FUJII Shu

浜 知江 HAMA Chie

濱口 芽生 HAMAGUCHI Mei

HAN Yushi

半田 真須美 HANDA Masumi

石田 京介 ISHIDA Kyosuke

岩崎 由希 IWASAKI Yuki

賈 曠霆 JIA Xiaoting

ヤン・ジミン YANG Jimin

木村 美由起 KIMURA Miyuki

小林 鉄平 KOBAYASHI Tepei

小松田 みなみ KOMATSUDA Minami

国松 恵 KUNIMATSU Megumi

桑原 杏奈 KUWAHARA Anna

Li Yang

三澤 遼 MISAWA Ryo

三好 鞠菜 MIYOSHI Marina

長崎徳恭 NAGASAKI Noriyuki

直井 佑樹 NAOI Yuki

吉原 和花 YOSHIHARA Nodoka

奥谷 洋一郎 OKUTANI Yoichiro

澤山 恵次 SAWAYAMA Keiji

小林 星芽 KOBAYASHI Seiga

沈 周 SHEN Zhou

高田 龍太郎 TAKADA Ryutaro

高橋 美幸 TAKAHASHI Miyuki

高久 聡明 TAKAKU Toshiaki

田中 雅子 TANAKA Masako

綿貫 孝哉 WATANUKI Takaya

矢嶋 久恵 YAJIMA Hisae

横山 智彦 YOKOYAMA Tomohiko

吉田 美幸 YOSHIDA Miyuki

吉田 留美 YOSHIDA Rumi

袁 峯楓 YUAN Yinfeng

## 第25回東京フィルメックス / TOKYO FILMeX 2024

## 第25回東京フィルメックス 公式カタログ

発行日 2024年11月23日

発行 認定NPO法人東京フィルメックス  
〒163-0245 東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル45F  
TEL:03-6258-0333 / FAX:03-6258-0339

編集 佐々木淳

デザイン 中平一史(Viemo)

解説 神谷直希

翻訳 田中純子/ジェレミー・ハーレイ/宋倫

林未侑/久米修人/朱美霖

※無断転載を禁ず

## TOKYO FILMeX 2024 Official Catalog

Date of Publication November 23, 2024

Publisher TOKYO FILMeX (Approved Specified Nonprofit Organization)  
45th FL, Shinjuku Sumito Bldg.2-6-1 Nishi-shinjuku, Shinjuku-ku  
Tokyo 163-0245 JAPAN  
Tel: +81-3-6258-0333 / Fax: +81-3 6258 0339

Editor SASAKI Atsushi

Designer NAKADAIRA Kazushi (Viemo)

Film Notes KAMIYA Naoki

Translation TANAKA Junko / Jeremy HARLEY / SONG Lynn

HAYASHI Miyu / KUME Shuto / ZHU Meilin

\*Reprinting or reproducing any content of this catalog is prohibited without permission of the publisher.